

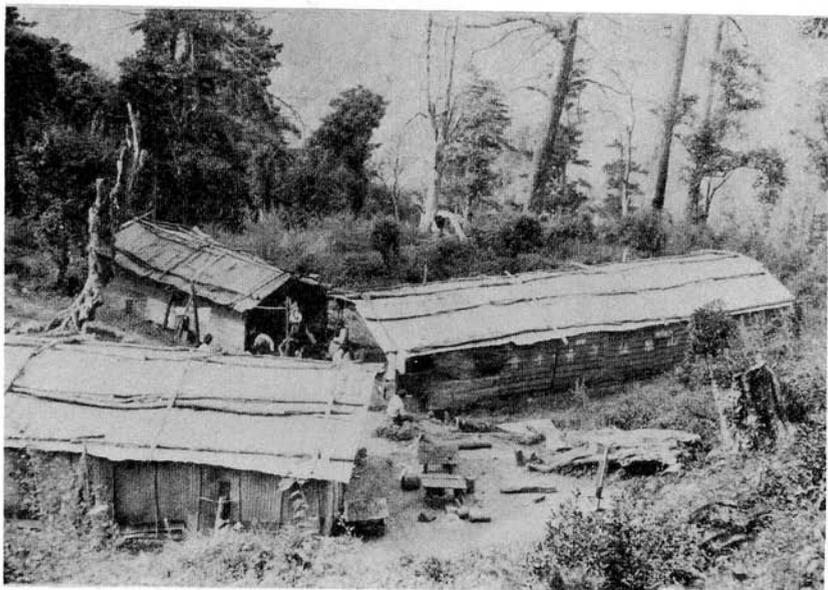
台湾合宿報告書

早稲田大学ワンダーフォーゲル部

1975年8月



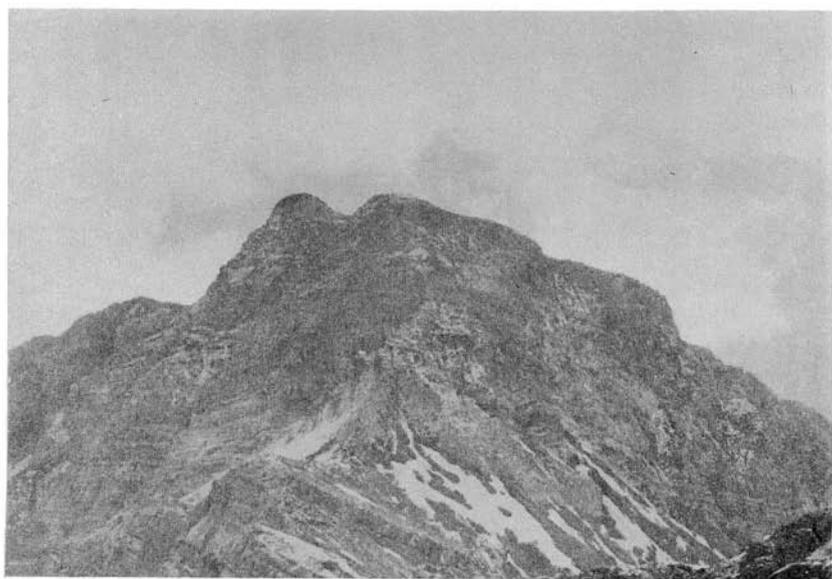
雪山本峰・北陵角を望む(3884m)



武陵より入山初日の七ヶ山荘(2440m)



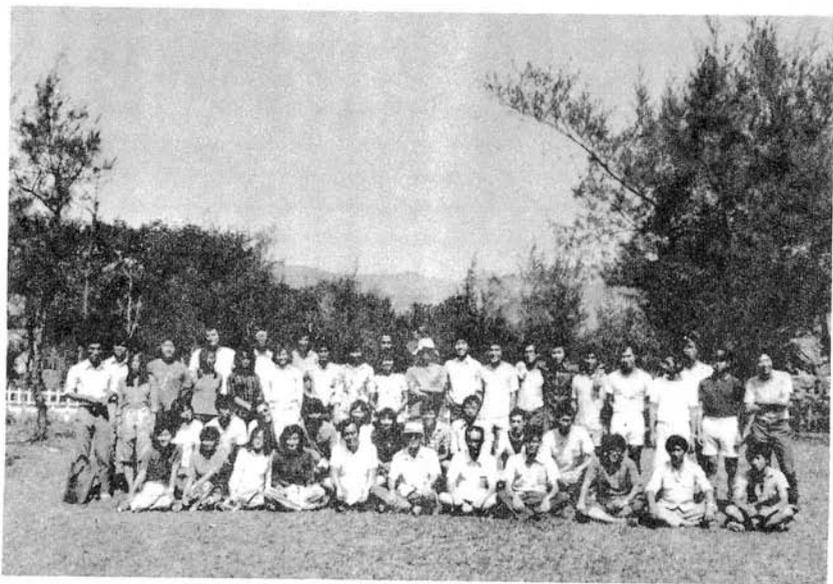
北山より玉山本峰を眺む(3997m)



東山(3940m)
もろい岩肌の東山ルート



玉山頂上にて



金山での交歓会・合宿の打上げ式その翌日

目次

巻頭言

・台湾の山野を歩いて……………部長 神沢惣一郎……………2

・台湾合宿について……………監督 青木正……………8

・台湾合宿を終えて……………コーチ 内田俊夫……………13

・台湾合宿について……………主将 矢口哲三……………15

計画

・主旨・方針……………18

・隊員編成……………21

・行動計画（コース決定まで）……………21

・事故対策・連絡方法……………22

・資金計画……………22

・隊の統制……………22

・隊員表……………23

・概略図……………25

行 動

・実行動表……………30

・上級生班の行動日誌……………31

・女子・新人班及び合流後の行動日誌……………43

・玉山での田嶋OB・岩崎・石山の行動日誌……………51

台湾対策委員会報告

・台湾対策委員会報告……………54

・連絡網表……………55

反 省

・台湾合宿で感じた事……………58

・出発時の遅刻を考える……………62

コーチ 青木 稔

矢口 哲三

係別反省

・雪 山 …… 渡 辺 繁 樹 ……	・感 想 文 ……	・女子 ト レ ー ニ ン グ ……	・ト レ ー ニ ン グ ……	・カ メ ラ ……	・記 録 ……	・気 象 ……	・医 療 ……	・食 糧 ……	・装 備 ……
94		神 林 み ゆ き ……	中 邨 雅 之 ……	木 代 哲 朗 ……	木 代 哲 朗 ……	中 邨 雅 之 ……	中 邨 雅 之 ……	木 の 内 嗣 郎 ……	岩 崎 健 太 郎 ……
		84	83	82	80	76	71	69	64
		・会 計 ・資 金 計 画 ……	・外 ……	・……	・……	・……	・……	・……	・……
		木 代 哲 朗 ……	木 代 哲 朗 ……						
		86	86						



・雪 山	新 谷 博	96
・雪山頂上で思ったこと	石 山 潤	96
・玉 山	赤 津 隆 昭	98
・玉山（主峰登頂）	竹 中 英 二	99
・台湾の自然・玉山	神 林 みゆき	100
・台北市	佐 藤 明 義	101
・嘉義	平 木 裕 美 子	101
・郷愁の嘉義・朝市・露店	長 谷 部 政 彦	103
・阿 里 山	大 島 喜 久 子	104
・高雄・台中のこと	寺 島 弥 生	105
・鵝 鑾 鼻	後 藤 基 保	105
・日月潭とその周辺	大 島 喜 久 子	106
・金山での交歓会	岸 里 悟	107
・早稲田大学同学会のこと	食 品 康 夫	109
・バス・汽車での旅	三 廻 部 秀 男	110



・台湾での食事	霜島茂	111
・南のくに	小野逸子	112
・新・台湾紀行	石田泰	112
・台湾から……へ	石井照久	114

経過報告

・合宿までの部活動概要表		118
--------------	--	-----

公文書

・総長推薦状		126
・中華民国山岳協会からの招聘状		127

台湾合宿関係資料・利用関係機関

・四十九年度台湾合宿関係資料		129
・四十九年度台湾合宿利用関係機関		129
・編集後記		130

卷
頭
言

台湾の山野を歩いて

神 沢 惣一郎

新高山は私の少年時代より憧れの山であった。富士山よりも高い山が台湾にあるということ
が、いつも私の脳裏から離れなかった。それが今度、部関係者のはからいで、はからずも実現
され、こんな嬉しいことはない。

その上、このたびの新高山登頂は私に大きな自信を与えてくれた。このことが私にとってこれ
からの人生への大きな励しとなり、エネルギーの源となることは間違いない。

私が本隊よりおかれて内田君と排雲山荘を出たのは朝の七時十五分であった。この地点はす
で三五〇〇米を越えている筈であるが、山の斜面にはトドマツなどの針葉樹が群生している。
私は歩き出して間もなく、吐き気をもよおした。しばらく休ませてもらい、また歩き出したが
止みそうもない。気力はあるのだが、身体が疲れているのだ。内田君が心配して山荘に戻りま
しょうという。径はナンシン仙溪をまいて登っているらしく、深閑とした高山のしじまの中に
水音のみがきこえてくる。やがて南山への分岐点があり、そこからガレ場となった。ガラガラ
していて足場が崩れ易く、落石の恐れもあり、南アの塩見岳の登りを思わせた。それを登りつ
めると再びしっかりとした小径となり、斜面には針葉樹に代ってハイ松が叢り、ウスキ草の

群落もあった。やがてまたガレ場となったが、今度はかなり急峻な懸崖であり、溪まで遮るものもない。一步一步足もとを確かめながら登る。そのうち鉄柵があり、北山への分岐に出る。その上が頂上であった。十時十五分であったから、登頂まで三時間を要したことになる。

新高山は玉山という本名の如く、風格のある美しい山であった。私は玉山の頂上に立ったとき、登頂することができてよかつたと、つくづく思った。すぐ前には鞍部を距てて東山の急峻な大岩峰が屹立しており、私はその威容に圧倒された。またその左方にはなだらかな北山の峰が見えた。そしてはるか後方には雲煙の中に中央山脈の山嶺を望むことができた。風が強く、時折白い霧状の雲が下から湧き上ってきて視界は閉ざされるが、やがてまたすぐ消えて、真夏の太陽が再び山頂の上に輝いた。

そのうち東山の登頂を終えた本隊が玉山の頂上に戻ってきた。一見したところでは、どこにルートがあるのかと危ぶまれているほどの峻険な山容であるが、最近ルートが開拓されたらしく、林志郎氏らのガイドで登頂することができたのである。私は鞍部から主峰に無事に戻ってきた隊員に一人一人握手を求めたが、中にはにこりともしないで怒っているような顔をしている者もあった。緊張の連続であったのだ。

私は玉山に登頂したいと願っていたが、自分の体力を考えたり、医師や家族の忠告もあって、無理をしてまで山頂をきわめねばならないとは思っていなかった。だから私は登頂については五分五分の気持で臨んだが、結果的にはそれほど苦闘することなく、山頂に達することができた。

私は一昨年夏の鳥海山登頂の際やその前年夏の加賀白山登山の時に、かなり苦戦し、鳥海山の場合には九合目で動くことができなくなり、雨中でビバークするような状態であった。それゆえこのたびの玉山登頂の成功については、いくつかの理由が考えられるが、一つには今年の一月以来、日課として毎晩千米程度のランニングを心がけてきたことと、二つには玉山のアプローチの長かったことがあげられる。初日には阿里山から東埔まで険悪なガードのある長い軌道の路を九時間もかかって歩いたし、二日目には東埔からタータカ鞍部を経て排雲山荘まで八時間もかかって山径を歩いている。この長い行程の間に私の体調は自然と整い、高山の空気にも慣れ、最終日の最終ルートに挑むことができたのではないかと思っている。

私は玉山を下りて全員が嘉義の旅社に寛いだとき、全員無事にこの山行を終えたことが何よりも嬉しかった。そして隊員一同がひげをそり、清潔なワイシャツに着替えて、近くのレストランで、ガイドをして下さった林志廊氏、林朝坤氏、朱華氏への感謝をこめて登頂成功の祝宴をもったとき、私は台湾合宿に参加し、これを遂行できた喜びにひたっていた。そして私の体内からついて溢れ出る力を抑えることができなかった。私はすでに五〇才をいくつか越えていて、周囲の友人たちの動静をみるにつけ、このところ登山のみでなく、万事に消極的になりがちであった。しかしガイドをして下さった林氏は私よりも二つ年下の筈であるが、急峻な山路を実に楽しそうに軽快に登っていった。私はふけこんではいられないと思った。

しかしながら私は山行中、一度ならず参加したことをくやむこともあった。一つは東埔の山

荘で部員の一人が高熱を出したときであり、他の一つは濃霧について新人や女子隊を南山登頂に向わせることに危惧の念をもったときである。しかしその都度、隊長の決断や隊員の犠牲的行為でこれを切り抜けることができたのである。

私は玉山を降りながらも、東埔と阿里山との間にある軌道の上を再び部員が通らなければならぬことを思うと憂鬱になった。というのはあの八十近くもあるといわれるガード橋は足場が悪く、雨でも降るならばスリップして転落する恐れがあるからである。

しかしそのようなことがあったればこそ、下山の喜びが大きかったのではないかと思っている。私たちが阿里山の駅で、嘉義行きの列車が土砂くずれのためにおくれ、待機を余儀なくされているとき、駅のスピーカーから突然きき覚えのある音楽が流れてきた。「青い背広」のメロデーであった。私は下山の解放感もあってなつかしさのあまり、思わず涙が出た。

私たちは下山してから後フィールド・ワンダリングに入ったが、ここでも玉山登頂に劣らない貴重な数々の体験をもつことになった。もし私たちが高山の跋涉のみで帰国したならば、合宿の意味は半減したであろう。そのことを考えると、私はプランニングの卓越さに敬意を表さざるをえない。

私たちは行く先々の大都市で、台湾山岳会の人たちや校友の先輩から、実に暖い歓迎をうけた。これらの方々は私たちのために盛大な歓迎会を開いたり、夕食会に招待したり、街を案内して下さった。台北の歓迎会では、高玉樹交通大臣が激務の間に出席して下さった。これらは

通り一遍の儀礼ではなく、全力的な歓待であり、私は客人や旅人をもてなすということ、こういうものであるかということ、この年になって実地にはじめて教えられた思いである。校友の先輩方が学生時代を思い出し、ワセダ、ワセダといって盃をあげ、校歌を合唱してくれた。私は早稲田大学がこの歓迎を受けるに値するほどの、ゆきとどいた教育をしていたかどうかを考えて、気が重くなった。

私は台湾の各地をまわっていて、日本の統治時代の遺構がかなり残されているのを知って意外に思った。台北でも高雄でもそれを見た。私は日本人がかつて占領し統治した東南アジアの諸国の実情について知るところはないが、おそらく日本人の遺構はことごとく破壊されつくされているのではないであろうか。特に阿里山では阿里山を開さくし、阿里山鉄道を敷設した日本人の先覚者の碑がそのまま目抜きのところに残されていて、博物館にはこの人のミニの立像が安置されていた。私はこれを見たとき、深く感動した。そして台湾の人たちの大度と矜持に強く打たれた。

現在、台湾は日本と同じように、ハイ・ピッチで高度成長を遂げている。そのため山村はさびれ、都市部は活気に溢れている。高雄で聞いた話では、ここでは外国資本を歓迎し、企業投資には無税であるという。どこの都市にいても東芝や日立のネオン塔が立っていたし、日本製の商品が店頭を飾っていた。カラー・テレビも非常に普及していて、都市部はもとより、山村部落の貧しそうな家の屋根にもテレビのアンテナが立てられていた。食物の豊富なこと、目

をみはるものがあり、駅前や繁華街には屋台が連なり、果物や野菜や卵や肉類で溢れていた。アジア諸国の中で台湾が日本に次ぐ豊かなところであることは、まぎれもない事実であった。しかし一方私たちは台湾をとりまく環境が非常に厳しいことも感じないわけにはいかなかった。官庁や工場の壁には、反大陸のスローガンをかいた大看板がはられていたし、海岸や岬にいくと、哨兵が立っていて、厳しい目差しで見張っていた。

私はこのたびの台湾合宿では、忘れ難い数々の印象をもった。台北から嘉義への車中で眺めた、広い青い水田と、その中を流れる水量豊かな凄惨な河川、川原に溢れるあひるの群やあぜ道にうづくまる水牛、また、大豪雨の後、高雄からバスに乗って最南端のガララン岬への途中でみた、延々たる椰子の並木路の景観、古い城門のあったつましい恒春の街、それから台南のオランダ遺跡、赤嵌城から眺めた青い空と紅い鳳凰の花、日月潭に行く途中立寄った胡蝶の街・埔里、故宮博物館ではじめてみた典雅な甲骨文字、めくるめく真夏の太陽に輝く、奇岩・怪石の野柳の海岸等、次々と私の脳裏に浮んでくる。しかし数々の思い出の中で最も深い印象を残したのは、何んといっても金山海岸で行なわれた台湾合宿別れのキャンプ・ファイアーであった。この催しは特に校友・陳守珪の熱意と配慮によるものだが、台湾の学生やアメリカの青年教師もこれに加わって、別れを惜んだ。折からこの地に来ていた花蓮港の少女少女合唱隊がこのページメントに加わり、数々の斉唱をきかせてくれた。特に中国語で唱った「瀬戸の花嫁」はすばらしかった。私は少年少女の美しいメロデーを天使の贈物としてききいった。

台湾合宿について

青木 正

この度わが部は台湾において約一ヶ月間の合宿を行った。その合宿報告にあたり、監督として、また合宿における隊長として二、三述べたいと思う。

今合宿の感想や反省については他にゆずるとして、先ずここでは、この時期に海外合宿を行ったことの意味について監督としての立場から触れておきたい。

従来から私は、部の海外遠征に関してはどうちらかといえば慎重論の立場をとってきた。部員の経済的負担が極端に増大することによって入部希望者が制約されることは避けなければならぬと考えたからでもあるが、それ以上に海外遠征が、他に誇示せんがためのものであったり、国内には魅力ある場所が少なくなつたという単にそれだけの理由で行われる場合には賛成しかねるからである。

確かに国内の自然は乱開発によって破壊され、われわれの活動の場を狭めてはいるが、自然は、それが同じ場所であっても常に新鮮な驚きや感激を与えてくれるのではないだろうか。その意味でわれわれの活動における自然とのかかわりのあり方は、場所もさることながら、もっと内面的なものだと思われるのである。

ところで私が今回の海外合宿を認めたのは、部が一つの壁に突き当たっていると思われる現在、一步外へ出て部活動を見直すことも意義あることだろうし、この合宿によって部活動の転換を促すこともできるのではないかと考えたからである。そして、海外へ出たいという学生の欲求を満足させることによって付随的に、部員数の減少に歯どめをかけられるかもしれないという期待があったことも事実である。

さて合宿地を台湾にしたことについて、いくつかの批判があった。折角海外へ出るにしては安易すぎるのではないかというのがその主なものであったが、今回現役が意図したものは、一代で完結することを前提に新人も含めた全員で行う合宿であり、計画の初期の段階ではどの程度の新人が入るかも明らかでないことから、一応妥当な選定といえるのではないかと思う。

なお、別の批判についてもこの際特に触れておきたい。それは、批判というよりは心配というべきであろうが、「日台間の国交が正常がない時になぜ行くのか」という点についてである。私はこのような問いかけに対して、「それだからこそ行くのです」と答えてきた。わが部は十数年前にも彼の地を訪れているが、このような時にこそ旧交を暖め、友情を裏切ることをないようにしたいと思ったからである。

話がそれるが、田中内閣が日中国交回復を急ぐあまり不条理にも台湾との関係を断ってしまったことや、猫も杓子も中国中国と、義理も人情も捨て去って恥じないいくつものスポーツ団体に対する憤りの気持が私には強かった。勿論、中国との友好関係が不必要だというのはな

い。どこの国とも仲よくすべきだと思う。だが、大きな家に住んでいる子と仲よくしたいからといって、小さな家の友達を捨てるような子供にわが子はなつてほしくないし、インツブ物語のコウモリのような立場にわが国はなつてほしくないと思うのである。

いずれにせよ私は、台湾の人々が悪感情は持たないとしても、あまり良い感情では迎えてくれないのではないかと思つていた。しかしそこで会つた人達は皆気持よく接してくれたし、例外なく親切であつた。

「たまたま今は不幸な状態になつてゐるけれど、われわれ民間人同志はいつまでも仲よくしましょう」と。私は荒らされることのない雄大な自然に接することができたと同じように、いやそれ以上に深い感動を覚え、本当に台湾に来てよかつたと思わずにはいられなかつた。

さて前にも述べたが、この合宿は一代で完結することを前提としたために、この準備から実行までの期間が非常に短いものであつた。にもかかわらず無事計画を遂行出来たのは矢口主将以下現役部員の努力もさることながら、多くの人々のご支援とご協力があつたからこそであり、部の運営について責任の一端を担う者として感謝にたえないところである。

特に計画の段階から合宿終了まで一方ならぬお世話になつた中華民国山岳協会総幹事の蔡礼棠氏をはじめとして、計画の細部に至るまで熱心にご指導いただいた国際連絡組組長の林煥章氏、副組長の高全輝氏、同じく山岳協会の役員をされている林樹封氏、洪金寿氏、王雲郷氏、蔡景璋氏、黄鑫羽氏、王斗吉氏、歐陽合興氏、カメラマンの周文氏、山岳協会の役員であると同

時に早稲田の先輩でもあり二重の意味でお世話になった陳守珪氏、野牛隊の盧金水氏、吳宗吉氏、そして野牛隊の一員で今回雪山から玉山までわれわれと山岳地帯全ての行動を共にし、五十才という年令を感じさせない若々しい山男林志郎氏、やはり野牛隊のメンバーで玉山へ同行された林朝坤、朱華の両氏。

そして雪山からの帰途、環山で思いもかけぬ接待をしてくださった詹秀美女史。そして可愛らしいその子供達。私は、かつての日本名をヨシコさんというこの一家一族から受けた歓待を終生忘れないだろう。十人を越す見知らぬ異国の登山者に親身も及ばぬもてなしをしてくださったばかりではなく、河原にでも天幕を張る覚悟のわれわれに家を一軒まるまる提供されたのである。私は親切ということについて私自身いかに貧しい考え方しかしていなかったかを反省せずにはいられなかった。

歓待ということでは各地の同学会についても思い出さないわけにはゆかない。私は仕事の関係で、早稲田の学生やOBがよく台湾同学会のお世話になることを知っていたので、一度ご挨拶に伺わなければと思っていた。しかし今回のわれわれは山岳地帯での活動を主としていたし、総勢三十余名という大世帯ではご迷惑をかけるだろうと考えて事前の連絡はしていなかった。台北到着後、訪問のご挨拶だけする心算で林慶豊氏をお尋ねしたが、結局同氏のお骨折りで各地同学会からご招待をいただき、大勢の先輩をおさがせする結果となってしまう。

高雄同学会の盧利吉氏、林石鼓氏、陳仁和氏、凌先化氏、陳壬癸氏、陳木川氏、台中同学会

の王庚海氏、頼植森氏、呂俊傑氏、廖忠雄氏、林玉樹氏、簡仲祁氏。台北同学会の長老劉兼善氏、交通部長の要職を占められている高玉樹氏、監察委員の陳慶華氏、それに林東淦氏、張星賢氏、王捷陞氏、宋丙堂氏。とにかく数え切れないほどの先輩のみなさんから歓待を受けたのである。そして声高らかに歌った校歌。同じ早稲田に学んだというただそれだけのことでこれほど暖かく迎えられた驚きと感激。その幸せを強く感じないではいられなかった。

さらに私は、この合宿を物心両面から支えてくれたOB、OG会の援助についても心からお礼を申し述べたいと思う。多額の寄附を寄せられた数多くのOB、OGそして台湾合宿対策委員として多忙の中にもかわららず協力を惜しまれなかった山口純一君、木村和巨君、塚崎義樹君、斎藤垂基夫君、土屋猛君、これらすべての人達の支援があつてはじめて成し得た合宿であつた。また団長として自ら先頭に立って部員の士気を鼓舞された神沢部長の熱意も、合宿成功の大きな要因であつた。あらためて敬意を表する次第である。

最後に、この合宿に寄せられた各位のご好意に対し重ねて深甚なる謝意を表するとともに、今後とも一層のご指導とご鞭撻をお願いするものである。

(昭和五十年一月四日)

台湾合宿を終えて

内 田 俊 夫

矢口主将以下現役諸君は、昭和四八年々末に、ワンダーフォーゲン活動の新しい分野の開拓を海外に求め、夏合宿を台湾で行う旨、決意した。

合宿地に台湾を選んだ主な理由としては、国内でやるのと同じような形態で夏合宿を海外でやりたいということ、いくつかの候補地をあげ、その中から、日本に近く交通費など経済的負担も少なくすむ、過去に部としても経験済みで中華民国山岳協会に知人がある、言葉が通じ情報を入れやすい、国は小さいが自然は大きく活動の場として全く不足はない、などの点から台湾が最も実現可能性が高い、ということであった。

それ以降、不慣れのため、いくつかの失敗と不手際を重ねながらも、諸先輩の援助のもと、準備が徐々に整い、ともかく合宿を実行に移すことができた。

青木監督が隊長として全コース現役と行動を共にし、陣頭指揮にあたられ、その補佐として青木コーチが前半、私が後半を受けもつことになった。後半からは部長先生、田島OBが参加され、隊の構成は充実したものとなった。

台湾の自然はまさに雄大で、国が管理しているためか施設はよく整備されており、林志廊、

林朝坤、朱華、三氏の指導のもと、我々は全く不安なく山岳活動を満喫することができた。そして山からおりて、フィールドワンダリングで、我々が接したものは、町からあふれんばかりの豊富な食べ物、決して豪華ではないが豊かな生活、それに親切で礼儀正しい人々であった。また、高雄、台中、台北の各市では同学会の皆様から盛大な歓迎をうけ、一同早稲田大学に学ぶことのできた幸せをしみじみ感じたものであります。

中華民国山岳協会の皆様には、合宿の準備から最後に至るまで全てお世話になり通して感謝の気持ちを言葉に表わすことは困難であります。

当初、この合宿は通常の国内合宿の延長として考え、現役の力だけで遂行するという、今から考えると少々思い上った計画でしたが、資金の問題、遭難対策、現地山岳協会への協力要請、在日本部の設置等、現役だけではどうすることもできない問題につきあたり、何度も立往生しそうになりましたが、その都度、諸先輩の暖い御指導と御援助をいただき、どうにか合宿を遂行することができました。

今合宿全般を通じて感じとられたことは、合宿準備から帰国後の整理にいたるまで、今まで合宿とは、何もかも勝手の違った新しい体験であり、そして様々な困難はあったが、ともかく今合宿を完遂したということの自覚は、部員一人ひとりに、確かな自信と、将来の大きな力の基礎を与えたのではないか、ということです。

台湾合宿について

主将 矢口 哲三

思っておけば、一年前の部員総会の席上、私は所信表明演説を行ない、その中で「海外への道」を開く事を第一にあげました。活気に満ち、魅力に富んだ部生活及び部活動を行ないたい、そして全部員が満足できるものを見出したい、転換気にあるといわれて来た部の現状を私なりに把握し、見出したものが「海外遠征」でした。

幸い、部員の賛同を得て、来年の夏に従来の夏合宿の延長として、新人を含めた現役合宿を行なおうと言うことで話がまとまり、候補地については、経済的・時間的・技術・体力の諸条件等も考慮の上、「台湾」を選定しました。その後、今合宿の計画が着々と準備され、団長には神沢部長先生、隊長には青木監督がお引き受け下さいました。さらに村井総長の推薦状及び中山協の招聘状を無事入手し、正式に「早稲田大学訪華親善ワンダーフォーゲル隊」という名称を掲げることができたことは、大変喜ばしい事でした。

さて、台湾というところは、周知の如く、現在、日本との間には国交断絶という不幸がありますが、今もって多方面に渡り日本との交流がなされており、十年前には、我部も彼の地を訪れ広くワンダーフォーゲル活動を知らしめ、早稲田大学の名を高めてまいりました。私達は八

月五日出発以来、八月三十一日にかけて、活動地域は、台湾のごく一部でありましたが、各地において予想以上の歓迎を受け、友情を深めてまいりました。また両国の親善に多少とも寄与できたことは、素晴らしいことであります。

さらに、遠征の第一目標であります、上級生班による雪山（三八八四m）及び新人・上級生班による玉山（三九九七m）の登頂に成功し、多大な成果をおさめた事も事実であります。彼の地には、まだまだ豊かな、雄大な自然及び美しい風土が残されており、将来、遠征のりっぱな候補地と成り得るでしょう。次回は、今回、惜しくも入山許可証を入手することの出来なかつた中央尖山・南湖大山の縦走計画を実現したいものです。

今合宿を終えて、これからの現役部員に私が望むことは、今合宿を海外遠征のひとつの起爆剤と心得てほしい。そして今合宿から部員それぞれが、自分なりの意義を見出し、常に新規な発想で、ワンゲル及び自己の可能性を更に拡大してほしいということです。また何事においても、チャレンジの精神とその情熱を持って対処してほしい。然らば、近い将来さらに素晴らしい海外遠征が実現されるでしょう。

最後に、今合宿の実現にあたり、OB、OGの皆様の御支援、御指導に感謝し、現役を代表して、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

計

画

方針

1 主旨・方針

国内で行なわれている合宿の延長として、現役だけの力によって行なおうということで委員会で十一月に作成した「年間活動を行なう心構え」にそつて、次のような主旨をまとめた。

我々早稲田大学ワンダーフォーゲル部は、開拓性と放浪性の二大精神を根幹し、創立以来、未知なる自然・地域へのあくなき探究を繰り拡げてきた。人間は本来、自然・未知なるものへの憧憬をもっている。そして我々が自然へとアプローチして行く動機もこれである。我々の活動舞台は変化に富んだ自然と未知の地域といえよう。ここで、我部における開拓性とは、より魅力ある自然・未知・未開の要素に富んだ地域の追及であり、同時に、広く個人の内面における新たな体験を通じての自己発見である。放浪性とは、我々の活動舞台を広く平面の拡がりとして積極的に求めることであり、我々のいだくromanを満足させることである。そして我々は、開拓性と放浪性を通じ、自己の情熱をその対称へとぶつつける可能性の追及と自由なる

創造意欲を常に發揮していたい。そうして、我々は人間的成長を遂げるものであるといえる。

我部は、この二大精神を基調とし、ほぼ全国にわたる主要な山岳地帯はもとより、ひなびた山里・名もない丘陵にもその足跡を残して来た。これらの活動は、部員の旺盛なる情熱と意欲とを最大の武器として、様々な困難を克服することにより達成されてきたのである。去年なしえなかったものを今年に、今年達成されなかったものは来年にと、その活動を拡大してきたのである。

しかし、二十四年間という歴史は我部に一つの矛盾を生ぜしめた。それは部員の形骸化とそれにもとづく活動パターンの形骸化ということである。二十四年間の活動を通じて、各代における部員の差はあるにせよ部活動における創造（発想）様式とそれにもとづく行動パターンを画一的なものとして存在せしめたものである。

従来の発想様式を継承していくことは、自分の代における情熱と意欲とを活動のより尖鋭化によって表現するところとなる。我部の対称が主に自然でありとりわけ山であることを考えるに、この傾向は山岳部的領域に接近することを必然化し、ワンダーフォーゲル活

動本来の姿から大きく逸脱する危険性を含むものである。

従って発想方法を継承し、かつワンダーフォーゲル活動の上限を認識する場合に、我部の足跡が日本全国に残されているという歴史的事実に直面したとき、国内における活動（特に無積期）には魅力がないものとして誤解されることにもなる。そして、部の方向は積雪期にその活路を求め、さもなければ、部員の情熱と創造意欲を減退せしめ、部の沈滞という悲劇的状况を生み出すことになる。仮りに、季節の差異とりわけ積雪期活動に部活動の活路を求めにしても、従来の発想方法を継承して行く限り同様のジレンマに陥ることは容易に想像される。従って我部の現在におけるこの危機的状况を脱する為には、新たな発想方法のものと、新たな活動目標を見出さなければならぬ。

我々は常に自由な発想のもと、部員の個性・志向を常に活動にかさなければならぬ。そして、新たな具体的目標と活動パターンを見出す必要がある。古きを温めるべきであることはもちろんであるが、それに拘束されてはならない。形骸化されたものを単に受け継ぐだけでは我部における開拓性と放浪性、そして部員の創造意欲、情熱が失われるのは当然である。

また、二十四年間という歴史は、日本における自然・特に無積期の自然には産業開発がすみ、しだいにその魅力を失いつつある。我々が情熱をかたむけて長期にわたる合宿を行う魅力ある地域がしだいに縮少しているのが現状である。そして、今日のように情報化が進行し、それとともに画一化が進んでいる日本では、我々を引きつける新鮮な、未知なる地域が少なくなっているといえる。

さて、以上の様な状況において、我々は次の様に考えるものである。

まず形骸化を打破する為には、部員個々人が抱いている素朴な希望を最大限に実現することである。それは究極的には、最大公約数の満足として具現化されるにしても、それに至るまでの過程において、部員個々人は、己れの満足を最大限に満たす為めに、旺盛な獲得斗争を演じることになろう。この過程における活気と斗争とが創造意欲の回復に大きく貢献するものと確信する。現在我部においては、海外をめざす素朴な希望が部員個々人にいだかれてゐる。我々は、それぞれの夢と理想をもって、日本の外へ新鮮な空気を求めているのである。この部員の希望を現実化することは、我々の意欲と情熱とを喚起する効果的な手段となると

同時に、我々の目的ともなりえる。しかも、従来過去において新人等の問題により困難に思われていた夏合宿においてこれを遂行しようとするものである。

次に、我々は決して日本において魅力ある地域が皆無とは思っていない。しかし将来においては、部の海外への夢が当然に拡大されて行くであろう。その為に我々は今回の海外合宿に至るまでの過程における困難さや、その問題点となるものを今後の資料として残し、海外への志向の一つの踏み台とし、我部のワンダーフォーゲル活動の可能性を拡大し、その選択の幅を広げたい。そして今後の海外合宿の実現を容易なものとしたい。

ところで、海外合宿地を決定するにあたって、その制約要因とは、各人の希望という積極的要因と、経済的・時間的という消極的要因とが存在する。とりわけ経済的・時間的要因は大きな制約となっている。すなわち、我々は夏合宿において海外合宿を計画している以上、当然新入部員を同行させることを前提としている。従ってこの経済的負担を考えた場合に大きな期待をすることは誤りである。また、我々自身にしても一年弱の期間において大きな財力を蓄えることはむずかしく、我々が新人部員の資金を一部負担するにしても、

限度が存在する。また、我々の試みは一年度内で完結しなければならぬ。来年度は再び新たな発想のもとに行動しなければならぬからである。従って我々の発想とそれに基づく活動を一年度で完結させて、ワンダーフォーゲル史に一つの実証として残すにとどまらなければならぬ。

以上の様な経済的・時間的制約を考慮することにより、また我々の活動内容を十分に満足させてくれる地域として、台湾が合宿地としてえらばれるに至ったのである。

台湾は、その面積約三千六百平方キロメートルのところに、百四十二座の三千メートル以上の山々を連ねその間を多くの河川が深い峡谷を刻んでいる。その気候は、高度により四種類の変化に富むなど知られていないことであり、我々の興味をそそるものである。また、文化の面においては、先住民高砂族文化・大陸からの中国文化・スペイン・ポルトガルの文化を含むなど豊富であり、日本とも古くから様々の関係で結びついている。

我々は、台湾を今年度の最大の目標として掲げ、台湾全域にわたる我々のワンダーフォーゲル活動をしたも思う。台湾に関しては、我々はその未知なるところ

大である。部員は全員でその資料の収集にあたって来たことにより、この計画が我々自身の計画であることを確認することになった。そして、部にも活気があらわれているのである。

台湾での我々の活動の基調とするものは、開拓性と放浪性にもとづく自然・文化の探究である。それは自然・特に山岳地域における全部員の行動と、台湾の文化の実際の体験である。そして、これらを通じて、我々の経験的視野を拡大し、学生としての人間的成長をはかるものである。

台湾での我々の具体的活動は次の様に三段階に分けておこなわれる。まず①上級生による雪山、あるいは南湖大山の縦走形態である。次に②我部の部員全員による玉山への登頂、これらを二週間にわたり部の総力を上げておこなうことにする。そして、③残りの一週間はフィールドワンダリングにあてることにする。我々は台湾の全域を通じてよりよく自然と文化を理解せんとするものである。

2. 隊員編成

現役合宿であることから、部を代表する神沢先生に団長を、現役を直接指導していただいている監督に隊

長を、そして、両コーチに副隊長を引き受けていただきたいという我々の希望を監督に申し入れ、それぞれ受け入れていただいた。

隊は、地域による体力的・技術的なもの、それに経済的なものからして、上級生班十三名と女子・新人班十八名に分け、雪山は上級生班だけで行動し、その後は全員行動することとした。部長、内田コーチ、田嶋OBは日程の都合で途中参加してもらうことにした。女子・新人班には、四年部員が二名つくことにしていたが、四年の加藤がトレーニング中の骨折のため不参加となり、サブリーダーを三年の木の内に変更した。隊員は総勢三四名になった。

3. 行動計画

渡航便に関しては、学生である以上、最小限の経費で合宿をおこないたい、決してハデな合宿にする必要はないということ、往復船を使用することにした。しかしながら、日本と中華民国において国交断絶という不幸が生じてから、東京―基隆の船は勿論の事、飛行機の便数も限られていた。したがって、我々はまず東京―沖縄間を船、沖縄―台北間を飛行機ということに渡航方法を決定した。ところが、沖縄―台北間の飛

行機の確保がうまくいかず、七月初旬まで待つことにし、そして、あまりあてにならないということで、せめて上級生班だけでも東京―台北間を飛行機と決定し、渡航による体力の消耗も防止することにした。しかし、七月中旬に入っても沖繩―台北間往復の飛行機がとれない状態なので、全員東京―台北間を飛行機を使用することに変更した。

つぎにコースに関しては、上級生班は当初日本隊が入っておらず、また技術的・体的にも我々の力を十分に發揮できる中央尖山・南湖大山の縦走計画を立案した。この地域は、外国隊には許可されていない地域であったが、前回の台湾遠征の成果が認められており、中山協からも政府に交渉するというところでこの計画をおし進めてきたが、何回かの政府との交渉の結果許可が出ず、結局現在外国隊に公開されている雪山に変更した。玉山については、当初の通り全員で登ることにした。

フィールドワンダリングは、当初四パーティーぐらゐに分散してそれぞれのパーティーの志向に合わせて、その地域・形態をとることにしていたが、渡航便の変更により日数が減ったために、全員同一行動をとることにした。

4. 事故対策・連絡方法

従来の合宿の事故対策と同様、合宿中の各種事故を想定し、対策を検討した。特に問題となったのは、毒蛇（百歩蛇）の件であったが、現地への電話・手紙の問い合わせ及び偶然来日した中山協の総幹事・蔡礼寒氏の助言により解決した。なお、事故発生の場合には、中山協のガイド氏の意見を参考にし、あとはすべて自力で処理することとし、左京連絡所は山口OBを中心とする台湾対策委員会に依頼し、現地連絡所は中山協の国際連絡組々長・林煥章氏に依頼し、お引き受け願った。隊員の全員には、保護者同意書をとらせることとした。

5. 資金計画

これについては、反省の項の会計・資金計画のところを参照して下さい。

6. 隊の統制

ひたすら、「海外」のムードを盛り上げることに注意した。特に、下級生には、今までにはなく計画段階で積極的に話しかけるよう心掛けた。事前の合宿等も海外準備合宿などと名うって行ったり、富士山登山大

会を全員で行ったりした。スクーリングは、台湾の地域性を意識しながら行った。

現地では、神沢団長及び青木隊長により、計画に従って、適切な制限・指導が行われた。

7. 隊員表

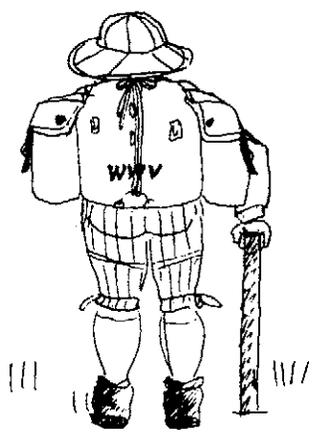
団長	神沢 惣一郎	(53才)	隊員	村田 孝	(24才)
(部長)	一文 卒		(主務)	政経。四年	
	早稲田大学教授			岩崎 健太郎	(23才)
隊長	青木 正	(41才)		商。四年	
(監督)	教育 卒			木代 哲朗	(23才)
	早稲田大学校友会			法。四年	
副隊長	内田 俊夫	(34才)		中 邨 雅之	(22才)
(コーチ)	丸五内田 働			商。四年	
同	青木 稔	(29才)		赤津 隆昭	(21才)
(コーチ)	理工 卒			政経。三年	
	東京カラー工業社			木ノ内 嗣郎	(26才)
隊員	田嶋 達夫	(28才)		二文。三年	
(O.B)	政経 卒			渡辺 繁樹	(21才)
	三菱重工 働			教育。三年	
"	矢口 哲三	(23才)		新谷 博	(21才)
(主将)	理工。四年			商。二年	
				石山 潤	(20才)
				教育。二年	
				久保 博昭	(21才)
				法。三年	
				竹中 英二	(20才)
				商。二年	

隊員

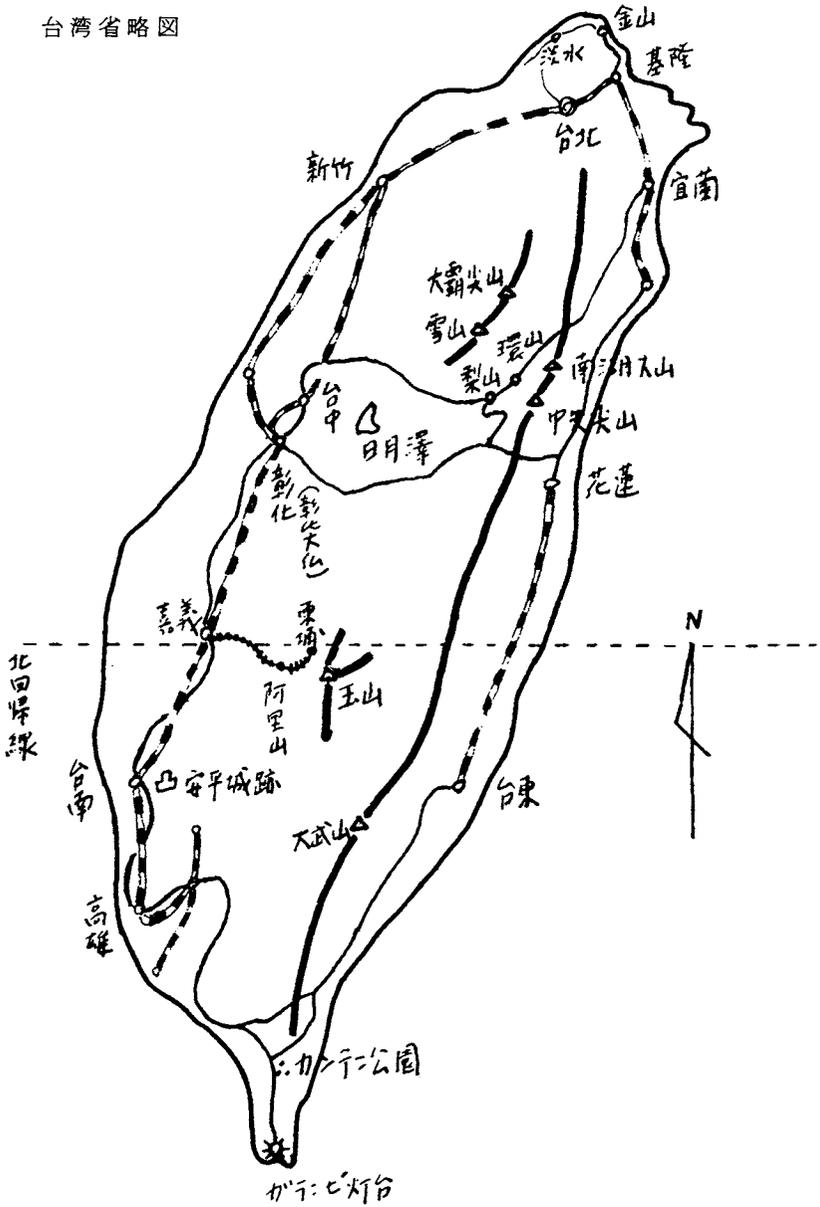
二 文 ・ 一 年	長 谷 部 政 彦	一 文 ・ 一 年	提 昭	社 会 ・ 一 年	霜 鳥 茂	社 会 ・ 一 年	佐 藤 明 義	後 藤 基 保	倉 品 康 夫	一 文 ・ 一 年	岸 里 悟	商 ・ 一 年	石 田 泰	社 会 ・ 一 年	石 井 照 久	教 育 ・ 二 年	神 林 み ゆ き	教 育 ・ 二 年	三 廻 部 秀 男
	(21才)		(21才)		(18才)		(19才)		(19才)		(21才)		(19才)		(20才)		(20才)		(20才)

隊員

一 文 ・ 一 年	平 木 裕 実 子	教 育 ・ 一 年	寺 島 弥 生	一 文 ・ 一 年	小 野 逸 子	一 文 ・ 三 年	大 島 喜 久 子	商 ・ 二 年	三 浦 隆 男	二 文 ・ 一 年	松 波 信 博
	(18才)		(18才)		(18才)		(20才)		(19才)		(19才)



台湾省略图



行

動

実 行 動 表

	先 発 隊	後 発 隊	部 長 隊
8/5	羽 田——台 北		
6	台 北		
7	台 北——武陵山荘(1,860m)		
8	武陵山荘——七 山荘(2,440m)		
9	七卡山荘——3.6.9山荘(3,100m)		
10	停 滞		
11	雪山主峰ピストン		
12	雪山北峰ピストン	羽 田——台 北	
13	3.6.9山荘——武 義	台 北	
14	環 山——台 中——嘉 義	台 北——嘉 義	
15	嘉 義		
16	嘉 義——阿里山		羽 田——台 北——嘉 義
17	阿 里 山		嘉 義——阿里山
18	阿 里 山——東 埔		
19	東 埔——タータカ鞍部——排雲山荘(3,500m)		
20	排雲山荘——玉山主峰——東山——玉山主峰——北山——北々山——排雲山荘		
21	排雲山荘——南山ピストン——東 埔		
22	東 埔——阿里山——嘉 義		
23	嘉 義——高 雄		
24	高 雄——ガランビ灯台——カン・テン公園——高 雄(高雄同学会レセプション)		
25	高 雄——彰 化——台 中中 (台中同学会レセプション)		
26	台 中——日月潭——台 中		
27	台 中——台 北 (台北同学会レセプション)		
28	台 北——金 山 (キャンプファイヤー)		
29	金 山——台 北 (中山協レセプション)		
30	台 北 (野牛隊レセプション)		
31	台 北——羽 田 (解 散)		

注) 1. 中山協 …… 中華民国山岳協会
 2. 野牛隊 …… ガイド氏所屬山岳会

上級生班の行動日誌

八月五日（晴れ）

七・〇〇羽田集合 九・三五羽田出発

十二・〇八台北着 十三・三五学苑着

台湾合宿出発の日。羽田に着いた時、あれ程不安であつた心がいやに落ち着く。案内嬢に外貨交換とチェックインの方法を確認し、一人一万円をドルに交換する。羽田の混雑は救いようがない。九時発の予定が三〇分余りも遅れる。後発隊の諸君と神沢部長御夫妻・山口・木村両OBに見送られて元気に出発する。

機内よりのながめはすばらしい。海と陸と、山と町とが一べんに見える。日本も以外と広いものだ。九州上空というアナウンスで下を見ると桜島が噴火していた。煙がもうもうとわき上っていて見事である。

十二時近くになると、海の中に島が見え始める。そして次に、緑色をした陸が見えてきた。台湾上空にさしかつたのだ。陸の色は緑、所々赤茶けた地肌が見え、それをぬりようにして白い道路が走っている。遠くには青くかすんだ山がそびえている。我々が登る山はどれなの

だろうか。

十二時八分。台北空港に着く。空港の周囲は緑が多く水田も見える。羽田とはかなり趣が異なる。生まれて始めて見る異郷の景観に興奮する。しかし空航わきに並ぶ軍用機を見た時、一瞬心が冷えた。

空航建物の中はずいぶん静かな印象を受ける。人が少ないせいなのか、それとも緊張しているせいなのか。部員も言葉少ながちである。

空港を出ると表玄関に台湾山岳協会の人が出迎に来てくれていた。蔡礼樂氏、林煥章氏、周文氏、歐陽氏の方々、対面の握手をし、記念撮映をし、すぐに台山協で用意してくれたマイクロバスで宿泊所学苑に向かう。

学苑のロビーに全員集まり、改めて対面の挨拶をする。蔡氏・歐陽氏にはこの五月にお会いしているのでなつかしかった。

ここで簡単な打合せをする。台山協では、我々の訪台を歓迎し、今夜歓迎会を用意しているという。我々は喜んで御招待を受けることとなった。

二時半頃台山協の人と別れ、全員部屋に入る。A部員、思わず「これは収容所だ。」薄緑色はげかかった壁、天井には扇風機が一台と裸電球が一個つるさがつている。そして、ゴザを敷いたベッドが数台並んでいる。山登り

に來た我々には豪華なホテルより、この方が心落ち着くというものだ。台湾に着いて始めて一息入れる。三時半頃、買付けの下見、昼食・市内見物をかねて外に出る。日ざしは強いが空気はいたってきれいだ。

七時頃、歐陽氏の出迎えてレセプションに出かける。場所は榮星川菜餐廳。りっぱな歓迎会に一瞬たじろぐ。我々は著名な遠征隊であるかのような錯覚に陥いる。本場の中国料理と紹興酒とを食べ、そして飲む。中国の人は実になごやかだ。初めての経験にぎこちなくなっている我々を優しく解きほぐしてくれる。ただ感激するばかりである。

十時十分学苑着。明日の予定を確認し寝る準備をする。まだレセプションの余韻が酒の酔いと一緒に残っている。それにしても、この「収容所」に寝るものがあの豪華なレセプションに招待されたかと思うとおもしろい。十一時、台湾の初めての夜をゴザの上に寝る。

八月六日（晴れ）

- 七：〇〇起床 九：〇〇同学会への訪台挨拶
十二：〇〇買い付け 一四：三〇台山協事務所へ
打合せ 二三：〇〇就寝

学苑の食堂で朝食を取る。メニューは目玉焼、キャベ

ツイタメ、モヤシイタメ、南京豆イタメ、おかゆ、蒸し饅頭、etc。言葉が通じないので「コレ・コレ」と言いながら皿によそってもらう。昨夜の料理にも驚いたが今朝の質素さにも驚く。どうも極端過ぎるのは胃によくない。全員少食であった。九時に歐陽氏の案内で同学会の林慶豊氏の事務所に向かう。かなり老朽化したバスに乗る。日本ではまず見られない古さである。めずらしいと思っただら行きかうバスは皆似たりよったりであった。

林慶豊氏は昭和十六年に早稲田の建築科を出られたそう、現在は台北市の都市計画など大きな仕事にたずさわっておられるとのことである。我々はここでも大きな歓迎を受けることとなった。早稲田の後輩が総長のメッセージを持って訪れたということで、高雄・台中・台北の各市で歓迎会を催していただけのこととなった。

林氏の事務所で武陵―雪山―環山の地図のコピーを入手、コースと沢とを記しただけのものだが、我々の地図の不明部分を十分補ってくれた。

十一時半頃事務所を出て学苑にもどる。ただちに二・三年と岩崎・中邨は歐陽氏の案内で買い付けに行く。隊長・副隊長・村田・木代は二時半に台山協事務所に向かう。事務所はちょうど日本山岳会程の広さで、三台の扇風機が唸っていた。壁には台湾著名の山々のパネルと外

国登山隊（日本のほとんどだが）のペナントが飾ってあった。ここでガイドの林志廊氏、林朝坤氏を紹介される。野牛隊のメンバーだそうである。

打合せは雪山登頂から始まる。我々の出した計画に対して、台山協側は外国登山隊があまりとらない武陵―東峰―主峰―環山のコースを紹介してくれた。これだと東峰・主峰・北峰登頂がすべて可能でしかも縦走型態となる。我々はこのコースをとることに決定する。このコースは台湾では雪山への最もモビュラーなもので、途中山小屋も完備しているということである。

他に環山・嘉義の宿泊場所、部長隊の台北―嘉義の移動等話す。また玉山では、主峰・北山・北々山・東山・南山を登ることにする。アプローチでは阿里山から東埔までは五の倍数日にしか森林鉄道が動かないため、歩くことになるかもしれないとのことであった。その他、細いことを打合せし、最後に昨日渡した入山手続に必要なパスポートと入山許可証を受け取り、入山費を支払って退出する。この時、隊長・副隊長はガイドの林志廊さんより親戚の結婚式に招待される。

六時半頃、学苑にもどるとすでに食糧等のパッキングが終了していた。明日はバスに乗るだけなので適当に分配する。

夜、新谷と石山にスイカを買いにやらせる。細長いスイカで甘くておいしかった。

十時半頃、隊長・副隊長は結婚式よりもどる。乾杯せめにあつたそうだ。

明日からは山の中、仲間だけの世界になる。言葉の不自由さから解放される。

八月七日（晴れ）

六・〇〇起床 七・〇〇学苑発 八・五〇頭份

一・〇〇谷関着・昼食 一五・〇〇環山着

一六・二五武陵青早活動中心前着 一七・〇五

幕場着（一、八六〇m地点） 二一・〇〇就寝

六時に起きパッキング、部屋の掃除をすませ朝食をとる。この食事でもこれで最後かと思うと捨てがたい味を感じる。学苑では日本語は全く通じないのだが、食事を終えて退出する時、調理場の人「さよなら」と言ってくれた。宿泊費を支払う時チップを渡そうとしたら、「ノー」と言って手を振った。学生専用の宿舎なのでこういう習慣はないのかもしれない。玄関前に集合していると欧陽氏が来られた。この人には入国以来献身的なお世話を受けている。本当に恩人である。

七時前にバスが着く。マイクロバスかと思っていたら

ガイド嬢付きの大型バスであった。ガイドさんはミニスカートのすごい美人である。日本語が少し理解できるようだ。

七時、学苑を出る。欧陽氏は途中まで見送りで同乗してくれた。途中、台山協の林煥章氏、ガイドの林志廊氏が乗り込む。もう一人のガイド林朝坤氏は後発隊の諸君と行動を共にし、嘉義で合流することになっている。台北橋の手前で林氏と欧陽氏が下車、「お気をつけて」と言った一言が心に残った。

バスは高速道路を快適にとばす。ガイドさんがたどたどしい日本語で歌を聞かせてくれる。ワンボックスを一人で占めて、かなり優雅なアブローチである。

台北市を離れる頃、周囲には田園風景が広がる。ちょうど田植の時期である。日本の水田風景と良く似ている。ただ、牛が耕やし、シラサギが飛びかう姿が異なる点か……。

頭份で途中休けいをし、豊原を過ぎてバスはいよいよ横貫公路に入る。途中、台湾大学の女子大生が三人乗り込んで来た。突然の新入者に何事かと起き上がる。梨山に旅行へ行く途中バスを待っていたようである。台湾にもヒッチハイクはあるらしい。十三人のサムライ、昔習った英語でアタックを始める。「ワセダイズモウストフ

エイマスユニバーシティインジャパン」。早稲田など知らないと言えた。

谷関で昼食をとる。ここは美しい渓谷で、名勝の地になっているらしい。

一時間程休けいしてバスに乗り込もうとすると、食事の姿を消していた例の三人組が再び乗り込んで来た。最後まで、このバスで行くつもりらしい。しかたないから再び勇気を奮って英語を話す。「ユーアーベリーチャリング」。そしたら、住所と電話番号を教えてくれた。そんなつもりはなかったのに。言葉に詰って外を見たらバスは溪谷沿を一目散に走っていた。右は絶壁、左ははるか下にスカラン溪、その間に行く細い半舗装道路をバスは突進する。運転手の腕をひたすら祈った。

梨山で三人を降ろし、環山に向かう。三時頃環山に着く。バス停わきの警察所に入山許可証を見せ、不用荷物を持って環山部落に降りる。林志廊さんの知り合いの家にて下山まで預ってもらうのである。

再びバスに乗り武陵に向かう。すでに左手には、雪山とそれに連なる山々が見えていた。我々はとうとうやって来たのである。皆左側を見つめていた。四時二十五分武陵に着く。ミニスカートのガイドさんと別れて幕場に向かう。山小屋が一棟あり周囲は植林されている。今日

はこの小屋に泊る。

夕食後、林さんに全員自己紹介をする。林さんより「長寿(タバコ)」を一本づついたたく。お礼に中郵よりハイライトを贈る。

ミーティングで明日の予定を発表。林さんのアドバイザーで明日は停滞の予定をとりやめ、二、四四〇m地点の七卡山荘まで行き、そこで半停とする。九時、寝りにつく。

「ミニスカートのガイドさん、皆んなウハウハ。途中から乗った女子大学の楽しい話。台湾での初めての山中生活。やっと自分の領域に入った感じ、明日はガンパロウ」(隊員日誌より)

八月八日(晴！雨)

四・五・六。六・三〇雪山登山口、八・五〇七

山荘着(二四四〇m地点) 一一・三〇昼食

一六・三〇夕食 二〇・〇〇就寝

小屋を六時に出て昨日来た道を三十分余りひき返す。

植林された林をぬけると一面に武陵農場が広がっている。周囲を山にかこまれた静かな農場である。キャベツや梨

・桃などを大量に栽培し、台中などの都市に出荷しているという。ここで働く人はほとんど退役軍人で、彼らの

就職先として政府が資金を投入し開拓したものだ和林さんが説明してくれた。三十分程引き返すと農場の中間程の道路ぎわに「鍛練健壮的身手」と書かれた看板が立っている。これが雪山登山口を示す道標である。後を振り返ると桃山(三三二四m)が朝焼にまっていた。道はここから右に折れ農場の畔道となる。山と農場の境界付近にリンゴ畑と一軒の家がある。朝早いためか、それとも畑に出ているためか人氣はなく、七面鳥が二・三羽歩いていった。ここを通過して小さな沢を渡るといよいよ山道となる。急な斜面をジグザグに登る。一本足らずで尾根に出る。尾根に出ても急な登りが続く。大きな木は伐採されたのか数えるほどしか見あたらない。一休みして後を振り返ると眼下に農場が広がっている。向側の山ぎわにそって、昨日バスを通った道とキャワン溪の流れが朝もやにかすんでいた。そしてその後の山をへだてたかなたには南湖大山、中央尖山、その右に関山といった山々が雲間に見えていた。道は二三〇〇mを越す付近からややなだらかになり、馬の背のような所を通過しトラバースに入っている。沢を二つ越し、八時五〇分七卡山荘に着く。小屋は「男寝室」「女寝室」と食当小屋の三棟に別れていた。我々は「女寝室」に入り、今日は半停とする。林さんの話では七月のシーズン中には管理人や医者が入っているとのことであるが、今は全く我々

だけである。水は小屋までホースで導かれている。

二年の石山を明日のルートの下見にやらせる。道ははつきりしているということである。

昼食頃から雨になる。明日の天気気がかかる。

「みんなが昼寝をしている間に、僕一人明日のコースを二〇〇m位登って来た。八月の登山シーズンだというのに登山者は一人もいない。野原でゴロンとしていると真裸になって走り出したくなった。空が実にすんでいて気分がいい。すばらしくきれいな蝶も飛んでいる。台湾夏合宿」(隊員日誌より)

八月九日(雨→曇→雨)

四・五・六。六・二〇出発 八・三七東峰着

九・四〇369山荘着 一・一三〇昼食

一六・三〇夕食 一九・〇〇就寝

朝がた雨が降っていた。五時四五分の日本の短波放送で天気図をかく。どうも台風が発生したらしい。六時二十分、雨の止むのを待って出発する。針葉樹林の急斜面をジグザグに登る。尾根に出ると木がややまばらになる。ガスが消え始め視界がきくようになってきた。草原地帯をしばらく登り東峰からのびている尾根と合流する。合流付近には針葉樹の原生林が密生しており、道のわきに

は野竹やたけと呼ばれる一m足らずの細い竹がはえている。標高はすでに三千mである。針葉樹の原生林も野林も日本では見られないものである。

ここから東峰までは一息である。林の中をぬけて行くと同方にこんもりとしたピークが見える。これが東峰である。八時三十七分頂上に立つ。標高三一九九m、展望は三六〇度に及ぶ。眼下には七カ山荘が林の中に見え、そのはるか後方には武陵の家々が見える。北側一帯には、桃山・池有山・雪山北峰を結ぶ稜線が屏風のように連なり、沢をへだてて見事な岩壁を見せている。雪山は雲にかくれて見えない。

二十分程眺望を楽しんで東峰を後にする。道はここから尾根をはずれ、トラバースぎみに進みやがて右前方に折れて行く。林の間から右手の方向に369山荘(約三〇〇m)が見えてきた。九時四十分山荘着。369山荘は、雪山の前衛峰三六九〇mのポコのすそのにあるため、そのような名前になったのだろうか。でもここからは、そのポコは見えない。北側には深い沢をへだてて大岩壁が連なり、南側は雪山・東峰の尾根がとりまいていいる。そして、その斜面が小屋の背後までせまり、小屋付近からなだらかなスロープとなっている。三方を山で囲まれていたため風は強くない。

昼食後、岩崎・赤津・渡辺に水を探しに行ってもらう。引水パイプにそって三十分程トラバースして行くと沢がある。そこにパイプをつないで帰って来た。小屋の引水パイプから水が流れ出す。台山協では、溜池の雨水しかないと聞いていたので同一安心する。

午後から雨が強くなる。明日の天気心配だ。夕食の準備をしていると、女性を含む四人の台湾人、パーティが小屋に入ってきた。雪山に登るとのこと。向こうもびっくりしたようだが、こちらも驚いた。やはりここは外国であった。中邨に二三・一〇の気象通報を聞いてもらう。

八月十日(雨)

一日中停滞

一応三・四・五で起き出発の準備をする。昨日の天気図によると(九日二一・〇〇現在)バシー海峡に九九四mbの台風が有り、台湾方面に向かっているとのことである。相談の結果、主峰―北峰―369山荘の予定を中止し全停とする。五時半頃台湾人、パーティが雪山に向かう。九時頃もどって来る。稜線は風が強いとのことである。彼らは荷物をまとめてそのまま下って行った。

十二時二十分の天気図では、「台北・雨・九九八mb」「恒春・雨・九九四mb」であった。林さんが中国語放送

を聞く。それによると、台風は午後四時頃通過し、風はたいしたことはないが雨がひどいそうである。林さんは、これを聞いてスカラン溪の増水を心配する。暴風の後は三・四日腰ぐらいの増水が続くと説明してくれた。二時半のミーティングで最初の予定(主峰―北峰)を通過して志佳陽大山―ひょうたん池―環山)を中止し主峰―北峰ピストンの後、もと来た道をもどり環山に行くこととする。ひょうたん池から環山に向かう時、スカラン溪を渡渉しなければならぬからである。

今夜も中邨に二三・一〇の天気図をつけてもらうことにする。九時就寝。

「桃山(三三二四m)はまるで孫悟空が生まれた岩山のようにだ。明日は金脈雲に乗って雪山に行ってみよう」(隊員日誌より)

「監督が歌を歌っている。メシを五回に分けて食べたとしても、テレビを持って来いとも、その他色々な仕種を重ねる。青木コーチが動いている。左から右から、家中を歩きまわる。監督がどなっている「オーイ、オーイ」と。その間もフラッシュは輝く。シャッターは押される。一人は退屈を見せ、或いは見る。」(隊員日誌より)

八月十一日（雨—曇—雨）

三・四・五。六・二五山荘発 八・〇〇森林限界
付近（三六〇〇m付近） 八・四五雪山頂上着

一・一・一〇369山荘着

出発前雨が強く降っている。六時二十五分雨の止むのを待って出発する。ガスっていて視界がきかない。小屋の背後の草原地帯を登りきると針葉樹の原生林となる。一抱えもある大木が天を突きさすように乱立している。見事な景観である。雨がりの朝モヤがかすんでいるのも余計神秘的な感を増している。道は最初、林の中をトラバースぎみに進む。やや行くと平坦な所に出る。ここも林の中である。そこを過ぎて小さな沢を越すとやや傾斜を増してくる。この辺から木の形がだんだんいじけてくる。更に進むと、ついにいじけきってハイ松帯となる。三六〇〇m付近であろうか。杉とも松ともつかない低木の間を進んで雪山直下の急登にさしかかる。頂上はガスっていて見えない。風が強く、水滴で肌寒さを感じる。八時四十五分山頂に立つ。ガスと強風でいささか居ごちは悪いがそれでも感激はひとしおである。一等三角点を囲んで記念撮映をとる。日の丸が風でバタバタ鳴っていた。頂上からガスの中を北稜角へ向かう。左側が急激に陥こんでいる細い稜線を

進む。最低鞍部から岩場となる。落石に気を使いながら難なく登り切りハイ松を行くと北稜角頂上に着く。雪山から二十分程である。視界はあいかわらずきかない。今日の行動はこれまでとし、369山荘に引き返す。北稜角直下の鞍部より雪山のカーブ状の所を下る。道ははっきりしていないが、ハイ松に巻いてある赤テープを頼って進むと樹林限界付近でもと来た道にぶつかる。369山荘には十一時十分頃着く。十二時昼食。午後にティータムを設けて、雪山登頂の感激を新たにす。

四時三十分夕食、夕食後のミーティングで明日天気回復次第によって北峰ピストンを行うことを確認する。七時就寝。

「今日は金脈雲の設計に失敗したのだ。金脈雲がデカ過ぎたのだ。一日中雲の中を歩いてしまった。明日は雲に乗ってさっそうと行って来よう。」（隊員日誌より）

八月十二日（雨—晴）

三・四・五。六・三五山荘出発 八・二〇雪山

一・二・〇五北峰着 一六・一五369山荘着

一八・〇五夕食 二〇・〇〇就寝

朝方雨が残っていた。五時四十五分のラジオで天気図を見る。台風は消えていた。天気回復と確認し、六時三

十五分雨の止むのを待つて北峰に向かう。隊長と林さんは休息のため小屋にとどまる。

昨日通つた道を雪山へと向かう。ガスが次第に薄くなっていく。八時二十分再び雪山山頂に立つ。ガスがぱーッと消えて行き昨日見えなかつた周囲の眺望が展開する。南湖大山・中央尖山の山々が見える。梨山の家々も、足下にはちっぽけな翠池があり、その左にはスカラン溪に落ち込む大岩壁が見える。前方には北稜角がまじかにそびえており、その後方の稜線沿いにこれから目ざす北峰が見えている。その右には、十年前の台湾合宿で登つた大覇尖山が特異な山容を見せていた。

空は次第に晴れてくる。今日は快適な稜線歩きが楽しめそうである。北稜角からルートはやや右側に折れる。支稜線がいくつもあるためガスっていると誤りやすい。小さなボコを幾つか乗越し、踏み跡程度の道をたどつてハイ松の中を行く。途中369山荘が見えた。コールをしたが隊長の姿は確認できなかった。

十二時五分北峰(三七〇二m)に着く。大きなケルンを囲んで記念撮映をする。皆晴れやかな顔をしている。

ここから見る雪山は美しい。北稜角と一緒に大々きな山容を見せてくれる。後方には大覇尖山がま近に見える。桃山に連なる稜線は細くガレ場続きになっている。

桃山―北峰―雪山の縦走もおもしろいと思った。

帰りは来た道をひき返す。やや雲が出てきた。北稜角手前の鞍部より道の無いガレ場をおりる。斜面がややきついでピビっている者もいる。ハイ松のやぶをちよっぴり楽しんで道に出る。四時十五分山荘着。隊長と林さんが出迎えてくれた。

今日は初めて行動らしい行動をしてきた。半停・全停の連続でややダレ気味であったが、最後でしまったのは救われる。369山荘も今夜が最後である。小屋の中の焚き火もそろそろまきが不足し始めた。林さんが作ってくれたアセチレンランプも今夜一晩でお役御免となる。

369山荘、期せずして我々のベースとなった。寝室と食当小屋と二棟あり屋根つきの廊下でつながっている。ネズミもいるしノミもいる。ここに着いて翌日あたりから皆ポリポリ始める。昨日竹中がノミをつかまえてその正体を知った。最初に被害があつてしかるべき岩崎と赤津が無傷であつたのは未だに腑に落ちない。

タバコもそろそろ切れた。明日は環山に降りよう。

八月十三日(晴れ)

四・五・六。六・三〇東峰着 九・〇〇武陵農場
内雪山方面林道始点着 九・五〇武陵農場バス停着

一三〇バス出発 一二〇〇環山着

一四〇三〇昼食 二〇〇〇夕食

二二〇〇歌の交歓会 二四〇〇就寝

いよいよ下山である。縦走こそ逸したが、最初の目的(雪山・北峰・東峰の登頂)は全て果すことができた。

六時、なつかしき369山荘を後にする。黎明の空が美しい。途中東峰に立ち寄って日の出を見る。桃山と南湖大山の間から日が登って来る。桃山が赤く染まる。その右に南湖大山 中央尖山・関山の山並が連なり、その右のかなたにゴウカン山が見える。梨山の上方はるか向こうには、これから見さす玉山の山々が雲の間にかすんでいた。後を振り返れば、池有山・品田山の岸壁が有り、その奥には北峰が見えている。そして、雪山主峰が真近にそびえ、その左に志佳陽大山が連なっている。志佳陽大山の向こうには、今日の宿泊地環山部落がある。

尽きぬ思いを後にして東峰を登つ。下りはさすがに速い。あえぎあえぎ登った道を一気に下ってしまう。七カ

山荘下の沢で一本とり再び下り始める。空は雲一つない。次第に日射しが強くなって来る。途中から林道に出る。

この林道は二〇〇m付近まで達しており、将来は七カ山荘まで延びることである。両側に植えたばかりの梨や桃の木を見ながら進む。九時頃、バスで通った道に

ぶつかると奥にある。

ここからは舗装された道となる。日射しが強く、やや閉口する。両側には梨が道にはみ出して実っている。今収穫の時期らしく、農場の人々がダンポールに梨を詰めていた。

三十分程行くと橋がある。万年橋ならぬ、「億年橋」という名前がついていた。中国はやはり、日本よりスケールが大きいのだろうか。思わずほほえんで橋を渡ると武陵農場のバス停が見えて来た。

バスの出発は十一時三十分。それまで休けいとす。会計係より桃購入の許可がでた。一人一個づつ食べる。日陰でゴロゴロしていると一台の観光バスが着き、乗客はそれぞれに梨や桃を買って行く。ここは観光地になっているらしい。バス停わきは美しい花壇となっており、その間に池が有る。池には金魚や草魚が泳いでいた。

十一時三十分バスに乗る。今回は定期バスなので一般客がいる。「日本人ですか」と日本語で話しかけてくれる人がいた。

十二時頃環山に着き、林さんの知人宅に向かう。環山部落は志佳陽大山のふもとに有り、スカラン溪が近くを流れている静かな山里である。ポンベいの遺跡のようなレンガ作りの家々が整然と並んでいる。梨の生産でかな

り裕福な村のようである。

林さんの知人宅に行くと、きれいな御婦人が挨拶に出て来た。「日本名・ササキヨシコと申します。」我々はびっくりしてしまった。日本人かと思つたのである。この人は本名を齋秀美といい、ここの幼稚園の園長さんをしておられるとのことである。

我々はあづかっていただいた荷物を受け取って学校の庭かどこかに天張るつもりでいたが、ヨシコ先生の御好意に甘えて今夜は先生の弟さんの家に泊ることとした。昼食も夕食もヨシコ先生の手作りの料理をごちそうになり、フロもいれてもらう。家には一人の女の子と二人の男の子がいた。この子たちと一緒にスカラン溪に遊ぶ。岩崎は床屋に行きポマードをぬりたぐつたオールバックにしてきた。皆んなの笑替をあげた。

夜は弟さんの家で歌の交歓会が開かれた。集まつた人たちはヨシコ先生の親戚の人々や近所の人たちで全て女性であった。父親が日本人であるという女の子も紹介される。

まずヨシコ先生が歌い、以後歌つた人の指名により順々に歌う。林さんは「雨夜花^{ウツクハナ}」を歌う。隊長も副隊長も皆んな歌つた。十四才位のかわいらしい女の子が僕を指

名した。だから僕もはりきつて歌つた。ヨシコ先生のお母さんはかなりのお歳にもかかわらず、「戦友」を最後まで歌い切つたのに驚いた。

交歓会が終つて床についたのは十二時過ぎであつた。皆んな帰つてしまつて家の中には我々だけである。通りすがりのしかも異郷の人間に対して、これ程歓待し、しかも家一軒を宿舍として提供する心の広さにただ驚き感激した。台湾に来て初めて、ちゃんとした昼とふとんの上で寝る。

八月一四日（晴れ）

六…三〇起床 七…〇〇朝食 七…四〇環山発
八…一五梨山着 一…一五〇梨山発 一四…五五
台中着 一五…三八台中発 一八…〇〇六嘉義着
一八…一五世界旅行社着 一八…三〇合流式

ヨシコ先生は朝早くから我々の朝食の準備をしてくれた。トウフとワカメのミソ汁、それにウメボシが食卓にそえてあつた。ヨシコ先生の心使いに改めて感謝する。

七時四十五分、全員整列しヨシコ先生にお別れの挨拶をし、タクシーに分乗する。

環山、それは雪山のふもとに有リスカラン溪の流れを

いたたく、我々に強烈な印象を植えつけてくれた静かな山里である。我々は環山を後にする。

八時十五分梨山着。バスは十一時五十分発である。梨山は観光地で多くの観光客でにぎわっている。朱色の中国式建物が印象的である。早めの昼食をすませてバスに乗る。横貫公路を台中に向かう。振り返ると雪山・佳陽大山の山々が見えた。

三時前に台中駅前に着く。料金が安いという理由で嘉義までバスで行くことにする。いよいよ後発隊諸君との再会である。皆んな元気でいるだろうかなどと思っっているうちにバスが混んできた。大きな荷物を持つ我々は、いささか肩身のせまい思いをした。

六時過ぎ嘉義に着く。バスを降りるとすぐに世界旅行社の看板が目に入った。宿で全員元気に再会する。わずかな間の別れであったがやはりなつかしい想いがする。合流式の際、玉山もひきつづき付き添ってくれる林志廊氏及び後発隊と一緒に来た林朝坤氏、朱華氏の方々を紹介する。

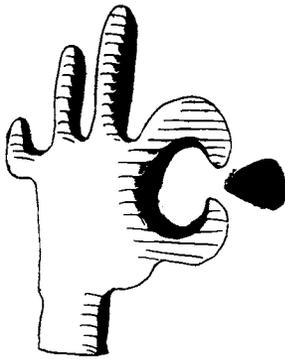
上級生班の行動日誌はここで終了する。一本、ごくりさん。

今夜は近くのレストランで無事な再会を祝い。台湾ビールが胃にしみる。中国料理がどんどん胃袋に入って行

く。玉山もガンパロウ。

なお、林さんを始めとして、隊長・副隊長及びサブリーダー以下四年生、三年生の諸君、新人役を一手に引き受けてくれた二年生諸君に対し、行動を無事し終えたことを深く感謝いたします。

また、末筆ながら我々の雪山登山に対し多大な御便宜を計って下さいました台湾山岳協会の方々及び同学会林慶豊氏、そして環山で多大なおもてなしをいただきました詹秀美さん及び御家族の方々に対し厚く御礼申し上げます。



女子・新人班及び合流後の行動日誌

八月一二日（晴れ）

七〇〇羽田集合 九一・一五出発

一二・一〇台北着 一三・三〇学苑着

上級生の先発隊が一週間前に出発した。きょうはいよいよ私たち新人・女子班の出発日。新人倉品の角帽がひととき目立つ。おや、新人小野が来ていない。八時三〇頃、アナウンスで私たちの便の出国手続きの最終の時刻であることを知り、見送りの田所O・Bらにあわたたくしく別れを告げて移動。矢口リーダーが時間の許す限り小野を待つ。木ノ内サブ・リーダーが最悪の時に必要な金を渡しに戻る。ボディ・チェックで新人寺島の手荷物ガラクタがひっかかり、旅券とともに取り上げられる一コマもあった。

気をもんでいるうちについて飛行機は動き出した。リーダー・サブ・リーダーがいなのまま。（そして呼びにやっただ新人石井も。）

複雑な面持ちのうちに台北入り。とにかくむっとするような熱気。

台山協の林煥章氏、歐陽氏、蔡氏御令息、協会関係者

二名の方々に出迎えられる。事情説明。記念撮映をしていただいたが、やはり緊張はほぐれない。林氏の案内で歩いて宿舍の学苑へ。この方が幾度となく手紙で問合せに対して親切な助言を送ってくださった人だったのだ。学苑に着き、部屋割のあと、学苑規則の説明を聞く。

二年神林、新人岸里は東京からの連絡を待つため、台山協事務所へ。他の者は学苑待機。

一九時二〇分。ミーティング。連絡がないということ。飛行機に乗ったと判断し、皆で空港に行くことにする。会社のカウンターに問合せたが何もわからない。

二一時四〇分。矢口リーダー到着。一同、思わず歓声をあげた。残り三名はキャンセル待ちとのこと。台湾の一番長い日が終ろうとしている。

八月一三日（快晴）

六〇〇〇起床 九〇〇〇林氏と今後の打ち合せ

一三〇〇〇後着三名到着 一四〇〇〇故宮博物館

院見学 一九・三〇全員そろって台山協訪問

二三〇〇〇就寝

蒸暑さと虫に痛まされた一夜が明けた。学苑の食堂で朝食。ここで食事は二度目だが、これから二週間余生活していただけるのかと、不安がよぎる。いや、早稲田のワン

ダラーはこれしきのことと負けてはならぬ！

昼過ぎ、後着三名を迎え、協会高氏の案内で台北市の北のはずれの山に囲まれた故宮博物院へ行く。流石、歴史のある国はちがう。見終わるまでにくたびれた！

夕食後、全員で台山協訪問。林氏より歓迎挨拶がある。記名帳に署名。同学の方、ガイドをしてくださる林氏に紹介される。今後の予定について打ち合はせをすます。

八月一四日（晴れ）

- 五・三〇起床 六・五〇学苑発 七・三〇台北発
- 一・二一六嘉義着 一・三〇〇昼食 一・八一一五
- 先発隊到着 一・八四〇合流式 一・九〇〇夕食
- 二・三〇〇就寝

台北から南へ二七〇キロ程の玉山への登山基地嘉義へ向かう。列車の旅もなかなか楽しい。「便当」という弁当も美味しいし、ボーイが熱い台湾茶をコップに注いでくれる。外の景色もいかにも南の国らしい。

一・二一六嘉義着。雑然としてうら悲しく、しかも活気ある田舎の「都会」嘉義に着いた。宿舎は世界旅社。

市の南約四キロのところ北回帰線がある。塔が立っていて、これを境に南は熱帯になる。行ってもどうということはないが、記念に、ガイドの林氏・朱氏とともに

有志が出かけた。変わった味のコーラを飲んで帰って来た。夕刻、先発隊の面々が続々到着。合流式。これより先発隊は解散。リーダー引継ぎ。

八月一五日（晴れ）

- 七・〇〇起床 食料買付・パッキング・団配
- 二二・〇〇全員集合

町の一角に朝市が立つ。野菜・果実・魚・肉・・通りの両側に所狭しと市が並ぶ。人・人・人。活気にあふれた声が飛び交う。ただの買物なら楽しかろうものを。四〇人からの食糧調達とあって、食糧係は頭が痛い。外国での買付のむずかしさを暑さ以上の汗をかきかき知った。

午後いっぱいかかって仕事を終える。団配・各自パッキングを済ませた後、O・Bに手紙を書く。二二時まで自由。入山前のひとときを各々楽しむ。二二時。スケジュールの確認及び四年部員から各学年への要望発表。

八月一六日（晴れ）

- 六・三〇起床 七・三五嘉義駅着 八・〇〇青木
- コーチとお別れ 阿里山への移動日

青木コーチが仕事の都合で帰国される。阿里山森林鉄

道の赤いマツチ箱のようなディーゼルにはとにかくびつくりさせられた。歎光地へ押すな押すなと人が行くのは我が日本に特有なことかと思いきや、ヤツとの思いで乗り込み、立っているのが精一杯。でも台湾の人々にもう一つびつくりさせられた。殺人的ラッシュの列車の中で例の便当や、果実をよく食べる。その上、そのくずは車窓からポイと放つてしまふ。負けそうとはこのことか。

四八のトンネル、六四の橋を越え、二二七四メートルの阿里山にやって来た。きょうは嘉義鳳郷香林国民小学校の教室を借りて泊まる。村の子と草野球に興じる。校舎の裏手からの夕映えの景色が得も言われず美しかった。

八月一七日(晴れ)

祝山で御来光。部長・内田コーチ、田嶋O・Bが監督・四年村田と合流していよいよ到着

昼前に部長一行が到着。ミーティングで玉山アタックのパーティー編成が発表される。全員の「一言」で雰囲気盛り上がる。トロッコが故障のため、明日は東埔まで玩張っちゃおう!

八月一八日(晴れ)

五・〇〇起床 七・三〇不要な荷物を預け出発

一五・〇〇東埔別墅着 海拔二五八四メートル

目のくらむ鉄橋をいくつも越え、濃い緑の木々の間を進む、奇異な声をたてる台湾のセミにびつくりした。歌をうたうパーティーあり。黙々と歩むパーティーあり。ぬきつぬかれつ進む。二年石山が発熱。リュウマチを訴える。矢口リーダーがついて一時間後に到着。苦しそう。

この夜は東埔山荘のベッドで寝る。石山の病状が心配される。団長らの検討の結果、田嶋O・B、四年岩崎がつき添って明日中に下山。阿里山で医者に見せ、必要なら嘉義まで降ろす。医者が世話をしてくれるのを条件につき添った二名は排雲山荘までにはいることに決定。

八月一九日(晴れ)

四・五・六。七・一五塔塔鞍部

一二・〇〇排雲山荘着

軌道を少し戻り、林道にはいる。石がでかい。山がよく見えて来た。山も台湾らしくなってきた。一本目。高度計二七〇〇メートル。おもしろい木あり。雲海がきれい。山々を包む絶景哉! 二本目。塔塔鞍部二六一〇メートル。林道から山道へ。前方には小高い山。三本目。温帯―寒帯の分岐三〇〇メートル。小高い山の登り。

受ける。

八月二〇日（くもり）

三半・四半・五。六・三八玉山山頂 八・五三

東峰山頂 一〇・一五玉山山頂にて昼食

一三・二三男子、北山着 一四・一二北々山着

薄暗い中を、階段状の登り。分岐までエレキで歩く。

二本目で主峰頂上へ。三九九七メートル。風強し。太陽はうっすらとのぼる。まわりの山々壮観、これいうことなし。赤・青・緑・空の模様は不可思議。頂上直下のガレ場、ダラダラつづく登り。御来光はくもって不可。

式典・日の丸・部旗が出る。風強く寒い。君が代斉唱。新人倉品、ポールに部旗をつけ旗手長を務める。

七時。ガレ場の下り。東峰へと向う。風が強くなり、天気は下り坂。はい松の中で一本。東峰直下。嗜好品はうまい！東峰の急登。岩場。落石注意。女子も頑張る。八時五三分。東峰山頂。くもが出始め、暗くなる。岩峰の上で記念写真。雲がはしゃいでいる。岩場の下り。だいぶ時間がかかる。トラバースからの登り。意外と遅いようで早い。登り、男子の方が元気がないくらい。女子の登りは快調。

十時一五分。主峰に戻って来る。団長・副隊長の迎え

ジグザグを切る。皆ガンガンと声を出す。雲が下に棚びいている。向こうには、うっすらと槍のような、高い山が見える。四本目。西峰下から十分。冷杉林三一五〇メートル。南アルプスの道に似る。雲海が漂う。岩山が見えてくる。道は整っている。五本目。松の木々の生茂った日陰三三〇メートル。玉山の偉景が見え出す。険しい山、深い谷が見える。道は五〇メートルくらいに登りが有り。前々の山々は素晴らしい。道はトラバースになり、橋桁が多くなって来た。排雲山荘着。最後の登りも何なく頑張る。女子の声がよく出る。道は終始よかった。大削壁という、垂直の土壁より一時間の頑張りの景色がぐっと広がる。玉山のポールもよく見える。農鳥のスケールをでかくしたような山。岩肌がよく見え、意欲をそそる。高度計は三五五〇メートルを示す。

天幕設営。よく声が出ている。三年渡辺から、「東峰・金山のとき、一回でたてられるように。」リーダーより天幕割り発表。

夕食は野菜いため。ピフン料理をガイドさん達が御馳走してくれた。「これはうまい！」まだまだ、食当は確実でなかった。ラジなどひどい。高山病の一症状か？頭痛を訴える者あり。部長も、自ら「高山病らしい。」と言われた。女子テントの就寝が遅れ、四年より注意を

を受ける拍手であった。元氣そうである。逆に「バテな
かったか！」と激励。

今登って来た東峰がくつきりと姿をみせる。昼飯であ
る。飯盒メシ。内田コーチは早食いか？ 団長らを交え
もう一度式典。「フレイフレイ日本」「フレイ・フレイ
中国」を部長の提案にて行い。

男子は北峰、北々峰へ。女子は下山。元氣であったが
リーダー命令である。

男子、北峰・北々峰へ向う。下りはすごい風。目が痛
くなってくる。分岐をすぎる。松と石楠花の間で一本。

今まで着ていたヤッケなどを脱ぐ。ここから見る玉山
はいい。東峰もきれいな岩山である。空を見ると太陽に
かさがかかっている。ガイドの林氏の笛が皆の気をひく。
一三時二三分。北山着。玉山測候所にて貴重な飲料水を
いただく。

「台湾の道は正直だ。」と新人が言う。その心は、日
本だといくら頂上が見えていても絶対にすぐにはつかない。
皆で寄書をし出発。

ガスをってきている。皆少し疲れ気味。腹が減る。気温
八度四分。皆疲れはあるが、それ以上に気力がある。一
本で一気に分岐まで行きたいという意気込みが感じられ
る。ガイドさんの方から一本を要請される。

一六時一六分。排雲山荘着。隊長らに迎えられる。女
子はラジウス点火を必死にやっている。夕食。今夜もガ
イドさん特製のビールをいただく。「ビールは汗が
何とも言えない。」とリーダー。

一八時五〇分。ティーパーティー。団長らとガイドさ
んを本部天に招く。テントの外では台湾大学のパーティ
ーの歌声が聞える。その間山は赤く染まり、あかね雲を
抱いていた。

八月二一日（霧雨）

四…〇〇起床 六…一五出発 八…二八南山頂上
一…四〇排雲山荘出発 一四…三八塔塔多加鞍
部着 一五…三〇東埔幕営地点

朝は雨音で目をさます。ついに雨が来たのか。しかし
しばらくして霧雨に。朝食後、天幕撤収・パッキングを
済ませ、南峰へ向けて出発。薄暗いエレキはいらない。
橋桁が雨のためすべる。六時四〇分。分岐（三六四〇メ
ートル）。トラバースで徐々に上る。ルートがあまりは
つきりしていない。ガスがひどいため、よく見えず、稜
線上をさまよう。

南山頂上。直下で少し急登。霧の中、声を出して一気
に登る。排雲山荘に戻ると、石山を降してくれた田嶋〇

・B、四年岩崎が到着していた。

昼食後、山荘を出発。ガイドさんが又、又「生姜汁」を作ってくれたのでポリタンにつめる。ベースは順調。皆、実に静か。一体何を考えているのか。

一五時三〇分。東埔山荘の上の原っぱ着。天幕設営。田嶋O・B、岩峰も下山して来た。

八月二二日（雨のちくもり）

五・〇〇起床 八・一〇ディーゼルカー東埔発

九・四〇阿里山着 一〇・〇〇森林鉄道発車

一七・四〇嘉義着

雨がまだ降り続けている。天幕撤収に手間どった後、森林鉄道の終点まで行き、ディーゼル機関車を待つ。煙をもくもく吐いて、小さな、しかしたくまげな汽車は来た。村の人々と入れ替りに、乗ったのは部員ばかりであった。阿里山まで一時間半、騒ぐ者なし。

予定を急ぎ変更し、今日中に嘉義に下ることになる。後にこの判断が正しかったことを知る。大雨で私たちの乗り込んだ列車の後の便は全面ストップしてしまったからだ。

一〇時に乗車して発車は一三時三九分であった。たまに速くに鉄砲水だろうか、滝のような流れが見える。用意した昼食をとるところではない状況の中で線路寸断地

点に至る。少し歩いた所から折り返し運転をやっている。この列車の混雑ぶりも往きにひけをとらない。

深い谷を下に見つつ、不安まじりで一路嘉義へ向かった。いつか、どしゃ降り雨も上がった。何事もなく夕方嘉義に到着。入山前と同じ宿が何故かなつかしい。夕食は、ガイドさんたちの送別会と、山中生活が無事終了したことを祝って楽しいものとなった。

八月二三日（くもり・夜半雨）

三人のガイドさんが帰ってゆく。三人が三人とも本当にいい人たちだった。あの笑顔、ビール料理……全て忘れがたい。殺伐とした都会生活に慣れた私たちに、何か大切な「心意気」のようなものを吹き込んでくれた。再見！ どうかお元気で。

合宿は最終ラウンドにはいった。列車にて台湾第二の都市、高雄に向かう。駅頭にて同学生会幹事の盧氏の出迎えを受ける。

八月二四日（大雨）

六・三〇起床 鵝鑾鼻灯台―墾丁公園

一九・〇〇同学生会招待レセプション

どしゃ降りの雨の中、バスで最南端の鵝鑾鼻に行く。

日本なら街道に松という所、台湾では椰子が並木をなしている。灯台に着く頃には雨も小降りになった。遠くからでも海の青さが清々しい。晴れていたら……。

墾丁公園に着く頃、再び雨足が激しくなる。公園内では黒に近い緑の南国の植物がたくましく雨にぬれて生い茂っていた。(後日談であるが、ある同学会の方が新婚旅行に是非、もう一度、鵝鑾鼻と墾丁公園を訪ねなさいと言っていた。晴れていたら確かにそれに似つかわしい所にちがいない。)

夕方からのレセプション。「同じ早稲田に学んだというだけで……」

八月二十五日(くもりのち晴れ)

六・三〇起床 台南→彰化→台中

台湾の京都・台南。安平城跡の高みからながめた町並みが美しかった。

一五時、台中の宿に到着。町の中心からはずれたこの宿は日本風であった。

八月二十六日(くもりのち雨)

七・三〇起床 日月潭(バス旅行)

同学会会員のお世話でバスが手配された。その御令嬢

とその友人の二名が同乗してくれた。

台湾は蝶の宝庫。その蝶の標本を作る工場を見学した。日月潭は台湾のほぼ中央にある天然湖である。晴れたらさぞかし眺めは美しいであろう。私たちが目的地に着いた頃には雨足が強くなっていた。ガスがかかって何も見えない。

しかたなしに昼食を文武廟の中にとらせていただく。久々にいなり寿司の折詰がなつかしい。

一七時一〇分。宿舎に戻って来る。

八月二十七日(晴れ)

五・四五起床 一二・三〇台北着

一九・一〇台北市同学会によるレセプション

この合宿もいよいよ終わりに近づいた。きょうは台中に別れを告げ台北に帰る。

整備された国道をバスは走ってゆく。一二時三分。バスは宿の前に到着。

夕刻からはレセプション。新人の間で、山の中の方がいいという悲鳴(?)が聞えた。

このレセプションには台湾の政界での大者も二人ほど列席していらしたが、歌の交換やらでかなり盛り上がった。

八月二十八日（小雨→晴れ）

七・三〇起床 一・一三五金山キャンプ場着

現地学生との交歓キャンプの日である。男子部員が何故かそわそわ……。

キャンプ地で最後の天幕訓練。何故、ピシッとフィニッシュが決まらないのか。現地学生には上級生が、びしびし文句を言って注意しているのが理解できないように、何事が起きたかと思守っている。

食当開始。なごやかな雰囲気のうちにはスキヤキができあがった。（味の方は？）

キャンプファイヤー。かわるがわる歌や踊りが飛び出す。花蓮の高校合唱団が見事な歌で飛入り参加し、増々雰囲気は盛り上がる。

矢口主将を胴上げした後、四年生全員を池に投げ込む！

八月二十九日（晴れ）

七・〇〇起床 一四・〇九今日の宿・台北教師会

館着 二〇・〇八台山協主催のレセプション

キャンプファイヤーの計画を進めてくださった陳守桂氏は愉快な人であった。台湾学生らと別れを告げた。

夕方まで台北の町で自由時間。夜から台湾山岳協会事務所でレセプション。お世話になった方々の顔が見える。

ガイドをしてくださった両・林さんも駆けつけてくれる。会員の御夫人たちの心のこもった手料理の数々。うれしくいただいた。ベナントを交換し、歌をうたい、最後にラジウス二台を記念に贈った。

八月三十日（晴れ）

八・〇〇起床 自由行動

この日上級生が代表して野牛隊との夕食会に出席。部員は三々五々、台北の町にくり出し残り少ない時を楽しむ。夜、ガイドの一人の朱氏、軍服にて宿舎を訪ねてくださる。日本へのお土産にと西瓜の種の菓子を持って来てくれた。

八月三十一日（くもり→雨）

八・〇〇起床 一三・五五台北発

一六・四一羽田着 一八・五三解散

台湾最後の朝が来た。朝食がわりに名残りの西瓜や果実をたらふく食べる者など様々。

飛行場には山岳協会の方々、金山に同行した学生など多数見送りに来てくださる。

ジェット機が動き出した。台湾合宿は終わった。否、今日ここから、再び……。

玉山での田嶋OB・岩崎・石山の行動日誌

八月十九日 東埔山荘停滯

前日、脱力感を伴う発熱(39⁵)を起した二年石山の体調が優れない。部長・監督以下相談の結果、「石山を早く医者に診せ、必要ならば入院させる。田嶋OBと岩崎が森林鉄道かトロッコで石山を下山させる。」と決まる。本隊は玉山に向け出発。コールが暗い谷間に響く。我々は準備して待つがトロッコが運転されず停滯となる。石山は熱も下がり食欲も出てくる。投予していたクロマイを止めて様子を見る事にする。田嶋OBと私は日光欲や散歩で一日をすごす。山荘近くの東埔八景からの玉山そして北峰の眺めは日本の山にはない迫力がある。石山は脱力感が残るものの快方に向い安心する。

八月二十日 東埔 8:00 止 9:40 阿里山 11:30 東埔 16:00

森林鉄道で阿里山に向う。石山の病状経過と我々の今後の行動予定を手紙にし、玉山に登る二人の台湾人登山者に本隊に渡して下さる様お願いする。石山は一日の停滯休養の為か、かなり恢復し平熱となり食欲もある。持病のリューマチが再発したらしい。阿里山に到着、石山

はホテルで静養させる。我々は東埔に向う。ピッチはかなりあがり、お互い牽制しながら四本で東埔に着く。

八月二十一日 東埔 — 4:00 玉山ピストン 17:00

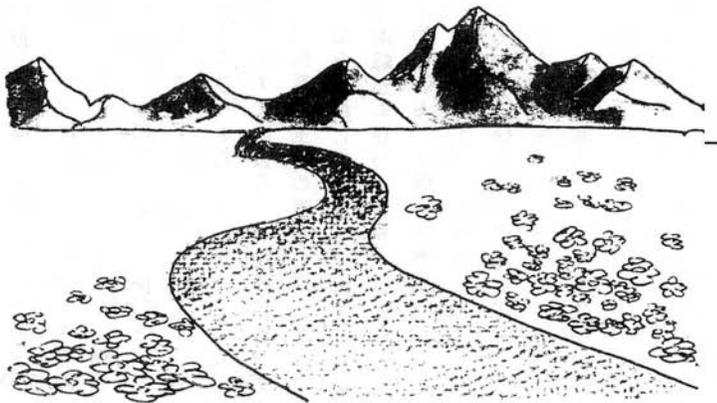
懐中電灯を頼りに玉山に向い出発。タータカ鞍部に着く頃から明るくなる。いよいよ登りである。霧の為展望はないが時おり深い谷が垣間見える。快調をベースである。排雲山荘の手前で、手紙を頼んだ二人の登山者に会う。お互い再会を喜び、お礼を言い別れる。少し行った所で部長と内田コーチに出会う。石山の経過を報告し安心していただく。部長は玉山の素晴しさを盛んに語られる。我々はその頂を目指し出発する。排雲山荘で休憩していると本隊が南峰から帰って来た。どの顔もそれぞれ奮闘の跡をとどめている。本隊と別れ頂上に向う。うすゆき草が我々の目を楽しませてくれる。頂は山荘から一時間ちょっとであった。横なぐりの霧雨で眺望はない。しかし一年間の努力の結果ここに立つのだと思うと感無量である。頂上の東屋で風雨をしのぎ記念撮映もそこそこ下山。排雲山荘までは一息である。山荘で体を暖め東埔に向う。雨が降ったり止んだりのおさんさんな天気だが、道がしっかりしているのんびりと下る。午後五時本隊に合流。

八月二十二日 東埔_{まき}阿里山_{りやま} 嘉義

本隊と森林鉄道で阿里山に到着。石山が駅に迎えに来ていた。これで全員無事に揃った事になる。(以後の行動は本隊と合流。)

今回の出来事に関し、部長始めOBの方々そしてガイドさん達の暖い御心遣いと適切な御措置に感謝すると共に、我々の無理なお願いを快く引き受けて下さった二人の登山者そして山荘の管理人の方々への御厚意に感謝いたします。

大過なくなし遂げる事が出来ましたのは、これらの方々の御協力があったからであります。そして最後に、終始献身的な御活躍をなさった田嶋OBに感謝いたします。



台湾对策委员会報告

台湾対策委員会報告

山口 純 一

今回の合宿について、本部として問題点と考えることについて述べる。

1 部員が、本部を合宿の一部であるとの認識を持っていなかったこと。

☆本隊出発時に遅刻者が出た時、本部に誰も連絡をとらなかつた。

☆帰国の問い合わせを、大学にした家族は多かつたが、本部にした人はほとんどいなかった。

2 (資金) 計画が甘かつたこと。

☆予算を圧縮するため、東京―那覇間船、那覇―台北間飛行機と云うプランだったが、この可能性についての検討が充分になされて居らず、結局全行程飛行機になってしまい、大巾に予算の修正をし、OB会からの寄附に頼らねばならなくなつた。

次に上記の問題点に対する批判と、今後どのように改善すべきかの意見を述べる。

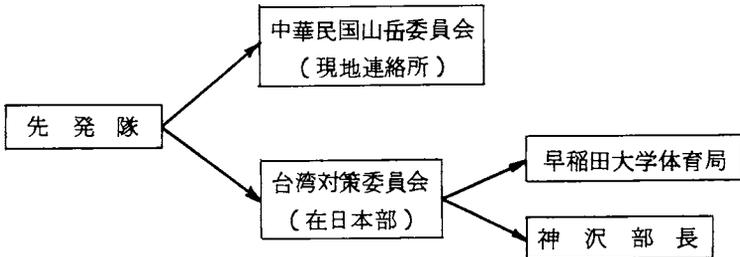
1 については、本部とか合宿とかの問題を離れて、それ以前に部員一人一人が「他人の立場に立つて考える」

習慣が出来ていなかったのではなからうか。例えば、集合時間に間に合いそうもないと思つた人は、リーダーが何を考え、どんな行動をとるかと考えて見れば、自分のとるべき行動は、まず自分の状態をリーダーに知らせることであらう。リーダーにしても、異常事態が発生した時は、まず本部に一報する事が絶対に必要であらう。今後「他人の立場に立つて物を考える」と言う習慣を充分に養つていただきたい。

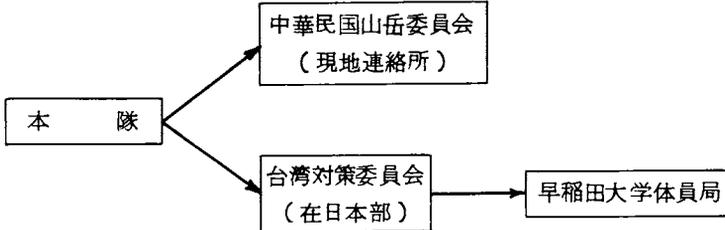
2 については、資金だけでなく、計画全体の甘さと考えてよからう。ただ一途に「台湾へ行きたい。」と言う気持ちばかり先行して、計画の練り上げが不充分だつたと考える。過去の海外遠征の時には、不明な点はとことんまで調べると云う態度があつたが、今回の合宿では、それらの点はやゝ見劣りがする。これは、不馴れということもあるだろうが、私には計画の重要性に対する認識がやゝうすいのではないかと思われる。大学の部活動(今はクラブ活動と言われている)では、結果よりもプロセスが重視されるべきであると考え。今後の課題として、計画、実行、反省の三つに同等の比重を置いていただきたい。

台湾合宿連絡網表

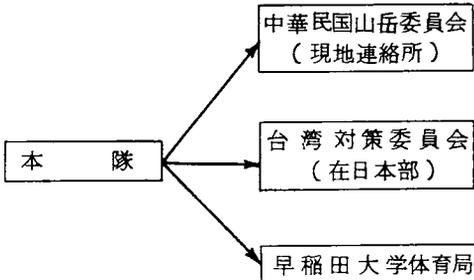
1. 雪山登頂後還山にて



2. 玉山ピストン後、阿里山にて



3. 帰国後、羽田にて



反 省

「台湾合宿で感じた事」

コーチ 青木 稔

三十七年部初めての台湾遠征と、四十四年のボルネオ合宿に続き、今回二度目の台湾訪問となる訳だが、在部中に一度は海外の経験を持ちたいとする考え方が、サイクルの幅は少し大きくなり、方向としてなしているのは嬉しく思う。

今回の台湾合宿は、代交替後リーダー達が海外の地での活動を年間の目標に掲げての結果であり、初志貫徹した努力の成果をして評価できると思う。又、初めて、新人をも含めた全部員による海外合宿であった事も、今までにない海外へのアプローチの仕方であり、とかく岐路に立たされていると言われる部活動の中で注目に値する。しかし問題点がなかった訳でなく、次に話したいと思う。アプローチに関しては、経済的な理由で船に固執していたが、七月の段階で船とカップリングした沖繩、台北間の飛行機がとれず、結局羽田、台北間全員飛行機利用に落ち着いた訳である。又七月末に、当初予定の、南湖大山、中央尖山が、入山許可証の關係で不可能になり、雪山に変更された事などもあって、直前になつて計画日

程に多少の変更を余儀なくされ、又、台山協の方々にもことさら手を煩らわせてしまった。これについては、事前に日台間の全アプローチを調査し、経済的事情、計画とのかねあい、他への影響等を考慮しながらベストのルートをとるといふ仕方をとれば回避できた問題だと思ふ。これは上級生パーティと新人女子パーティを分けた事にもつながるのだが、経済的理由という枠組に固執しすぎていた様に思う。アプローチにしても、台湾での活動にしても、種々の方法をたてつつ、目的と予算とをてらし合わせてベストプランを出してゆけばよかつたと思う。というのは、例えば台湾内での経費は、山と都市に分ければ、都市部の生活の支出がわりと多かつた訳で、フィールドワンダリングの仕方などが重要になつてくる。が、フィールドに関してリーダー達も苦慮していた様で、直前になるまで具体プランが出てこなかつた。それは経費の面での裏付けがとれていないという事になる訳で、具体的目算なしによりエコノミックな方法をといる事が先行してしまつた様に思われる。細部の計画立案がなされた段階で始めて、予算の分配ができ、又修正も出てくる訳で、例えば、初めから飛行機を利用し全員同一行動をとる仕方もなしえたかもしれないのである。隊を二分したという事については、私は経済的理由が主因としか

思えないので（当初の計画だった南湖大山、中央尖山の技術的な問題もあるかもしれないが）以上の様な考えが湧く訳である。今回の場合には、極力全員同一行動をとる事が、合宿目的、新人の教とその指導、活動の確実さ、計画の煩雑の回避、台山協の方々の応対等を考えれば妥当だったのではないかと思われる。

計画立案の過程に於て、台湾には、我部ははじめ過去多くのパーティが出かけている訳なので、いわゆる関係資料の収集により計画のベースを造り、あとは台湾経験者の体験をより多く吸収する事により、計画の修正なり、具体的な肉付けをしてゆくべきだったと思う。体験者からの資料収集がなすぎた様に思う。

フィールドワンダリングについて。ワンダーフォーゲル活動は山だけにその場を求める訳でなく、種々の自然を網羅しながら相乗効果によつて各々の良さを認識してゆくという考え方が私にはある訳で、フィールドの捕え方としては、自然活動の一分野として、主にテント生活をしつつ山野山村を歩いてゆく仕方が頭に描ける。しかし今回の場合は、都市の生活、あるいはその周辺の回遊が多すぎたのではないか。確かに台湾を知るといふ事はその中に自然も、山も、村も、都市も入つてしかるべきである。しかし、山に關しても、雪山、玉山というオー

ソドックスなコースしかとりえなかつた事、天幕生活もほとんどできなかつた事、フィールドと言われていた活動も、台北、台中、嘉義、高雄等と、比較的大きな都市周辺がとられていた事を考えると、台湾合宿の一つの目標として掲げた、部の二大精神を基に（これは放浪性と開拓性を指すのだと思うが）台湾の人々との交流を深め、と言つた事がはたして充足しえたかと考えると疑問が湧くのである。台湾を知るといふ事があるのなら、それはどの様な方法がよかつたのかといふつづ込みがもつと必要だったのでないか。以上の様な事は台湾の特殊性なかもしれない。入山許可証が必要で、山野跋涉という、いわゆるフィールド活動ができにくい情況、又、より未知と困難さを秘めた地域（南湖大山、中央尖山）が、現役の意志とは別に不可能になつた事などの結果なのかもしれない。私が現役との反省会で今回の台湾合宿は、わりと受身の活動しかなしえなかつたのではないかと疑問をなげたのはその点にある。その事は、現役が自分達の目的を主体的に充足しえる場として台湾を選んでいたか、といふ事にかかつてくると思う。国内にせよ海外にせよ、自分達にとつて未知だといふ事で地域を選んでゆく行き方は一つの方法だが、その地域と活動は、あくまで初期の活動目的を満足しえていなければならぬ。

部が数年来年六合宿制をとつてきてはいるものの、その内部では、より未知な地域へ、自然の豊富さを求めて活動の場を日本各地に又、海外へと展開していった訳で、近々の部の方向転換と言われるのは、表面的な活動形態にとらわれずに、納得ゆく活動を創り出してゆく姿勢を自らを重視するという事が一面である訳である。年六合宿制は、一つの形態として捕えればいいのであつて、その内で、過去のOB達が、どの様な姿勢で活動を組みたてていったかという点を主題として浮び上がらせてほしいという事を強調している訳である。そう考えると、現状打破という意味で海外に出るといふ事自体重要な事ではなく、海外のどの地域で、どの様な活動をし、結果として部員が満足をえ、自分の姿勢の内に、自信と新しい活動の芽を生じさせえたかどうかにかかると思う。至近な例をとれば、今回の合宿を経験し十月に交代替をした新リーダー達が、今年一年どの様な活動をするかに台湾合宿の一つの評価が現われるだろうし、そして又、部活動の良さを知ってほしいという事で全員参加させた新人達がリーダーになつた時、どの様な主体的活動を展開してゆくかに、最終の評価が問われる様に思う。という意味で、現在の現役諸君の活動を興味と期待を込めてみている訳である。

今回の台湾合宿は、国内合宿の延長としてあくまで現役の力での実現が目標であつた。計画立案にしても、資金調達にしても、そのほとんどを現役の力でやつてきたと言つていい。ここで考えられるのは、一OBとしてみた場合、現役の動向は興味深いものがあり、特に海外へ出るといった場合には、たとえ現役が国内合宿の延長であるといったとしても、何らかの形で力になりたい、そしてより実のある海外合宿をと願う気持は強く持つているのである。かつて部で海外へ出たOBは、その経験を役にたててほしいと思うし、そうでないOBも程度の差こそあれ、物心の協力をしたいと思うのが心情だろう。しかし前記の通り、今回は現役の主体的な活動をとという事で、OB側には現役からは特に直接の働きかけはしなかつた。しかし現役サイドですべて処理していた事がはたして、実際に現役自身の為になつていたかという疑問が残るのである。というのは、結局は監督の助言をうけ、コーチのアシストをうけ、OB会からの援助をうけているのである。計画自体のアドバイスについても、資金についても、OBに対し現役が直接働きかけてゆく事は、現役が自分達の活動をより確実に遂行する為の一つの方法とするなら、主体性をなくすというよりはむしろ、現役らしい活動をする為の主体的行為として捕えられる

のではなからうか。もちろんそこには、OBイコールサゼッション。OBイコール資金援助といった安易な気持があつてはならず、現役の目的意識をぶつける事によつてOBのアシストを引き出してゆく姿勢がなければならぬ。

その他、出発時に新人が遅刻し、一部部員が予定のフライングに乗れなかつた件については、現場にリーダーが残つてしまつた事、本隊の責任者が一時2年の女子部員になつてしまつた事など、部員個人の責任と共に、各学年の役割を再確認してほしい。又、OB会に在り日本部をお願いしておきながら、上記遅刻の件では、計画の変更があつたにもかかわらず連絡しなかつた為、台山協の方々、本部の方々にも多大の迷惑をかけてしまつた事など反省点として思い当る。ここでは、本部と現役の合同反省会の折、山口OBの言われた、行動は人の為を思つて為す。という言葉が思い浮ぶ。現役の人間が、台山協や本部の困惑を考へて連絡を怠らなかつたとしたら、事態収拾は容易だつたらう。

以上思いつくままに問題点を書いてきた訳だが、これら現役の活動をみての反省点は、そのまま裏返つて私事の問題点に置き換えられる訳で、コーチとしての非力を痛感する次第です。

ここで言える事は、方向転換と言われた中で行なわれた今合宿が、現状を打破し、引き上げる起爆力になりえたのか、そして、自分達の目的を完遂し、満足しえる活動をなしたのかどうかという事を、合宿地に台湾を選んだという事自体にもメスを入れつつ、主体としての現役諸君が結論を出してほしいと思います。

今合宿は、海外の地で全員合宿をという意志を一年間で具体化した現役の努力と共に、蔡礼樂さん、林煥章さん、歐陽合興さんはじめ、現地での多くの台湾の方々の力添えと、当初から台湾との折衝などでお世話いただいた木村前H・コーチ、直前でありながら、陰に陽に現役の援助をして下さつた諸先輩方の力がバックにあつたからこそなした合宿であつたと思います。この事は何か一つのアクションを起すという事は、決してその内部だけでは収まるものでなく、他への影響が必ず波及してゆくものであり、結果として、そのリアクションが帰つてくるといふ事だと思ひます。現役諸君にとっては大きな体験となつてゐるこの合宿の意義を、長所も短所も含めて、後輩達に確実に伝えていってほしいと思ひます。

最後になりましたが、今合宿の実施にあたり、物心両面に渡り援助をして下さつた多くの方々にお礼申し上げます。

出発時の遅刻を考える

矢口 哲三

先づ、出発当日を振り返ってみよう。集合時間午前七時に新人一名が来ない。飛行機は九時に出発の予定である。八時半まで全員で待つ。先程ノースウエストのカウンターでは最悪の場合出発五分前までに来ればなんとかすると言う事である。しかし、場内アナウンスは先程から、何回となく手続をするよう呼びかけている。リーダーはひとりだけで待っている。不安がつゆる。リーダーは、来てくれることをただただ願ひ、今来るかと遅刻者を信じる。

トレ合宿中にサブリーの加藤君が参加不可能となり、最上級生の四年はリーダーひとり、そして三年生の木の内を急ぎサブリーとする。

リーダーが待っていると、新人が遅れた場合、見送りの人に予備金を渡そうとサブリーが戻つて来た。次に、最後に出国手続を待つ新人が係員にはやく仲間を呼んで来いと言われ、神林の指示で戻つて来た。

遅刻者はおそらく、モノレールで来るだろう。八時四十五分のモノレールを待ったが来ない。待つのをあきら

め、見送りに来てくださった田所OBその他数名の者に、もし来たなら、次の便に乗せて下さいと頼み、いそいで出国手続を済ませる。ところが、ボーディングチェックの際、確か時間は九時〇〇分であつたが、係員に「遅刻した人を待っていた人達ですわね。あまりおそいので……」。飛行機は出発いたしました。」と言われた。おかしな話だ。五分前までに、カウンターに来れば何とかしてくれると言つていたのに……。実際の出発時間は九時十五分であつた。ノースの係員もすまないといった顔を見せていた。残念だが、出発してしまつたものには乗れないとあきらめ、手続を解消し、再びノースのカウンターに重い足どりで戻つて行つた。

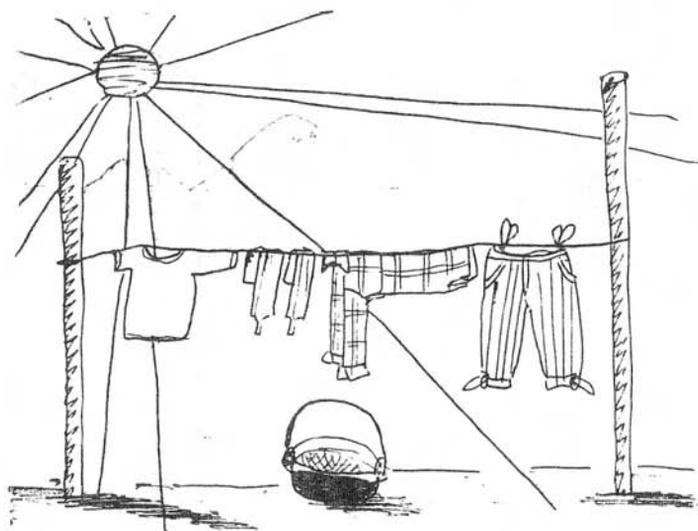
そこに、涙を流し、うなだれた遅刻者の姿を見た。彼女には重すぎる程の罪を犯してしまつたのか……。リーダーに「すいません」と言い出しづらい様子であつた。遅刻の原因はねぼうである。

リーダーの気持は複雑であつた。とにかく次の便で皆で行こう。十時五十分のキャセイの便のキャンセルがあり乗れそうであつたが、また悪いことに、ノースの人が我々の世話を最後まで見てくれず、係員同士のいきちがいもあつて、結局乗ることが出来なかつた。

そしてリーダーは二つのミスを犯した。何せ、最悪の

場合を想定して、リーダーが待つのでなくサブリーを待たせなかったのか。そしてどうして計画変更があったのかもかわらず、東京本部に連絡を怠ったのか。今思うに、出発前までの殺人的な繁雑さと精神的疲労（決してリーダーだけではないが）とさらに思いもかけなかった遅刻者の出現に、リーダーの判断力が当然喪失したとしか思えないのだ。なんとなく焼になっていたのかも知れない。「他人の立場に立って……。」とは、日頃、リーダーが新人連中に言っていたことではないか。再び、この様な事態が起つたとするならば、その時は、適切な処置を取ることが出来るだろう。この問題に関しては、リーダー個人の問題と判断されるところもあるだろう。他のリーダー連だったら、こんなミスは犯さなかつたのではないだろうか。

「リーダーの気持も分からないでもない。」と言ってくれた下級生もいた。しかし甘えは禁物である。将来の海外を思う時、批判を浴びることを恐れてはならず、「反省なくして進歩なし」ということを強く認識しなくてはならないと思われる。現役よ！何事も経験と実行である。



係別反省

装 備

岩 崎 健太郎

「準備段階」

○風土・計画に適した装備

○軽量化

○現有装備の活用

以上が計画立案上特に留意した点である。

(飛行機)一人当り手荷物量は二〇kgまでであったが、

超過分は持ち込み手荷物として消化できた。

(スクーリング)新人も参加する為、従来の夏合宿同様

天幕・個人装備等について五回程実施したが十分とは言

えなかつた。今後、新人を含めた計画では事前、合宿中

を通じ諸技術の修得に細かい配慮が必要であろう。

(天幕)従来のバラフィンとガソリンによる防水化工を

施したが、十分効果はあつた。天幕数が足りないため、

体育局より実技用天幕を二張り借りた。

「合宿中」

○団体装備

1. 天幕

山中では国内で使っている天幕で十分であつた。しか

し、二千m以下の所では毒蛇や虫に対する何らかの対策

をしたほうがよいと思われた。(例、グランドシートと本

体を一体化する。幕場のまわりに石灰をまく。かや等)

2. ラジウス

古いラジウスは高所では不調であつたが、新しいもの

は何の支障もなかつた。

3. 石油

一人一日〇一二ℓ使用。水が悪いのでやや多目に持つ

ていったが、二千m以上の水はそのまま飲めたのであま

つた。

台湾合宿団体装備（日本出発時）

品 目	先発隊数量	後発隊数量	品 目	先発隊数量	後発隊数量
テ ン ト	3	2(実技天)	医 療 箱	1	1
ラ ジ ウ ス	3	3	殺 虫 剤	2	0
ノ ズ ル	4	5	蚊 と り 線 香	2	2
三 脚	11	11	カ メ ラ	1	1
ス パ ナ	3	3	旗 類	1組	0
ス ビ ン	12	12	記 録 用 紙	1組	1組
ジ ョ ーゴ	2	2	ラ ジ オ	1	1
金 網	3	3	天 気 図	1	1
メ タ	1	3	高 度 計	1	0
中 ナベ	2	3	修 理 工 具	1	1
小 ナベ	0	1	天 幕 修 理 布 (30cm)	1	1
飯 ご う	7	8	針	3	3
ノ コ ギ リ	2	1	た こ 糸	3m	3m
ナ タ	1	1	グ ラ ス 用 ヒ モ	1m	1m
エ ン ビ	1	1	ス ビ ン	6	6
丸 食	36	38	張 り 網	2	2
ザ イ ル	1(9mm×30mm)	0	エ ア マ ッ ト 栓	2	2
ガ ラ ク タ	1	2	用 ゴ ム 片	30cm ²	30cm ²
包 丁	1	2	ゴ ム 片	30cm ²	30cm ²
お た ま	1	2	ボ ン ド	1	1
へ ら	1	2	ク ギ	20	20
か ん 切 り	1	2	針 金	3m	3m
タ ワ シ	2	4	パ ッ キ ン	4	4
針 金	3m	2m	ブ ラ イ ヤ	2	2
ロ ー ソ ク	15	15	保 革 油	1	1
バ ネ 計 り	1	0	切 り 出 し	1	1
石 油 ボ リ	6(3ℓ用)	0	ガ ム テ ー プ	1	1
水 ボ リ	2(10ℓ用)	0	マ ジ ッ ク	1	1

個人装備（日本出発時）

品 目	数 量	品 目	数 量
1 山 靴	1	32 針 ・ 糸	1組
2 キスリング	1	33 米 袋	1
3 シュラフ	1	34 金	
4 カッターシャツ	(ウール1)(綿1)	35 チ リ 紙	
5 半袖カッター	1	36 ビンチ食	3(2)
6 ニッカズボン	2	37 下 着	
7 防 寒 具	1	38 腕 時 計	1
8 靴 下	2組+1	39 メ タ	1
9 ヤ ッ ケ	1	40 キ ャ ハ ン	1(0)
10 帽 子	1	41 フ ロ シ キ	2
11 サ ブ ザ ッ ク	1	42 サ イ フ	1
12 雨 具	1	43 ハ ン カ チ	1
13 傘	1	44 短 靴	1
14 懐 中 電 灯	1	45 ソ ッ ク ス	3
15 替 電 池	2組	46 ズ ボ ン	1
16 替 電 球	2	47 ワ イ シ ャ ッ	2
17 ポリタン(2ℓ)	1	48 ポ ロ シ ャ ッ	2
18 細 引(5m)	2	49 ネ ク タ イ	1
19 軍 手	2(1)	50 短 パ ン	1
20 個 人 医 療	1	51 ビニールシート	3年・4年のみ
21 タ オ ル	2	52 新 聞 紙	現地購入
22 手 拭	1	53 登 山 ナ イ フ	1
23 替 靴 ヒ モ	1	54 洗 面 具	1組
24 ス ブ ー ン	1	55 ビーチサンダル	1
25 マ ッ チ	6(4)	56 エ ア マ ッ ト	1
26 磁 石	1	57 石 け ん	1
27 学 生 証	1	58 海 水 パ ン ツ	1
28 (パスポート・ビザ) 日かん・イエローカード	1	59 洗 濯 ば さ み	
29 計 画 書	1	60 パ ジ ャ マ	1
30 地 図	1		
31 筆 記 具	2	53番以降は携行自由品	

一〇ℓが八〜九元で日本と比べると高い。ガソリンスタンド又は鉱油屋に売っている。

4. ナベ・飯盒

三千四百mが食当時の最高点であった。米を炊くには水をやや多目にすれば、普通のナベでも十分である。

お茶用としてナベが破損した時の為飯盒を持っていた。

5. 各種ポリタン

水ポリ用として一〇ℓのものを二個と各自二ℓのものを一個持つていった。一〇ℓのものはからの時、小さくためるので非常に便利で、サブザックにもはいるので水汲みにも使用できる。しかし、摩擦に弱くしわの部分に穴があきやすい。(ガムテープで修理して使用した。)

石油ポリとして、写真現像液のはいつていた三ℓ入のものを持つていったが、形が水ポリと違うので間違える心配もなく便利であった。

6. ガラクター

どれも消耗品であるので、できるだけ丈夫な物を選ぶ必要がある。

7. 修理工具

山靴・キスリングなどに事前の点検、修理が十分でないものがあつた。ガムテープはいろいろな使い途があつ

て便利である。修理工具は使わないのに越した事はない。

8. ザイル

雪山・玉山ともに一般ルートで、ザイルを必要とする箇所はなかつた。

9. ラジオ

短波放送は時間・場所によつてははいりにくい、山中では比較的良くはいつた。これにより、台風の位置など正確に把握できた。

10. 高度計

五千mまで計れる国産品であつた。あまり精度がよくなく誤差があるが、悪天や地図が不明瞭な時には役に立つと思う。

11. ローソク

1張1日0.5本の割で十分であつた。

12. その他

バネ計りは、団装配分など正確にできる。マジックインキはなにかと便利である。

○個人装備

個人装備は各自重量が違つたので、係として各自15kg以下におさえた。(実際には各自身体につけたり持ち込み手荷物としたため10〜13kgにおさえられた。)装備は国

内合宿に準じたが、レセプションやフィールド用の服装が加えられた。台湾で日本と特に違うと感じた点をあげると、

1. 服装

下界はものすごい暑さである。しかし二千m以上の所では、日射しは強いものの空気がさらりとしていてしのご易すかった。そして夜ともなると肌寒い位であった。我々が悪天を想定してウールカッターを持っていったのが役立った。山中では蛇や虫そして日射を防ぐため長袖シャツにニッカソとしてニッカホースで行動した。雪山や玉山の頂上は風がつめたくさすが四千m級である。

2. 防寒具

三千mを越えると八月でもかなり寒く感じるが、シュラフにはいれば寒くはない。厚手のセーターがあれば十分である。

3. 帽子

とにかく日射しが強いので、帽子をかぶらないとおかしくなる。台湾製の竹笠は日射しそして雨にも強いが風に弱いのが難点である。

4. サブザック

フィールド、買付、パッキングなどいろいろ使え便利である。

○総括

今回は従来の海外遠征とは違ったいろいろな問題が提起された。ひとつは新人をも含めた海外夏合宿という事で、新人の諸技術修得がどの程度できるか問題であったが、結果的には山中日数が少なかつた為、十分にできなかった事は否めない。又、資金面から係としてベストの装備を整えられなかつたのは残念だった。しかし、現有装備をフルに活用する事で切り抜けられた事は幸いであつた。

今回の計画を終わり感じる事は、準備段階の検討が十分でなかつたという事である。準備中はこれがベストだと思つていても、いざ実施に移るといろんな問題が浮び上つて来た。これは準備期間が短かつた事も影響していると思うが、国内と違い海外では全てがなかなか思うようにいかないので準備段階での十分すぎる程の検討が必要だと思う。

又、資金が許すならば計画に対し必要と思われる物はすべて持つて行く方が良い。(現地に着き計画を変更した時、又はされた時に、海外では手に入りにくい物があるから。)

食糧

木の内 嗣 郎

準備段階において、台湾という海外の地を考え、食糧の全般的知識を部員に啓蒙しようとスクーリングにおいて次の事柄を取りあげました。

一、栄養について 一、保存の効く食料

一、パッキングの方法 一、病人食

一、インスタント食品等

また、事前に台湾で買付できる食品の種類、及び値段の調査に心がけました。調べ先は次の通りです。

一、亜東関係協会の食物のパンフレット

一、帝国ホテル観光案内所等に電話

一、早稲田大学の台湾留学生

一、台湾からの観光客

結果として日本と大差のない食物が手に入ることがわかりました。しかし、値段については日本より二割程度食料品が安いということはわかりましたが、個々の野菜、ツクダニ類等の値段については、はっきりしませんでした。その一つの原因には、台北市等大都市と地方の値段との間に差があるということがあげられます。

以上、日本と類似した食物の種類、二割程度安いという二点から、現在、部で使用している献立をそのまま利用してもさしつかえがない、また、食費は日本での合宿と同じ一人一日、三百三十円でよいと判断しました。

台湾では驚くほど食料が豊富で、各地の主要地には市場が開かれており、容易に買付の食品がみつかりました。品目は日本と大差ないのですが、換算した金の感覚がつかまえにくく、また言葉が通じない為に、ガイドの方々には大部分世話になってしまいました。ガイドの方々もしいなかつたとしたら時間的なロスはいへんなものになつたと考えられます。

反省点と以後の対策について

一、税関で完全密封の食箱があげられた。

カムテープ等、包装に必要なものを予備品として持つていく。

一、献立表が煩雑であり、買付、パッキング食当の時間が長びいた原因となつた。

現在、使っている献立表及び買付表を合理的に事が運ぶように検討する。

一、ツクダニは計り売りで完全パックのものがなく、しかも、台湾製ビニール袋が弱くパッキングに苦労した。

食料の価格表(1元=8円)

種 類	単 位	台湾貨幣(元)
玉 ね ギ	1 Kg	15
キ ャ ベ ツ	1 Kg	12
白 菜	1 Kg	25
ナ ス	1 Kg	17
ジ ャ ガ イ モ	1 Kg	11
長 ね ギ	1 Kg	14
饅 の ヒ レ	1 Kg	530
生 タ マ ゴ	1ケ	3
果 物 の 缶 詰	大1 缶	15
嗜 好 品 (菓子とか飴)	1袋	10~30
ハイココナツ	1袋	20
即 席 ラ ー メ ン	1袋	5
サ ト ウ キ ビ 飲 料	1本	6
砂 糖	1 Kg	17
み そ	1 Kg	15
ビ ー フ ン	大1 袋	20
肉 (腸 詰)	1 Kg	100
ハ ム 肉	1 Kg	170
米	1 Kg	20

ビニール袋および輪ゴム等、携帯品として持つていく必要がある。
 一、その他に、雪山隊では、ハンゴウ飯のおかずが、さば、さんま缶の繰り返しになったり、排雲山荘の昼飯がジュースと乾燥肉だけだった事など係としてのミスが目立った。

献立表、買付表だけにたよっていたため、献立の変更、市場調査、食箱作り等に、追わればなしになり、ミスが
 出てきた。対応策としては、現地において、ミーティングを適度にもうけるようにし、前後策を講じていけば良いのではないか。
 直、献立は、カレー、シチュー、雑炊、ラーメンライス等の組合せて、日本での山行と同じメニューでしたので、献立表は省き、現地での食料の価格表を付加しておきます。

医療

中 邨 雅 之

(合宿前準備)

- 亜熱帯に属する気候であること。
- 水質が悪いこと。

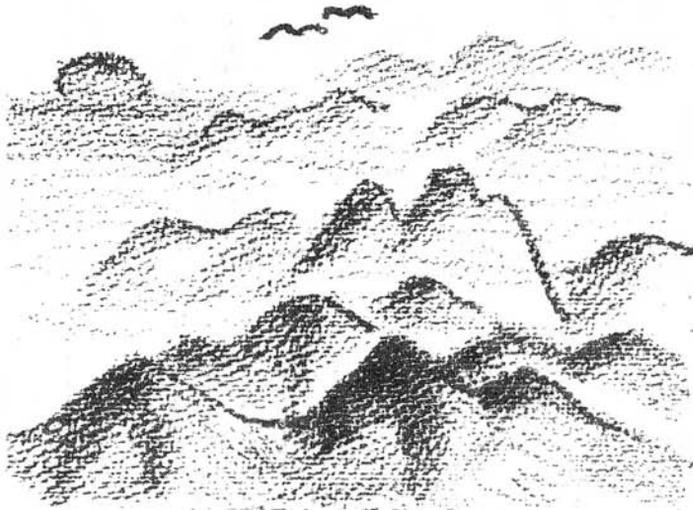
○ 四千メートル級の高山であること。

以上三項目を考慮し、高山病、下痢、日射病、毒蛇等を一年前に係内で分担し、オリジナルにまとめスクーリングに備えた。また、医療計画を作成するために、過去数年間の遠征隊の医療内容と発病報告を参考にした。医療計画は、特に高山病、下痢に対処すべく薬品をそろえ最終チェックを関先生にお願いした。

新人に対しては、ハーバードステップテストおよび東京都体育館にて体力測定を実施し初期体力を把握した。出発二週間前には、保健所においてレントゲン、内科検診、血沈、検尿の各検査を行ない万全を期した。なお、直前のトレ合宿では、オリジナルをもとに、三角巾の実技も含め部員に対するスクーリングを持つとともに、最終日に最後の体調チェックを行った。

(合宿中の役割)

- 事故者、不調者に対して適切な処置を施す。
- 隊員の健康管理
- 医療箱の管理



(合宿中の発病と使用した薬品)

病名	場所	人数	原因・状態	処置
虫さされ	三六九山荘	先発隊過半数	蚤によるものでひどい者は体中くわれており、一つもくわれなかつた者もいた。	キンカン 予防にはモスパーゾル
大腸カタル	環山	一	熱は三十七度四分あり強度の脱力感、水質によるものであろう。	ワカマツ投与 半日絶食し夕方から快方に向かう。
リニューマチ	東埔	一	持病か再発したものの。歩行困難、熱を伴う。最高三十九、五度二日目に平熱に戻る。	アスピリン、クロマイ、しょうが汁(ガイドの方からいたたく)下山入院
扁桃腺炎	排雲山荘	一	風邪による	ルゴール液
頭痛	"	一	風邪	セデス
下痢	全期間	大部分の隊員	水質の悪さに原因があるらしい。熱はそれほどない。	ワカマツ、ハロミン、絶食
まぬ靴ずれ	山(於玉山)中	新入部ののみ	化膿した者もいたが他は軽度の者。靴がなじまないことと靴下が濡れたことによる。	ホルム散
むくみ	山(於玉山)中	新入女子全員 男子一名	高山のため酸素不足と心臓の負担が増したことによると思われる	放電 トレーニングにより防止できる

以上軽微なものは除外

(反省)

○ 個装で持ってきたモスバーズルが役に立った事から考えれば、団装として組み入れるべきであった。

○ ムヒは、ほとんど効き目がなく、キンカンに限る。

○ 今回に限れば蚊取線香は必要なかった。

○ 不調者に対して処置した後隊長に報告するのを怠つたのは失敗であった。

○ また東埔においてリユーマチで高熱を出している二年生の検温をOBの方に頼つたのは医療系のヘッドとして何んとも恥しいことである。



医 療 箱

① 〔山岳班〕

(内服薬)

○アスピリン	解熱剤	1~2T×3aday (食後)	30T
○セデス	鎮痛剤	2~3T×3aday	90T
○アトラキシン	精神安定剤	2T×3aday	20T
○サラリン	緩下剤	1日1~2T(空腹時)	20T
○アドナ	止血剤	1~2T×3aday 止血まで1~2T 2~4h 毎	30T
○救心	強心剤	1T×2aday	10T
○レダキン	肝炎・化膿性疾患	4・2・2 24h 毎	30T

ク ロ マ イ ○併用スルキシ (スルファ剤)	肝炎・化膿性疾患	2・1・1 6h毎	20T
○ワ カ マ ツ	下 痢 止 め	2T×3aday(食後)	100T
○重 曹	日 射 ・ 熱 射 ヒートイクゾーション	1ℓの水につきさじ1 杯の食塩と半杯の重曹	20g
○バ パ ス コ	腹 痛	1T×3aday 2錠まで可 使用後60分食事不可	15T

(外傷薬)

○オキシドール	消 毒		
○マーキュロ	まめ、切傷	1	30ml
○ホルム散	擦過傷、ザックずれ	1	15g
○アクリノルガーゼ	消 毒、切傷	1	
○ペニシリン軟膏	小 火 傷	1	10g
○大 学 目 薬		1	
○キンカン	虫 さ さ れ	大1	
○バンドエイド	切傷、すり傷の保護	2箱	2×23 枚程度
○石 け ん		1	
○チンク油 (湿布剤)	う る し	1	
○サロメチール	筋 肉 痛	2本	40g
○パテックス	捻挫・打撲	3枚×3	
○ゼノール	同 上	1箱	

(器 材)

ハ サ ミ ピンセット 薊 抜 き 爪 切 体 温 計			
		大1	

耳かき ボンナイフ ガゼ 脱脂綿 (弾力)		開封1 新品1 1	
包帯	}	4 裂 6 裂	3 4
病院用絆創膏			2
紙パン			3
油紙			1
サポータ	}	足首 膝	2 1
眼帯			1
平バンソウコウ			1枚
殺虫剤			2
蚊取線香			4箱

(個人医療)

風邪薬 持病薬 病院用バンソウ膏 特大三角巾 キンカン		30錠 新1 洗濯済1 大1	
---	--	-----------------------------	--

☆遠征前に行なうスクーリング内容

- 日射病・熱射病・ヒートイグゼーション
- 下痢・船酔
- 捻挫
- 高山病
- 毒蛇
- (船酔)
- 小火傷
- 虫垂炎
- 三角巾各種実技

☆医療係間で確認し合うこと

- 人工呼吸
- 注射

気象

中 邨 雅 之

(合宿前準備)

台湾の気候を過去の資料をもとに調べた。また、合宿直前のトレーニング合宿においてはスクーリングを特に新人対象に行なった。内容は、天気図作成 台風 雷である。

合宿中の役割

一、台湾入国より日本帰国までの毎日の天気を記録した。
一、雪山、玉山のそれぞれ入山二日前より下山までの天気図作成を行なった。

反省

一、事前に気候の調査を行なったのであるが資料が少な
く参考になつた程度で、特に役には立たなかつた。ま
た、スコールが降ることは調べておらず、現地で初め
て知つた次第である。

一、スクーリングは例年と同様の内容で実施したが、短
波による天気図作成を経験しておいても良かつた。ま
た短波の受信時間を正確に調べておかなかつたことは
初歩的ミスであつた。

一、天気図のみならず実践的な観天望気をも積極的に取り入れたい。

一、台湾においては短波は平地、山地にかかわらず朝は受信しにくい。そのため入山前日の武陵では天気図を作成できなかつた。しかし、夜の受信状態は良好で昼も比較的良い。

一、雪山では夜から朝にかけて断続的に強い雨が降る傾向があり、翌日の天気の子報が難しかつた。

一、天気図は新人の夏より作成できるにこしたことはない。

台湾の気候

二十七日間の天気の割合は次の通り

晴 一十四日 曇 一六日 雨 一七日

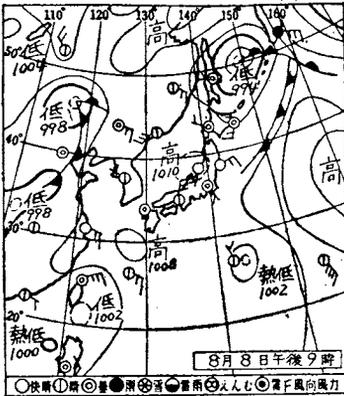
台湾の平地は日本より暑く、炎天下を1時間も歩けばぐったりしてしまふ程である。しかし、日陰に入れば割
合涼しくしのぎやすい。

山岳は「暑い」という予想に反して寒く、軍手、防寒具、ヤッケは必要である。日中でも日陰に入ると寒いくらいである。前にも書いたが、雪山では夕方から夜そして朝にかけて断続的に雨が降る事が多かつたように思う。しかし、夕方までは比較的安定しているので予報が出し
ずぬい。また雨といえば、山地・平地にかかわらず台湾

(天気図と状況)

雪山

①



8/8 武陵 - 七卡山荘

天気-晴 日差し強し

4:00pm頃から一面に雲が

広がってきた

は雨に弱いようで、山地では砂崩れ、平地では下水の排水が間に合わず道路にあふれるのが見受けられた。
短波について
五：四五AM 一二：二〇PM 一一：一〇PMと三回あり、朝は情報が少なく昼か夜を参考にすれば良いと思う。また台湾では同じ場所でも夜受信できても朝できるとは限らない。合宿では武陵、排雲山荘のそれぞれにおいてそれを経験した。

③



8/10 369山荘停滞

午前11時風はなく雨が断続的に降っている。雪山ピストンを決行した他パーティによると稜線上は強風とのこと。午後4時半頃より天気小康状態、夜12時頃から1時間あまり激しい雨が降る。

②



8/9 七卡山荘-369山荘

午前9時頃より時おり強い雨が降ったり止んだりしている。

⑤



8/12 北峰ピストン
早朝断続的に雨が降る。^o
8時 a m より晴れてくる
日中は朝とうって変って猛暑となる。

④



8/11 雪山ピストン
6時 a m ガスが濃く中央尖山の彼方は晴のようだ。行動中より雨が降り始め、頂上は強風、手が冷たい下山開始よりガスが消散明るくなる。
12時山荘到着と同時にわか雨
4:30 P m より強い雨が降り始める。

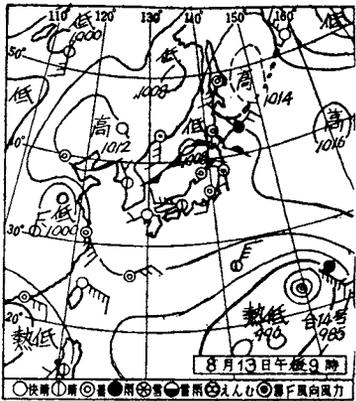
玉山

①



8/18 阿里山-東埔
日中は日差しが強い
4:00 P m 頃よりガスがたちこめ、寒くなる。

⑥



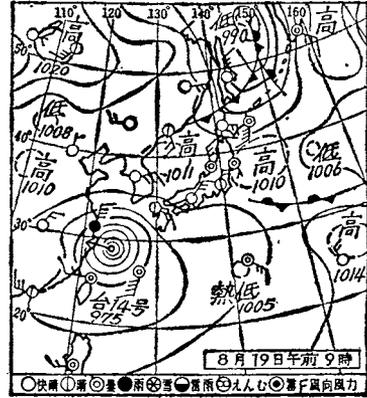
8/13 369山荘→環山
朝日がきれいである。
今日は一日中晴れて林道歩きは暑さでまいった。

③



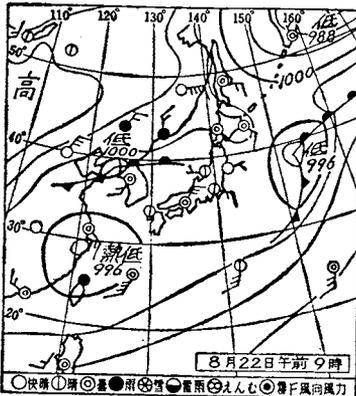
8/20 主峰東峰、北々峰ピストン
曇で稜線上は強風、ヤッケ、軍手が
必要な程寒い晴れ間はほとんどない。

②



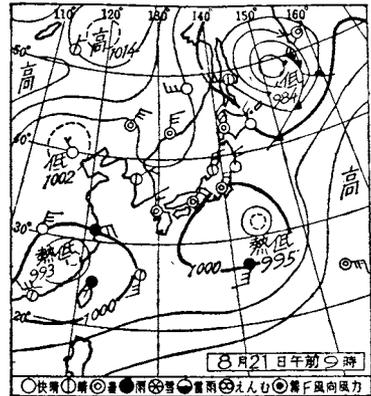
8/19 朝は曇気味
山道に入ると晴間が広がり快適である。
午後より、山頂の方からガスが降りてく
る。

⑤



8/22 東埔—嘉義
かなり強い雨、森林鉄道で阿里山まで
行くか途中土砂崩れて乗りかえる(寒
い)嘉義につく一時間程前から雨が上
がり暖くなる。
山岳地帯は気候に敏感である。

④



8/21 南峰ピストン下山東埔
朝はガスがかかっている程度であったが
風は強い。南峰に達する頃より雨となる。
下山中も断続的に小雨東埔の幕場ではさ
んさんの天幕訓練となる。1時間程で
この雨もやむか夜中に再び降り出す

以上、係のヘッドであつた四年部員がトレーニング中の骨折のため不参加となり、急拠私が代わりとして担当したのでありますが不馴れのため粗雑な報告書となつた事をおわびします。

記 録

木 代 哲 朗

今台湾合宿における記録係として注意したことは、

「昭和四九年度夏、我々の台湾での活動を様々の点から検討し、自らの行動を確め、そして我々の活動で残された問題点を今後の部の海外活動への参考資料として残すために記録する。」
ということであつた。

そして、そのために次の様な段階に分けて記録することにした。

一、準備段階の記録

(A) 準備段階の記録ノート作成

このノートを常時部室に置いておき、部員が台湾合宿に関して具体的に活動したこと、例えば、外務省、大使館、日山協等を訪問したとき、その場所、日時、

調査内容、感想を記入することにした。これは、準備段階の記録と部員間（特に下級生に対して）準備がどの段階までできているのか、また現在いかなることをしているのかについて、お互いの連絡をはかるためにもうけた。

ところが、実際には新学期以降ほとんどつけられなくなつた。ノート作成の主旨の不徹底、ノートの書式の問題、また部員に記録をつけていくという意識のなさ、部員が忙しかつたとかの原因があると思われる。

今後、準備段階における進行状態を部員が把握できる様な方法を是非考えてほしい。部員会、ミーティングでは補い得ない面があると思われる。

(B) 調査事項ストックブック

台湾合宿に必要とおもわれる事項を二四項目に分けて、それぞれ調べたことをファイルにしてストックすることにした。それは次の項目である。

- ① 趣旨、② コース及び概念図、③ 交通アプローチ、④ 渉外、⑤ 行動予定、⑥ 遭難対策、⑦ 隊組織・隊員名簿、⑧ 台湾山岳会、⑨ 装備、⑩ 食糧、⑪ 医療、⑫ 気象、⑬ 記録、⑭ カメラ、⑮ 台湾の自然、⑯ 台湾の地理・風土
- ⑰ 台湾の社会・文化、⑱ 台湾の政治
- ⑲ 台湾の経済 ⑳ 簡単な会話 ㉑ 会計 ㉒ 資金調達

・バイト ㉓トレーニング ㉔事後処理 ㉕その他

これは、記録として保存するのに役にたった。ただファイルにしておかなくても、ノートのかたちで各係が責任をもってまとめていく方法がよいかもしれない。

(C)日記帳・委員会ノート

部の毎日の活動を記録係が日記帳につけた。また委員会で話し合われたことの記録である委員会ノートも台湾合宿の準備段階の記録として参考になる。

二、台湾での行動記録

台湾での記録は次のようにした。

(A)隊長日誌

(B)リーダー日誌

ここでは、各部にリーダーを与えて、それを各自ノートのつけていくということを考えてよかつたのではないかと思っています。

(C)行動記録

純然たる記録とし、場所、時間等につき詳細につけることにした。

(D)隊員日誌

毎日分担して、その日の筆者の感想を書くことにし持ちまわり制にした。これは、各部員の意思の疎通をはかることで、隊のチームワークを作るためにつく

った。

(E)各係の記録ノート

(F)隊員の各自の日誌

三、合宿後の記録・資料の整理・保存

(A)台湾合宿全体の反省・問題点の整理

(B)各係の反省

(C)台湾での行動記録の整理

(D)隊員の感想文

(E)記録・資料の整理・その保存・利用

四、報告書

当初は、彷徨と合併したほうが、我々の年間活動のひとつとしての台湾合宿の位置づけがわかりやすいのではないかと思つたが、台湾合宿だけの報告書を作成することにした。

その概略は、計画・実施・反省の順でまとめることにし、今後の海外活動の資料として有意義なものとした。

五、総括反省

記録係として、特に海外合宿（又は遠征）において考えなければいけないのは、

①我々がいかなる趣旨のもとに海外活動をおこなおうとしたのか。海外活動の意義をどのように考えたのか。

②海外での実際行動が如何ものであったのか。その記

録方法をどうするか。

③計画立案、その実現にむかう段階での手順・手続等におけるいわば技術的にもがどのようになされたのか。

④それらを整理・保存し、今後のために利用しやすいようにするのはどうしたらよいのか。

という点であろうと思う。

私自身この台湾合宿における記録のし方について、無駄な点多かつたし、一貫したものがなかつたと非常に反省しています。今後の海外活動における記録方法は、ポイントを押えたもつとスマートなものに改めてほしいと思っています。

カメラ

木代 哲朗

台湾合宿におけるカメラ係の主旨は、

「台湾での合宿の記録を文章だけではなく目で見られる記録を残す。そして、撮影は部員の行動を中心としておこなうことにする。」

ということであつた。

そして、次の様な計画をたてた。

一、撮影計画

準備段階、アプローチ、現地行動（山岳地帯、平野、都市部、その他）、事後処理について、具体的にそれぞれの場面を上げた。

二、使用カメラ・フィルム

(A) 山岳地帯二台、地域別班に各一台の計画であつたが、計画の変更により、先発隊、後発隊にカメラ一台づつもつていくことにした。これで別に支障はなかつた。また、交換レンズがはしかつたが、準備ができなかつた。

(B) フィルムについては、すべてカラーフィルムにした。スライドにすることも考えられたが、実際の利用が少ないととりやめた。使用枚数は、原則として、一日に三十六枚撮り一本とし、山岳地帯での枚数をふやし、平野部、その他の枚数をへらした。また、フィルムケースに番号をふり、ノートを作成しその番号を撮影日付、場所を記入し整理しやすいようにした。

三、8ミリ撮影機

これは、予算の都合でとりやめた。

四、撮影者

これは、上級生をその係とすることにした。

五、整理方法

日付をおつて、スクラップブックに整理し、ネガ

フィルムには、日付、撮影場所を記入した。

六、予算

フィルム、三脚、カメラ、ストロボ、フィルムボックス、交換レンズ等につき最大限の予算表をつくってみた。そして、実際には、合宿全体の予算が足りないということで大幅にカットした。

(総括反省)

今合宿の主旨である部員の行動を一貫して撮影していることは、うまくできたのではないかと思う。ただ、純粹にコース等の記録をして大切と思われるところの撮影がいささか少なかったのではないかと思われる。そして、広角レンズ、望遠レンズ・ストロボがあれば、更に充実した写真がとれたのではないかと思う。

今後の海外活動でのカメラ係として考えてほしいことは、明確に、植物、地形、風俗等の研究テーマがある場合には、それ専用のカメラとフィルムをもっていくことが必要であろう。そして、地域によつては8ミリ撮影機、テープレコーダー等の使用も考えられる。

トレーニング

中 邨 雅 之

初期の計画では、中央尖山、南湖大山を登る予定であったため、かなり走り込みを重視した内容にした。入山許可がおりず、玉山、雪山を登ることとなつてもトレーニングを変更せず実施したため、今山行においてはトレーニング量が上まわつたようであつた。主旨としては、年間目標に掲げたように、長距離を無理なく走ることを最終目標とし、そこに至るまでの中距離においては従来のペースで行なうことにした。

第一段階 四月十日～四月二十一日

新人に対して、受験で疲れた体を馴らすことと、次に行なうトレーニングの種目を覚えさせることを主眼にし、体力をつけることはほとんど無視した。

最高3km・サーキット1set

負荷歩行25kg・1時間×2

第二段階 五月七日～五月二十一日

心肺機能を向上させるため、早いペースのランニングを行ない、坂道でのダッシュも取り入れた。それとともに、サーキットを加えて効果を増すようにし、筋力強化

にはアニマルⅠを取り入れた。

最高5 Km・サーキット2 set・アニマルⅠ

皇居一周記録会

第三段階 六月五日〜七月一日

最終目標である持久力を養うために、無理のないペースに落とし、サーキットは3 setにて行ない、アニマルⅠを続けて加えた。

最高8 Km・サーキット3 set・アニマルⅠ

皇居一周記録会

○自主トレーニング期間 七月二日〜七月一九日

前期試験のため、一週間前より採用

○トレ合宿 八月一日〜八日三日

台湾合宿まで期日がないので、調整に重点を置き、午

前ソフトボール、午後サッカーを行なった。

○新人・女子トレーニング 八月六日〜八月九日

自由意志による自主トレにするつもりであったが、今までのトレーニングを実行した。

最高6 Km・サーキット1 set

(反省)

○合宿直前まで遅刻が目立ち、必要悪として行なっている罰トレも、ただやれば良いという気持のため込んでまとめてやる部員までいる有様。罰トレは、その場で

有無を言わせずやらせるべきである。

○第三段階の長距離ランニングでは、トレ係間の連絡がつかず、それぞれの係によってペースが大分異なり、目標通りとはならなかった。

○アルバイトのため二年の一部をフリーにしたが、記録会では振振せず、やはり二年であっても全体に加わらせた方が効果があり、無難である。止むを得ない場合もあるので週二回のフリーが限度であろう。

○トレ合宿のサッカーにおいて四年部員が骨折し合宿不参加となってしまうたが、あまり勝敗にこだわらず余裕をもって行なうべきものであった。毎回サッカーにおいては程度の差こそあれ我人が出ている有様である。

女子トレーニング

神 林 みゆき

女子といえども、合宿は比較的厳しいものである為、日常のトレーニングもそれに準じて計画することとした。まず最終目標を5 Km・サーキット3 setとして、そこに至るまでを三段階に分けて実施した。

(新歓まで) 四月十日～四月二十四日

体慣らしを目的として、1 Km・腕立、腹筋から始め、最高時は2 Km・サーキット1 set、負荷歩行15 Kg・40分を行なった。週四日制

(準備合宿まで) 五月七日～五月二一日

かなりのスピードで走ることになり心かげ、心肺機能の向上を目的とした。1.5 Km・サーキット10・1 setより始め、最高時は3 Km、15・1 set、アニマルIを行なった。週五日制、皇居一周記録会

(六ヶ月期) 六月五日～七月一日

女子としては長い距離を走らせ、持久力を養うとともに、厳しい内容を体験させることを目的とした。1.5 Kmより開始し、最高時は5 Km、サーキット3 set、皇居一周記録会、週五日制

これ以後は時間的制約があったために、今まで養った体力を落さない程度で調整トレ、および自主トレを行った。

(試験一週間前より試験期間中) 七月二日～七月二十日

自主トレーニング

(試験後) 七月二四日～七月三一日

3 Km、各種筋力運動

(トレ合宿) 八月一日～八月三日

調整および合宿に向けての意気を昂めることを目的とし、ソフトボール、サッカー、なわとびを午前、午後に分けて行なった。

(出発前まで) 八月六日～八月九日

2～2.5 km、サッカー、サーキット10・1 setなどを行なった。

(反省)

○新歓までのトレーニングでは、入部して間もないためか、新人の集合が悪かった。

○男子のトレーニングと同様に、ランニング、サーキット・トレーニングの方法を改めた。

○台湾合宿直前までの調整トレーニングは盛り上がりがあったように思う。

○年間を見通し、ひいては四年間の活動をも見通したトレーニングは大いに意義がある。そして一年のうちで、夏前にトレーニングの一つのピークを置くことは重要ではないだろうか。

○トレーニング計画を実行する際、その狙いなどを新人に知ってもらうことは大切なことである。

○六月より腰痛の為、実際のトレーニングに参加できなかったが、上級生がいなくとも新人は各自よくやった。本当に申し訳なく思っている。

渉外

木代 哲朗

台湾合宿において渉外の仕事として分担してなされてきたものを、ここに簡条書きにしてまとめてみます。

一、準備段階におけるもの

- ① 渡航便の決定と切符の取得
- ② ビザ・パスポート・イエローカード
- ③ 人体・物権への保険
- ④ 飛行場での出入国手続
- ⑤ 台山協との行動計画についての打合せ
- ⑥ 招聘状・入山許可証の入手
- ⑦ 台湾でお世話になった方への贈呈品
- ⑧ 隊員の名刺作成
- ⑨ 部員保護者の同意書

二、台湾現地でのもの

① 具体的行動についての台山協との打ち合わせ及び確認。後発隊への連絡。

② 台湾同学会との連絡

③ 交通便の手配

④ 宿泊所の手配

⑤ 下山の際における台山協及び日本における台湾対策委員会への連絡

三、帰国後におけるもの

① 台湾においてお世話になった方々の名簿の作成

② 帰国の挨拶状を出す

③ 帰国報告書の作成及び報告会

以上が渉外としてやったことである。大きな反省点として終始これに一貫してたずさわる責任者を決めた方がよかつたのではないかと思われまます。

渉外に関して、台山協の蔡礼樂氏、林煥章氏、及び前木村和巨ヘッドコーチに多大なる御尽力をいただき、現役一同この場をかりてお礼を申し上げます。

会計・資金計画

木代 哲朗

海外遠征、合宿においては、資金の問題が大きなウエイトを占めている。資金にとらわれて計画立案ができない状態であつてはいけないと同時に、特に学生である我々は、海外活動という多額の費用のいる場合、資金の問題を常に考えておく必要がある。台湾合宿における会計

・資金計画についての経過並びに反省を今後のことを考えながら述べたいと思う。

I 資金計画及び調達の概略

当初の計画段階において我々は、隊員三十名、そして部員一人当りの負担金八万円、それに実技補助金、海外速征資金借入金等を加えれば、台湾合宿における資金は充分であるというこゝで出発した。

そして、各学年の負担額を考へて、上級生十万円、新入部員五万円の負担とし、新人の不足分は上級生の余つた二万円と海外速征資金で充当し新人の借金の三万円は新人が部を去るときまでに海外速征資金に返済するといふことにした。それで、OB会には寄付金をあおがなくともやつていけるというものであつた。

ところが、計画が煮詰るにしたがい、船で往復の予定が、船便が中止されているとので東京―沖繩間が船沖繩―台北間が飛行機に変更し、オイルショックによる運賃の値上り、その他出費の追加等で予算の枠がひろがり部員の負担金を先発隊の上級生十二万円、後発隊の上級生十一万円、新人六万円ということに変更した。

更に、依頼してあつた旅行社から、合宿出発實際になり、沖繩―台北間の飛行機がむずかしいとのことで、全員往復飛行機に変更した。その不足分の資金は、結果として、OB会の寄付金をいただけることによりこれを補

うことができた。収支決済書のキャンセル料は、この段階で船の予約を取消したことによるものと、後発隊の出発の際で遅刻者がでたことによる飛行機の取消しによるものである。

資金収集については、冬合宿をおこなわずにバイト期間にあて、また、一週間程度の休みのときはノルマを決めお金を集めた。その他バイトのためトレーニング時間をずらすことをみとめたりした。更に各部員に目標額納入の予定表を提出させそれを表にした。

現実には資金の多くをバイトで稼いだものから全額両親に負担してもらつたものまで様々であつた。

II 予算計画の立案について

① 隊員の数の確定。夏合宿が海外であるということ及び例年の入部人数から隊員合計三十名とし、台湾準備合宿で新入部員募集を締切ることにした。

② 各係ごとの予算書の提出。部にある装備をなるべく使用することにし、新しく購入する物について見積り書をつくつた。ただ保険費、入山費、ポーター代、事後処理費等、国内合宿では支出しない費目が多く出てきた。

③ 具体的な詳細な行動計画の立案。この日数に従つて、食糧費、交通費、宿泊代等の予算が正確にくめること

から、はやく計画を煮詰めることが大切であつた。今合宿の場合、渡航便、入山許可書の関係で予算の変更が多々あつた。また多人数の隊員のため、山中の予備日の使用いかんで、フィールドの日数が増えそれだけ経費がかかることもあつた。

④資料の収集。現地での宿泊費、交通機関の値段、入山費の値段等。現地の情報の収集。今合宿の場合、台山協に問い合わせたり、台湾観光協会に行つたりして聞いてきたが必ずしも充分であつたとはいえない。

⑤渡航便の決定、予算支出の中で渡航費のしめる割合は非常に大きい。そのため、なるべくはやく正確な方法を決めることが望ましい。

⑥会計簿、複式簿記を使用した。

III 現地での会計

台湾における貨幣交換は、正式には米ドルと新台幣ドルの交換であつたが、実際には、日本円も台北市内で交換してもらつた。台湾へのお金のもちこみは、台湾に第一動銀があるのでその利用も考えたが、全金額を現金で先発隊と後発隊に分けて持ちこんだ。

ここでは、内田コーチにお手伝いをしていた詳しい予算書があつたことにより、現地でのお金の動きをつかむのに非常に役だつた。

IV 今後のことについて

今後また考えられるであろう海外活動における資金収集方法について考えていかなければいけないと思われるものは次の様なものだと思う。

①部員個人負担金の限度額、資金調達のためのアルバイトと、学生であるということ及び、クラブにおける合宿・トレーニングに代表される諸々の活動とのかね合いをいかに考えるか。そして両親からの負担をどのようにするのかという問題。

②海外遠征資金の性格及び使用方法

これは現役が自由に使用できるものなのかどうか。または、海外遠征の為の基金としての性格をもつものとして返済しなければいけないのか。そうだとすると、その場合それをいかに積み立てていくのか。そして、更にこれを、OB及び現役が海外遠征に出る場合自由に使用できるようにしたらどうか、等々につき決めておく必要がある様に思われる。

③OB会寄付金、海外遠征・合宿の様に多額の金銭が必要な場合、現実問題としてはOB会に頼ることがどうしても考えられる。これは結局において、現役サイドの活動・計画及び熱意の問題になるのであろうか。

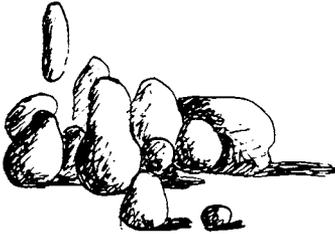
④音楽会等の催し物、スポンサーを探しての金銭・物

の提供をたのむ。これは、今は、体育局から禁止されている。

台湾合宿の会計の概略について書いてきましたが、これが今後の海外活動の参考にいくらかでも役だてばと思う。

最後に、多額の寄付金をしていただいたOB各位の方々、そして会計・資金計画においていろいろ指導して下さった内田コーチに対してこの場をかりてお礼を申し上げます。

また、台湾現地において貨弊交換のときお世話になつた林煥章氏、歐陽合興氏にはこの場をかりてお礼を申し上げます。



昭和49年度台湾合宿収支決済書

会計 木代哲朗

① 収入の部

	費 目	金 額	備 考
1	部員個人負担金	2,705,200	
2	監督・コーチ負担金	326,430	
3	海外遠征資金	386,000	
4	実技補助金	200,000	
5	OB会寄付金	600,000	
6	一般寄付金	321,905	
計		4,539,535	

② 支出の部

	費 目	金 額	備 考
1	渡 航 費	2,231,650	
2	渡 航 手 続 費	183,315	
3	キ ャ ン セ ル 料	71,590	注1
4	台 湾 で の 支 出	1,082,793	
5	保 險 費	127,337	
6	贈 呈 品 代	121,415	
7	装 備 費	12,520	
8	医 療 費	3,320	
9	食 糧 費	28,057	
10	記 録 ・ カ メ ラ 費	49,580	
11	連 絡 費	24,390	
12	事 務 費	19,005	
13	雑 費 ・ 事 後 処 理 費	198,840	
14	不 参 加 者 返 戻 金	125,000	
15	報 告 書 製 作 費	200,000	
16	海 外 遠 征 資 金 返 戻 金	60,723	
計		4,539,535	

注1の説明

- ① ノースウエスト航空機塔乗取消し手数料 39,090
- ② 大島海運乗船取消し手数料 32,500

台湾での支出

(単位 新台幣幣貨)

	費 目	金 額	備 考
1	装 備 費	49450	
2	山 地 食 糧 費	11,979.00	
3	フ ィ ー ル ド 食 糧 費	27,097.00	
4	ア プ ロ ー チ 交 通 費	16,768.50	
5	フ ィ ー ル ド 交 通 費	17,786.50	
6	宿 泊 費	22,690.00	
7	入 山 費	9,200.00	
8	ガ イ ド 費	11,000.00	
9	贈 呈 品 代	9,190.00	
10	連 絡 費	6,362.00	
11	雑 費	1,669.50	
計		134,237.00	

(1,082,793 円)

(一元 = 8,066.2 円)

感
想
文

雪山

渡辺 繁樹

八月八日、武陵農場から雪山へ向う。登山口から二本はきつい登りが続いた。キスリングはかなり重く、時計を見ながらもうすこし、もうすこしと思いつつ、おもいきり声を出して頑張った。ファイトノファイトノいいかげんのが痛くなったところ、トラバースぎみになりホッとす。このあたりの山の様子や草木は、日本と変わりなく、錯覚を起す程である。また、日本で台湾の生水は飲めないと聞いていたが、二千Mを越える高さの沢の水なら、台湾でも安心して飲める。八時五十分七卡山荘に着く。小屋にはムシロがしいてあり、わりにきれいである。日本のようにひわいと思える落書きはない。空の色はブルー。屋ごろからの日射しはものすごく、小屋のトタン屋根を通して伝わってくる。五時三十分頃、夕立ちがあったが、屋根の下なので安心して寝ていた。

八月九日、東峰の肩まで、朝の二本がきつかった。しかし、すずしさに助けられる。今日も張りきって声を出す。ガンバレノガンバレノ八時四十分、雪山東峰着。小さなポコで頂上という感じがしない。しかし景色はすば

らしく、褶曲した山々が、のこぎりのようなけわしい岩肌を見せている。九時四十分、三六九山荘着。海拔三千百Mの稜線を歩いて来たのだが、日本と違い森林限界が高く、まだ大木が茂っている。小屋のまわりは笹が密生していて感じのよい所だ。雪山へ続く山道がジグザクを切って小屋の上に続いている。今日も快適な山小屋生活。ひろびろとして気持ち良い。五時三十分頃、また夕立ちがある。

八月十日、三・四・五で雪山本峰および北峰ビストンの予定であったが、昨夜十一時十分の短波放送により、台風がバンシー海峡にあることを知る。小屋付近も三時頃から雨となる。出発の用意はしていたが、四時に朝食を食べて、今日は停滞と決定される。十時ごろまで寝る。外は風が強くなり、ガスっている。雨はそれ程激しくない。昼食を食べると、また暇な時間がやってきた。体がかったるい。中国語でも覚えようかと考える。何かうまいものが食べたい。

八月十一日、昨日の予定で六時二十五分出発。東の空の雲海と朝やけがきれいであった。小屋のジグザグに登り、樹林帯に入ると長いトラバースになる。ガレ場を通り過ぎた所で一本。まだガスっている。早く晴れてくれ。三千四百Mを過ぎるところから樹林が消える。道は整備さ

れていて登りやすい。雪山三千八百八十四Mのピークもガスっていた。寒いのでザックを背負ったまま立っていた。それほど感激はない。景色がないせいであらうか。協議の結果、今日は北陵角をまわって帰ることになる。明日の天気をいのって今日は断念する。帰りはぐっとピッチが上がる。小屋に帰るとすこし晴れたが、まだ山の方はガスったままである。小屋の中にも白いガスが入ってくる。

八月十二日、長い長い雪山北峰への道。主峰を過ぎると、もう踏み跡程度の道しかない。思う程進まないの少々いやになる。朝はガスっていて寒かったが、徐々に天気は良くなる。北峰着、十二時五分。記念写真をとるまくる。大羅尖山が異様な姿をのぞかせている。来て良かったと思う。雪山本峰登頂に比べ、感激は大であった。今あるいてきた、本峰・北陵角からの稜線がダイナミックに広がっている。もう一生ここには来ないだろうと思うと、また一層感慨深くなる。記念の石をザックにしまふ。帰りは行きよりもピッチが上がったが、最後の登りでは、すこし頭が痛くなり、呼吸がみだれた。北陵角の手前の鞍部から、カールへ帰路をめざしてガレ場を下る。四時すぎ小屋に着く。監督、林さんの出向かえをうけてホッとす。今夜で四泊目、いよいよ明日は山を下りる。

みんなダニにかまれ、かゆそうにしているが、僕とその他数人のみがかまれずにごすことができる。

八月十三日、四五六(しごろ)で小屋を出発。下山である。朝やけがきれいであった。雲海の上に頭を出した南湖大山・中央尖山・関山等を正面に見ながらどんどん下る。途中東峰で一本とり、最後の別れ。はるか遠くに玉山が見えた。整備された道があるのに、トップがチョンポコースを選ぶので、下りにくく、ちょっといや気がさす。林道にぶつかかったので、今度は林道を行くことにする。これがもろ不正解。すこし下るのにもトラバースしていて、すぐ下に道が見え、そこへ飛び下りたくなるようないやな林道であった。この林道をえん天下七十分歩く。良い道に出た所で半パンに着換えて、また歩き出す。これから環山まで約二十Kも歩くのかと思うときすがにつらくなった。しかし三年である。ガンバロウノトップに続き二番手につける。みんなをひっぱっているという体制である。いいかげん足の裏が熱くなり、ズボンまで汗にぬれたころ、突じよ、武陵農場のバス停を発見。ここからバスを利用することになり安心する。バスにゆられて環山に向う。



雪山

新谷 博

雪山は標高三八八四m、台湾第二の山である。東峰から見たその姿は、そそり立つ巖であり、その黒々とした岩膚は威圧感さえ感じられた。その反面頂上付近には可憐な花を咲かせ、山荘跡に通じる尾根をみれば、樹林の中に池がみえたり、緑の空間があったりするのである。北峰へ向かう道がこの様に変化に富んだものであった。そのため四時間の行程も結構楽しかった。北峰は台形状の形をなしその頂上には大きなケルンが立っていた。だ

れか北峰に行くものはこのケルンに書かれた我々の落書を見い出すであろう。ここから見える大羈尖山の姿は奇怪である。富士を最も山らしいと思っっている私にとって、これも又山であるということに一種のとまどいさえ感じられたのである。しかし、見ていると何となく楽しくなってくる山である。台湾の山にはそれぞれ個性というものがあつた。

—完—



雪山頂上で思ったこと

石山 潤

今朝もノミのかゆさで目がさめた。九日にこの三六九

山荘に着き、その晩からさっそく食われ始めてしまった。

今では、ズボンのベルトのあたりに住みついてしまったようで、ヘソから上下、背中あたりがとくに多く食われている。木代さんや、新谷あたりも、同じように食われているが、岩崎さんや赤津さんのように全然食われていない人もいる。ノミも人を見るようだ、でもいったいどんな規準で人を見るのだろうか？

昨日十日は、台風が接近したため雨が強く、一日中この小屋で停滞。

停滞というのは退屈なもので、ノミの食い跡をボリボリかきながら、ひねもすシュラフにくるまっていた。

台湾の八月は台風シーズンで、天気はいつになつたら快復するのははっきりしなかった。

小屋のトタン屋根をたたく音が今朝も聞こえる。「今日も停滞かな？」と、意気消沈で、三時起床の声を待つ。(午前五時、出発予定時だが、まだリーダーから指示がない。)

午前五時四十五分NHK天気通報を気象係中郎さんにとる。台風は十一日午前三時現在青森付近を勢力を衰えさせながら進んでいるとのこと。天候悪化はないとみて出発を決定。

石山潤「個人山日記」より)

「出発するぞ。」という村田さんの声が響いた。

いよいよ頂上かと思うと、どこからか活気が生れてくるから不思議だ。

六時十五分出発。東の方の空の一部がぎれていて青空がわずかに見えている。

この小屋は標高三千二百〜三千三百位のところにあって、朝はかなり冷える、霧雲もあつてはなおさらだ。

(小屋のうしろの急登を登り、樹林帯に入り、地図

「旧日本軍作製」とはちがい、稜線に近付かず、右にまきながら、ゆるい登りを進む。七時五分、一本目をとる。)

まだ二〇〇m程しかのぼっていないだろう。岩崎さんが団装で安い高度計を持って来ているのだが、その精度はあてにならない。ニイタカビヤクシンの樹林が覆っていて、話す言葉が吸い込まれていく。十四人のパーティーで来ているのだが、たまらなく静かだ。(三、五五〇m程まで達すると、やっと空にむかって立つ木はなくなる。シャクナゲのような木、這い杉(？)だけになる。ところどころにエーデルワイス(？)、なでしこ(？)なども咲いている。日本の花に似ているのだが、葉の形など少しずつちがう。

日本では二千四百か五百をすぎると、這い松になってしまうのだが、三千五百まで、堂々とした木があるのを見るとやはり、亜熱帯の山だと感じる。

頂上から落ちてゐるカールだと思える下部で二本目をとる。頂上はすぐなのだろうが、天気がはっきりせず視界がひらけない為、高度感がない。

最後のガレ場を登りつめる。

「唯今三千七百、三千七百五〇」オンゴロ高度計を持った岩崎さんが、僕の後ろで、さかんに言っている。

「なにをあてにならぬことを言ってるのか。」と、思いながら、登っていく。

一仕切り登ぼりつめたかなあとと思った所に出た時、ガイドの林さんが、「つきましたよ。」と一言、言った。なんとなにげなく着いてしまう頂上なのだろうと思ひながら、三角点を捜す。

(八時四十五分、雪山本峰に立つ、風がかなり強く、寒い。日章旗と部旗を持ち出し、記念撮影。頂上の石をおふくろの為にひろう。つづいて式典。都の西北を台湾の空に響かせた。)

「石山さん、タバコいかがですか。」と、ガイドの林さんのすすめてくれた長寿を一服吸う。

「ああウマイ。林さん、天気さえよければ、いろいろな山が見えて、眺めもいいのでしょねえ。」

「ええ、ナンゴダイサン(南湖大山)、チュウオウセンザン(中央尖山)、ゴウカンザン(合歓山)、それか

らギョクサン(玉山)。とってもいいですよ。」
ガスっていて見えない、それらの連山を眺めながら、僕の頭はカラッポだった。

玉山

赤津隆昭

広く、静かな、大人の道であった。疲れや、負けを知らぬ、更に大きな山であった。登山の山ではない。感動のない山と言える。自然とは、今までの観念の自然とは全くちがうものをみた。作られた造園・箱庭の趣きをも含んでいたようだ。" なかなか " という文字も出てくる。



道は整い、整いすぎている。

「ねエーちよつと写真を」とか、「いい景色ね」とい
いながら登る、歩く山か。登るといえば、この山の特徴
の一つは、「自然の道」を基調としている所にある。人
為的な、階段登山などは目的に入っていないのである。
あるいは、遠い場所を目ざすトラバースの山道のみ。

玉山。最後の一本にて「土」の顔をみせ岩をみせる。
四千の寒さ、風も出現。これが玉山か。なんとなく、印
象の山ではない気が。観光の山とも。しかし、想い出す
のは、次のこと。「玉山はいいな。日本の山とは全くち
がう。嘘がない。日本の山は頂上だと思っても、実は、
そう思った時から勝負に入るのだから。その点、この
山は、又、中国の山々は、みな堂々としている。」とい
う言葉。これが弱い正直な人間の言葉であった。「なに
、何かかすんでいるような。新人はどうなの。」「知
らない。」

四九一・三・七 赤津

玉山（主峰登頂）

竹中英二

前日（十九日）排雲山荘に着いた私たちは、翌朝暗闇
の中を、エレキを片手に主峰を目指して出発した。せひ
とも頂上で日の出を拝もうということであった。しばら
くは山荘から続く石畳の道、やがて山道を大きくジグザ
グに登り始めた。皆元氣。よく声が出ている。高度が増
すにつれて風が強くなり、大きな岩が眼につくようにな
っていったが、道はよく整っていたし、さほど険しさは
感じられなかった。あと一息。……頂上だ。六時三十八
分（高所ではよく止まる時計だが）。ここは三九九七m。
もちろん富士の山より高いのである。日の出には間に合
わなかったが、今まさにあたたかい太陽が、雲と雲との
間から顔をみせはじめた。すばらしい光景である。
大バノラマ。眼前にそびえる東峰、左手に北峰（か）。
しばらくこの壮大な自然に酔っていた私は、四〇〇〇m
の空気を求めて、さらに銅像によじのぼっていった。



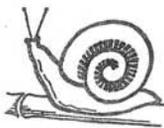
台湾の自然・玉山

神林 みゆき

玉山登頂は想像とはちがったものであった。観光地と
いうことだったので富士山のイメージが強かった。とこ
ろが、人といえは私たちくらいしかいないし、観光地に
つきものの空き缶やゴミもなく、いまわしい土産物屋も
ない。今の日本の状況とはかなりちがう。

何か一つのことが大衆化するというのはいいことであ
り同時にうらがなしいことでもあるということをつくづ
く思わされた。

緯度の高低が自然をこうも左右するのかと植生を目の
あたりにして驚いた。排雲山荘が三二〇〇メートルで主
峰がおよそ四〇〇〇メートル。だいたい富士山と同じく
らいまで植物が生い茂っている。それも、日本では野原
で見られるおおばこなどが高山植物といっしょに生育し
ているのだ。シラタマノキと思われる高山植物が東埔ま
でも道のわきにたくさん咲いていた。神沢先生はこの
花に「つゆの青空」という名をつけられた。エーデルヴ
アイヌもたくさん咲き乱れていた。往路で、赤銅色にた
くましく日やけた若者が、高砂ゆりを手折りつつ降り
て来るのとすれちがった。又、下山の日は、霧とも雨と
もつかぬものがバラつき、大きな、大きな山並が、わき
出てる雲に見えかくれしていた。あれら玉山の思い出は、
何かもうずいぶん昔のことのように、又は夢の世界のこ
とのように思われる。



台北市

佐藤明義

私たちが羽田を離れ三時間後に降りたった地は、台湾の首都台北市であった。第一印象は、以外にきれいだということであった。路上にタバコの吸殻が一つもなかったのは、驚かされた。

台北市の大通りの基点となっているのは、中華民国国民政府のすべての中心である総統府であるが、正面玄関には着剣した制服の衛兵が並び、今なお中共と戦時態勢にあり、戒厳令が敷かれている困だという感じを与えた。また台北市の繁華街は、鉄道線路に沿って約五百米程に並ぶ中華商場である。ここには、たくさんのお土産屋があり、水牛の角の細工物、高砂族の木彫人形など豊富で、夜遅くまで賑わっていた。おもしろいことに、それらの品々が店によって値段が違っていたのであるが、ここでは日本とは違って半値ぐらいに値切るのが常識だそうである。

それから私たちの味覚を楽しませてくれたのが、円公園と呼ばれる一大飲食街である。エビ、スッポン、カエル、ウナギ等の魚介類があったが、恐る恐る口に入れる

と結構いける代物であった。もっとも舌さえつけることもできない心の優しい先輩もいたが。

嘉義



平木裕実子

私は嘉義が好きだ。気に入っている。印象も強いし、なつかしみさえ感じる。台湾の他のどの街よりも。これはうそではない。真実である。ではそれはなぜか。

(1) 印象についての理由考察

何といても私はこの時―初めて嘉義へ行った時、新鮮な気持ちだった。常に貧欲に台湾らしさを求めて

いた。台北学苑の食事の印象も負けじといえども、やはり台北の整然とした感じよりは、嘉義駅を出て目の前にした、街の様子―暑さと汚なさがごちゃごちゃとした雰囲気―は私にとって、より台湾らしいと感じられるものだった。その街へ、街の雑然とした汚なきよりもさらに汚ない異様な団体が、とまどいながらも足を踏み入れた瞬間は、印象大でないわけがないでしょう。

他の街のことは、「フィールドワンダリングは山より疲れる」ということわざにもあるように疲れのためか、物事に対する新鮮な反応を失ない、これといった印象はない。

(2) なつかしみを感ずることについての理由考察

長く過ごし生活した場所に対する愛情が湧くのは人間にとって自然なことである。例えば私は、自分の故郷として、公害に犯された、美しくもなければ住みやすくない堺がやっぱり好きなのだし、毎日うろついている戸塚一丁目から部屋のあたり、憎々しげなランニングコースでさえも今ではもうよそよそしい感じはしない。それと同じように、嘉義は、何か、ただ行き過ぎただけの街よりも親しみが感じられる。嘉義を出発して山へ入り、再び嘉義へ帰って来た時の安心感、

同じ世界旅社の同じ部屋へ入ったときのなつかしき、出発前に食べたお店のお兄ちゃんや、氷屋のおぼちゃんそして、世界旅社の子供達にまた会えた時のうれしさは何ともいえないものがあつた。本当に、嘉義はまるで台湾の高田馬場のような感じがする。

(3) 嘉義を気に入っていることに関する理由考察と、気に入った事々の断片。

なぜ気に入ったかという点、これはもう好悪の問題だから、わけもなく、ただ好きだということだが、どこが好きかと問われれば、街そのものの雰囲気、空気。小ぎれいなところがちっともない投げやりな感じが好き。

路上の市場のざわめき、夜の屋台の立ちならぶ、その燈りの油くささとあたたかみ。etc. おしまい

(1) 『付録』 台湾の言語

私は台湾の人にあまり日本語で話してもらいたくなかった。言葉が通じないということは実に不安で不可解なものだけれど、異国の地で達者な日本語をきくのはさらにうす気味悪かった。私の耳に美しく聞えたのは、日本語も英語も知らない子供達のかん高い声の中国語でした。

(2) 台湾の人々(男と女のちがい)

ざっと見たしてみるところ、目につくのは、清楚な感じの女の人で、素顔の美しさが印象的。男の人は何か似たりよったりでごろごろしていたという鈍い感じしか受けなかった。これは何故か。充分に考えてみる価値があると思う。



郷愁の嘉義・朝市・露店

長谷部 政彦

あのバリと同じように嘉義の町も駅を中心に道路が放射線状に延びていて、デパートのようになしやれたものは

ないがありとあらゆる種類の店が長屋のようになって並んでいる。

駅から離れて行くにしたがって露店が増えてゆき、ある所にぱっと集中している。食べられる前のうなぎがいた。どじょうがいた。こいも、なまずも。蛙は結構いけた。食べてみて、これなら日本のどんな蛙も食えそうな気がした。なんだか名前のわからない魚がいっぱいいた。うれしくなって子供みたいにスキップしたり駆けたくなってしまう。豚の足が見える。鼻も、耳も。それを見てたら買付係の女子の顔が豚に見えてきた。あっ、豚が笑っている。吹き出しそうになってしまった。日本にあるような肉は見えなかったが、今思えば恋しい腸詰めがいっぱいつるさがる。

果物がある。バナナ、パイナップル、マンゴー、パイヤ、モモ、リンゴそれからナシにブドウ、よく洋画で見る大きなスイカ、まずかった竜の目のような竜眼、釈迦の頭のようなシャカ、うまいうまいといって誰かさんがさかに飲んだ安い甘灌汁、高くてまずかったヤシの実の汁、これらにミカン類。ニワトリを太ったおばさんがかかえて通る。今晚あの人々がニワトリの首を絞めて食ってしまうのだろう。コケッココ。

さらに行くくと屋台があって働きに出かける人達が朝食

をとっている。メニユーはいろいろだが、大体おかゆかパンが多いようである。パンの方は安くてうまかった。小麦粉の練ったものをうすく焼いてその間に揚げた棒状のパンをはさんで白い生臭いスープを飲みながら塩味にするそのパンを食べるのだった。

大体、台湾の店は朝早くから開き、夜、遅くまで開いている。子供が遅くまで道路なんかで遊んでいるのがよく見かけられた。それは酒屋の並ぶ街ではなくて露店なんかが並ぶ多くの所である。ほこりっぽくて汚れた街ではあるがそんなところに懐しさが湧いてきたのはどうしてであろうか。



阿 里 山

大 島 喜久子

嘉義発阿里山行の森林鉄道は日本の国電にも劣らぬ混み様であった。座席に座ることより、とに角列車内に乗り込めれば良しとせねばならない状態であった。だが、それでも、国電なぞとは大違い、亜熱帯から温帯へ、何度かスイッチ・バックして上っていく列車の、窓外の景色もそれにつれて草木が変化を見せ、幾度も抜けたトンネルの中で、何故かそれは電燈のつかない汽車であったのも、仲々に面白いものであった。

阿里山では小学校に泊めて貰い、校庭で子供達に混じっての草野球が人気であった。

かなりの高度だから、ヒンヤリしていた様に記憶するが、ここでは又、祝山に上って、日の出を見たりした。

ここから、いよいよ東埔へ、そこから排雲山荘へ、そして玉山登頂を目指して、歩き出すのであった。

高雄・台中のこと

寺島 弥生

高雄の旅社を出発し、観光バスでガランピ岬、懇丁公園を見学した。夜はレセプション…。その後、夜の高雄の町へと出る。日本の新宿・銀座といったところである。店頭には、日本製品が並らんでいる。電機製品、トップモードのドレス等々。

疲れたので、喫茶店に入った。サンデーなるものを頼んだところ、さすが台湾というだけあって、果物がゴタゴタと混ざってあった。驚いたのは、注文すると、すぐウェイトレスが、請求書をもってお金を取りにくることであった。

台中へとバスで向かう。カーステレオからは、日本語の歌がピンピン聞こえてくる。ついた旅社は、日本の旅館と変わらない。その旅社の一室に、とおされた。その部屋の窓には虫よけの金網がはってある。その目が大きくすぎるためにやたらと虫が入ってくる。いろんな種類の羽虫が、きたない話だが、ついには、ゴキブリまで登場。その巨大なこと巨大なこと。日本のゴキブリとは様相を異にしている。(これが台湾のちがいののだ。)

などとひとりで納得していた。

鵝 鑿 鼻

後藤 基保

八月二十四日星期六、昨夜未明からの豪雨が降り続く。高雄の新月旅社の二階の道路に面した部屋に雷光が閃めく。雨がとてもはげしい。朝食はおかゆと目玉焼とつけもの。八時二十分頃、バスに乗り鵝鑿鼻(オーロワンピ)に向かう。高雄の街は道路に水が二十cm位、川のように流れて、その中を車やオートバイや自転車走っている。私たちのバスは警笛を鳴らして走っていく。皆とて



も眠そうである。市街を抜けて椰子の並木道を走る。快適にとぼす。大半の人がシートにもたれて眠っている。私は、川の濁流や、パイナップル畑や村の人をみる為車窓に目をやっている。いたる所を水が濁々として流れている。雨の方は時に激しく、時にゆるやかに降り続けている。海岸を走ると水牛がいて、牛は平然と雨にうたれて草をはんでいる。鵝鑾鼻は、台湾の南端で陽がでていれば輝くような南洋的風景がみられるように、今日の激しい雨は気温を低くして海の清らかな波をみても泳ぐ気持ちさえ起らない。鵝鑾鼻では自由時間は三十分程しかとなく、燈台のある方へ歩く。海の彼方をみつめる軍服姿の立像がある。軍事重要地とかで、途中より奥へ入れず、台湾の北から南まで、足踏を残したのは良かった。

八月二十四日の日記より。



日月潭とその周辺

大島 喜久子

雨が降っていた。何処か大きな殿の中で昼食をとったのを憶えているが、あれは文武廟だったのであろうか。何か、土産品売場の玩具ばかりに気を取られていた様な気がする。が、或るいは、それは玄奘寺でのことだったか。日月潭をバスの窓から見たような、見ないような、多分見たのだろう。

とにかく、台湾のほぼ中央に位置する天然湖である日月潭と周辺の文武廊や玄奘寺を訪れた日の記憶は、その日中降り続いた雨の中の風景にも一致して、非常に朦朧としている。唯、印象に残っているのは、書の美しさであり、台湾の雨、そのものである。どこかの壁面に掛かっていた書を、流麗さはないが、キッチリした字体だと思っただけを見た。漢字の美しさに惹かれて「小学弦歌選本」なるものを買ったのも、その日だったかもしれない。

金山での交歓会

岸 里 悟

どこまでも続く青い海原。南国の暑い陽射しを浴びて思いつき輝く砂浜。遠方には、ものの見事に曲がりくねった岩の芸術品。ここが金山なのだ。

夏合宿の最後を飾る金山でのキャンプファイヤーの日。現地の大学生との交歓も楽しみの一つ。バスの中にはさつきから台湾の学生十数名が乗っている。それにしても高まる胸の鼓動は、英語がうまく通じるだろうかという不安のためか。現地の大学生を乗せたために、新人は立ちっぱなしで疲れ気味だが石田の目だけは、女学生を追って輝きをみせている。彼も好きものなのである。

キャンプ場は海から離れているが、よく整備されたすばらしいところだ。新人が天幕を張る間に、先輩たちはキャンプファイヤーの準備をする。むこうの学生たちは、すぐ近くの小屋に泊まることになっている。

まだなごんだ気分には、なれないらしく、おのずから境界線ができる。夕方、スキヤキを作るころになって話し始める。みんな慣れない英語で必死なのです。こういう時には、羞恥心のないやつらが第一線に立つ。僕をほ

じめ倉品、三浦、寺島、神林：いや、いや神林さんは知りませんよ。彼女は機上で実証ずみの実力者なのだから。五十人分ものスキヤキを作るのだから、さあ大変。チャンコ鍋を作っているようなもので、かき回す腕が疲れる。そこで母に甘える気持ちから台湾女性、楊（ヤン）にやらせる。「モアーバワフリー」とはよく言ったものだ。

いざ食べる時になってむこうの学生は、舞台裏を知りすぎているせいか、すすめてもうれしそうな顔はするものの全く減らない。責任を感じて思っておせば、三つの鍋の味が違いすぎるので、混ぜあわせただけけれど、それがいけなかったのかなあ。まあ、いいじゃないですか。早稲田関係者は当然のような顔で食べているし（中邨氏はテントで熟睡されていたようだが）、神沢部長だって笑顔をみせながら食べておられるではないか。（ほかの理由かもしれないが。）

英語を習った年数は同じらしいが、話すのはむこうの学生にはかなわない。発音もきれいだし。発音の確かさを見るためには「クイントリックス」をやらせてみるのが一番。我々は何ひとつ、むずかしいことが話せない。中学生の英語だ。だが、さすがに倉品先生だけは本場の英語教師だけしか相手にしないという感じで話している。たいしたもんだと耳を傾むけると、彼もやっぱり二句切

れ、四句切れの万葉調の英語でした。いや、度胸は立派です。

暗闇は海からやって来た。輪になって点火を待つ。「家路」の斉唱の中をまことしやかに火が運ばれてくる。

さあ点火。同時に、みんなの顔をくっきりと映しだす。

僕は予定通り目をつけていた女の横にぬけぬけとすわる。

彼女たちは楊(ヤン)と象(シー)。「マイネームイズキシサト」と自己紹介したが、彼女らは Kiss Satō.

と感違いしたのかしきりに笑う。華蓮大学の三年で独文

学の専攻とのこと。彼女たちに「年が同じなのに、なぜ一年なのか。」と聞かれた時、浪人を説明するのに一苦

労。「インジャパン、エントランスイグザミネーション

イズベリーディフィカルト、アイフェイルドインニット、ネクストイヤー、トライアゲイン」こんな調子なのです。

紹興酒が飛びかう。みんなはろよい気分になっている

よう。いよいよお国の唄が出はじめる。「雨の降る夜に咲いてる花は風に吹かれてホロホロ落ちる。」台湾の民

謡らしいがなんと诗情豊かな唄だ。ホロホロの感じが胸

を打つのです。さっきから、となりのシーちゃんにお酌

をしてもらって飲んでいますが、この「お酌」の英語がま

た大変。身ぶり、手ぶりで強引にわからせる。台湾の学

生は酒、あまり飲まないのかな。そんな感じがするので

す。慣れてないというか。シーちゃんがギター片手に大活躍。高音の美しさに我泣きぬれる。どうしてこうお酒を飲むと僕は感傷的になるのだろう。僕ってやさしい人間なんだなあ。饒舌になるのは誰かさんだけれど。

我々の仲間も即興で歌いだす。「骨まで愛して」もう

十年ほど前この歌が台湾ではなぜかもてる。我々が

二番の歌詞をわからないでとまどっていると、人のよき

そうな陳先生がはげ頭を乱して歌ってくれる。火のまわ

りてジェンカもした。わけのわからぬアメリカ人教師の

踊りもあった。ここへ合宿にきていた合唱団の飛び入り

もありキャンプファイヤーはクライマックスをむかえる。

終った後は、恒例といわれるが、先輩をかついしてい

て池に入れることが始まる。みんな酒の勢いで何もこわ

くない。四年生だけを投げ入れればいいのだけれども必

死のものがきあって新人、二年の犠牲者がでる。次々に

四年部員を探しあてては投げ入れる。まさに狂気だ。

翌日、楊に日本学生の印象を尋ねたら、「ボライトア

ンドクレイジー」という答えが帰ってきた。クレイジー

とはこの行動のことを言ったのであろうが、的確な指摘

ではないかと思った。日本民族は表面の礼儀正しさの内

に狂暴性を隠し持っているのである。これがかったの中

夜も更けて、台湾の学生数名と海辺に散歩へゆく。だが押し黙ってみんな海をみつめてすわっているだけ、英語はもう沢山だという顔をして。日本が恋しいのかい。母が恋しいのかい、みんな。

朝だ。にぶい朝がやってきた。祭りの後の疲れを全身に表わして。食事の雑すいもまずそう。相変らずはりきっている陳先生が朝から台湾の学生とともに歌いだす。その後は記念撮影。一生の記念にと、個人的理由からヤンとシーの間に僕が入って「ハイパチリ」ワッハッハ。やっただ、エルビス。

この一日、彼らの何がわかったのだろう。また彼らは僕たちから何を感じ取ったのだろう。いずれにせよ人生のたった一日でしかないがキャンプファイヤーを現地学生といっしょにやったということは事実なんだ。台湾へきたことにより、すこしではあるが、ぜいたくに走り続ける日本丸の良さもわかったし、欠点にも気づいた。そこが海外へ出るいいところなのだろうか。バスはすでに金山をあとに台北市内にむけて走っている。その中でふと考えてみた。

……東京行きノーウェスト機は飛び立った。だんだんと台北の街が小さく遠のく。母のいる東京へむかっているというのに、こみあげてくるこの哀しさはなぜなんだ

ろう。

台北よサヨウナラ……………

早稲田大學同學會のこと

倉品 康夫

同學會のことに關しては、神澤先生の、『同じ早稲田に學んだというだけで……』ということにつきませう。高雄をふりだしに台中、台北。移動のバスの中ではありません。ばら昼寝をして、夜のレセプションに臨んだものであります。

私たちは、訪華親善徒步旅行隊、變じて、ドサまわり



喰い逃げ徒歩旅行隊とならぬやう、日本へ帰ってからもあの時の有難さと、あの恩を忘れることなく禮を盡くさねばならぬと思うのであります。



バス・汽車での旅

三廻部 秀 男

雪山、玉山登山を計画通り終え、東埔で山中最後の夜をむかえた。テントの中でミルクをわかし、歌をうたつて過ごした。

翌日、雨の中を森林鉄道で阿里山に下山、さらに予定を変更して、その日のうちにチャイまでいっきに下る。

降り続く雨による土砂くずれで、チャイまでの鉄道が不通となる前に、下りてしまおうというわけだ。果たして、僕たち一行がチャイに到着した翌日には阿里山、チャイ間は不通となった。

そして、チャイから高雄、台中、金山、台北と汽車とバスの旅が始まるわけであるが、高雄までの汽車の窓から見えた田園風景も、またガランビのみさきも海も、シヨウカシの大仏も、自分の怠惰のためか、疲れ(?)による感受性の欠如のためか、台湾全般や名所、旧跡について何の知識があるわけでもない、自分でもあるし、これといった興味があるわけでもないから、ただ目の前を通り過ぎただけのことなのであった。二度と来ぬかも知れぬこの地に今、居るのではないか、眼前に展開するのは、異国のやたらに見られぬ風景ではないのか。せっかく初めて、飛行機に乗ってここまで来たんだ。何でも見てやろうと、ねむくて、ねむくて仕方ない自分に言い聞かせてはみるのだが、いかんせん、印象も何もありやしない。

結局、自分には、いわゆる台湾の名所とか、風光明媚などといったものに、自分と何らつながりを見出すことができず、実感として、こびりついているのは、炎天下の屋台につるされた肉のかたまりや腸づめであり、あ

ふれるばかりのくだものであり、それらの生の生のおいである。また赤の目立つ街並や、わりばしでなく使い古されたはしで食わせる、油に汚れうすぐらい、小さな食堂である。そして、孔子びょうやホテルの前で、くだものや、花を半ば強引に、また、誰が教えたのか、かたことの日本語で「これおいしいですよ」と小学校の下級生程の小さな子がけんめいに商売する姿だった。台湾の街は、ものみな、油とほこりをかぶったようで、赤や青の豆電気が点滅する仏像をはじめとして、異様な、原色のイメージをかなり強く抱かせ、清楚、簡素、かれた感じといったふんいきはまるでないのだった。それらは全て、当然自分の住む、日本との比較の上から生じたものでしかないだろうが、新めて良い意味でも悪い意味でも日本を見直すということは、こういうことなのかなと思ったりもしたのだ。

終り

台湾での食事

霜鳥 茂

最初に飯を食ったのは、あの忘れもしない学苑であった。その味のすばらしかったこと。翌日からは、できるだけ口の中で停止させず、臭いがかがないようにと苦労したものでした。それから何日か耐えて、やっと山に入り、まともな飯が食えると思って、小さな胸をとぎめかしたのでした。ところが、食料係は、肉の代りに異様な臭いのする腸詰めらしきものを買い込んだのでした。これにはデリケートな私の口が受けつけず、食当のとき、味と臭いを消すため胡椒をガバツと入れたものでした。山から下りて、全員で晩飯を食べに行った時は楽しかった。一つのテーブルに八人くらいずつついて、その十六の腫の見守るテーブルの上へ、一枚のでっかい皿が置かれるやいなや十六本の手であっという間に処理されてしまうのであった。その戦いの激しかったこと。ワンゲルでなせスプーンを武器とよぶのか理解できませんでした。尚、この悲惨な戦いの結末は、あまりにもみっともないという事で一人ずつ順番に、かつ正確に八分の一だけ取ることで和解いたしました。





南のくに

小野逸子

「南のくに」は、「南国」と書くより異国的な感じがする。

台湾は、飛行場に降りた時は、羽田から三時間余りということもあって、全然外国という感じがしなかった。

しかし、台北、嘉義、高雄の市街、阿里山、玉山といろいろ歩きまわるにつれて、日本を離れたのだと、実感される。

特に印象に残ったのは、台北を発つ最後の夜である。

明日は日本だと思い、ことさらに網膜に焼きついたのでかも知れない。

円柱形の高い幹をもつ椰子の木と、その上に照る黄色の月。椰子の木は、コンクリートの電柱のように、そして月は、蒼白くも赤味がかってもない、まさに黄色。

「南のくに」の夜を歩くというのは、なんと幻想的なことであろうか。



新・台湾紀行

石田 泰

八月十二日～三十一日の二十日間にわたる台湾合宿を

終えて、今浮かんで来るのは、金山海岸の帰りに、ほんの三十分位しか、そこで楽しめなかったが、あの基隆海岸の絶景だ。美人出浴という名の岩の突起は、巨魂の岩から、あちこち丁度、きのこが、生えてる様な格好をしていて、その婦人の頭には、無数の穴があいているのです。偏に、自然と歴史の賜物なのです。海は、もう、筆舌に尽くし難い程。風の激しく頬に当る快感、それを運んでくる海の水の色。日本ではちょっと見られないエキゾチックな感じだった。でも少し心残りなのは、その絶景に行く道の脇の小高い丘の斜面には、セメントで出来た四角い窓のようなものが、十数個あった事です。そして、丘の木の上で、兵隊さんがギターを弾いていました……。

合宿中、最も台湾らしい、いや、台湾といえ、我々がそれに対して持っている独特なイメージに、叶った所は、嘉義だった。朝早くから聞こえる車のクラクションの音や、そのエンジンの音、自転車をこぐ音、人々の声などが調和し、何かこう、不思議な雰囲気をもし出していた。三角の日よけ笠をかぶり、自転車の後ろに、人を乗せる幌のようなのをつけた、いわば、タクシートの自転車版をこぐ赤銅色の顔したあの人々が、尚一層、強く印象に残っている。また、町は、まさにきれいなそのもの。

タバコの吸殻は一本も落ちてないし、まして紙屑の字もない。日本へ帰って来た時、新宿の駅で、はっ、この事に気づいたのでした。でも、今は、もう見慣れてしまい、もうその感覚は麻痺し切ってます。

次に山行中で一番感じた事は、高山植物の美しさ、豊富さでした。エーデルワイスも初めて見たし、名も知らぬ小さな白いつぼみのような清楚な感じのする花、紫色した大人の感じを持つ花、道端にうなじを垂れて、我々をチラッと見つめるような花など……。ここで花の話が出たんで、そろ、女性論めいたのがぼくの脳裏で、焼きまわしが始まった様です。

“台湾の女性は美しい”

これが、偽わざるワングル全男子部員の、溜息まじりの言葉だと思えます。その原因は何か？ ジャーン!! さあ、何でしょう。次の五つの中から最も適当だと思ふものをいくつかあげてください。

- ① いつも日本人しか見れないから。
- ② みんな片想いか、全然恋人がいらないから。
- ③ スカートの短かったから。
- ④ ③に加え、足がすばらしかったから。
- ⑤ 長い山行生活から来る、山行者共通の病的なものに依るから。

正確は、それぞれ、各人の「センス」に、おまかせ致しますヨ。じゃ、お元気で!!



台湾から……………へ!

石井 照久

子供の頃、毎年オヤジが貰らってくる、ある石油会社の宣伝用のカレンダーに強く魅せられていた。そのカレンダーには、月ごとに違った美しい風景の写真がついていた。

それは、ロッキーの湖や針葉樹林であったり、アルプスの峰々、春あさいチロルの小川のせせらぎであったり

した。気に入った風景があると、その月が終わっても、切り抜いて、机の周囲の壁にベタベタはりつけた。

そして「いつかここに行くんだ。大人になったら絶対行くんだ。」と夢みたいなことを考えて、何時間もその写真の前で過ごしたものである。しかし、そのカレンダーがもらえなかったり、もらっても前ほど良くなかったりするうちに、いつしかそんな夢のようなことも忘れてしまっていた。

今度、初めての夏の合宿を、台湾という異国の地で経験した。私にとって飛行機に乗るのも、日本から海外に出るのも生まれて初めてのことであった。

台湾で見たこと、経験したこと、感激したこと、悔やしかったこと、色々あった。

しかし、今、目をとじても、それらは少しも浮かんで来ない。なぜなら台湾合宿が、私の奥底に埋ずもれていた何かを、呼び起こしたのである。それは、未知なる国、まだ見ぬ美しい風景への、あのカレンダーの風景への強い、あこがれであった。

あの昔、あこがれた所に、その気になれば行けるんだ。海外に出ることは、不可能な夢物語ではないのだと、台湾合宿が教えてくれたのである。又、それに輪をかけて私に海外への情熱をかきたてたのは、九月二十五日に羽

田からネパールに出発された二十四代田所OBである。OBの飛行機が灰色の彼方に消えていくのをながめながら、「俺もやるぞ、何年か後こうしてみんなに見送られて海外に行くんだ。」そればかり考えていた。

現在、自分はまだ新人と呼ばれる半人前である。身につけなければならぬことが山ほどある。海外に飛び出せるまで何年かかるであろうか。しかし、いつかその日が来ると信じて、いや来させるのだと、毎日少しづつ、トレーニングに資料集めに活動している。

己のすべてを、青春のすべての情熱を、海外合宿という目標に向かって燃やしつくそうと思っている。まだ台湾合宿は終わってはいないのだ。新人が、我等新人が成功させるのだ。何年か後、私達が踏みしめている異国の地は、緑の大草原であろうか、オーロラゆらめく極寒の果てであろうか、しゃく熱の砂漠か、それとも白銀輝く峰々か、それとも……………



經過報告

合宿までの部活動概要表

48年10月

1日	委、新人との話し合い(雑談、前年度夏合宿について)	
2日	部員総会(高田牧舎)	
3日	委、(トレーニング、メイン合宿、 海外合宿の可能性)	昼休みを利用して、トレーニング、合宿 について等、新人との個別的に話し合 う。(7名)。
4日	委、(年間の合宿の組み方)	経済的なもの、部全般のことについて 新人の希望を聞く。
5日	連盟委員会	
6日	委、(トレーニング、海外合宿、秋合宿)	
7日	委、(年間活動、全般について)	
8日	監督、コーチの話し合い(年間活動概略)	
9日	部員会(女子との話し合い、新人との話し合い)	ト
11日	委、(ワンダリングについて、秋合宿、今後の予定)	レ
	{	
14日		谷川岳 ワンダリング (2次夏)
15日	委、(秋合宿、系の活動、部の改造)	ニ
16日	委、(秋合宿、海外合宿)	ン
17日	委、(係活動)	グ
18日	部員会、(年間活動について、新人に求めるもの、新人の抱負)	
20日	青木監督宅にて話し合い、記録会(4km)	
22日	部員会、(秋合宿について)	
25日	{	
		秋合宿、荒川三山
31日		

48年11月

2日	部員会(秋合宿反省)		
4日		山	
5日		小屋	木村コーチとの話し合い
7日	委(台湾合宿のすすめ方)	負	市川OBとの話し合い
8日	委(台湾合宿のすすめ方) 新人募集の話し合い	荷	
8日			係活動の決定、部員
10日	委員会(台湾計画書作成、資料収集方法、係の決定)		への説明
12日	部員会(台湾の調査の部員への分担発表、資金調達について、今後の予定)		
13日	新人募集の話し合い		
14日		ト	外務省中国課丸氏と面接
15日	体育局教ム主任と面会	レ	武田OB、土屋(正)OBの話し合い
16日	新人募集の話し合い、連盟委員会	ニ	山口OB、亜東観光協会、交流
		ン	協会に行く
		グ	
19日	トレーニングについて関先生と会う。 新人募集、新歓との話し合い 台湾調査の提出		
20日	委(トレーニング、部室改造、台湾合宿、その他)		
21日	部室改造 新人募集の話し合い	草	
22日	委(三貴にて木村コーチと)	稻	
23日		田	吉良OB訪問
24日	委(台湾合宿の調査確認、今後)	イ	
27日	委(台、活動地域、選択フィールド)	祭	
		ト	
		期	
		間	
		↑	
28日	連盟委員会		ト
29日	新人募集話し合い、台湾資金を集める		レ
			ニ
			ン
30日			富井OG訪問

48年12月

1日		
3日	委(春合宿、台湾合宿それぞれについて検討)新人募集話し合い	
4日	委(台湾、春合宿、冬休みについて)	
5日		ト レ
6日	新人募集話し合い、アルバイト年間計画表の提出	
7日	委(委員会の反省)	リ
8日	委(台湾、来年度の新人の扱い方)	ニ ン
9日	OB交換サッカー大会、コンパ	グ
	以下冬休み	
	バイト、スキーワンダリング、試験勉強にあてることにする。	
	台湾合宿準備	

49年1月

1日	
{	冬休み
5日	
7日	委、春合宿
8日	委(試験前後の予定、台湾合宿で残されているもの)
9日	部員会(試験を前にして、新人募集、新歓)
10日	} 自主トレ
11日	
21日	} 学期末試験
{	
31日	

49年2月

1日		
{		学
5日	委(春合宿について)	期
6日	委(台湾合宿経と明細)	末
7日	委(主旨の検討、春合宿計画、ガントチャート作成)	試
8日	委(台湾、主旨検討)	験
9日	委(ガントチャートの作成)	
11日	委(台湾趣旨確認)春合宿	
12日	部員会(春合宿スクーリング)	
13日	部員会()台湾合宿の正式承認	
14日	部員会()	
15日	部員会(春合宿、新人募集計画、新歓、台湾でのフィールドワンダリング)	
16日	委(春合宿について日程変更)	
21日	} 春合宿	
{		
31日		

49年3月

1日	} 春合宿
{	
4日	

49年4月

1日	
{	新人募集
8日	
9日	新人説明会
10日	委(新歓、春合宿反省、台湾)

10日	新人募集	国鉄ストのため 自主トレ		
13日				
15日 委(新歓について)				
16日 委(台湾、フィールド、ガントチャート確認、積立金)				
17日			トレ ー ニ ン グ	
18日 代表委員会 台湾フィールドワンダリングについて話し合い(4、3、2年生)				新歓調査
19日				
20日 新人歓迎コンパ、新歓の確認宇都宮営林署へ				
22日 新歓スクーリング				
23日 部員会(春合宿反省、新歓について)				
24日 連盟評議会				
25日				
26日				
27日	新人歓迎合宿			
30日				

49年5月

1日	バ イ ト 期 間 ↓
4日 躍進早稻田の会	
6日	
8日 委(新歓反省、台湾準備合宿)	
10日 台山協、蔡総幹事の来日	
13日 部員会(新歓反省、台湾合宿)委(準備合宿、台湾)	
14日 連盟評議会、日山会へコース資料	
15日 青木コーチ日程表、コースについて話し合い、部室改造	
16日 総長すいせん状をいただく	

17日	台湾の写真影えい(全員)、委員会(台湾の予算計画) 新人コンパ	
18日	蔡氏へ渡す計画書作成	
19日	委(準備合宿計画、台湾フィールド、贈呈品)	
20日	委(今後の日程表)	
21日	銀座第一ホテルで蔡氏に会う、連盟評議会	
22日	蔡氏離日、見送りに行く、部員会(準備合宿、渡航手続について)	
26日	記録会(皇居5km)	
28日	部員会(前日の台湾遠征の概略、パスポートの手続について、準備合宿について)	
30日	沢田OB訪問(保険の件)	
31日		海外準備合宿 早慶戦

49年6月

1日		
2日		海外準備合宿 早慶戦
3日		
4日	連盟委員会、台山協から招へい状届く	
8日	積立金バイト計画表の提出	
10日	委(準備合宿反省)新人体力測定	
11日	OB会へ台湾合宿のあい拶状を出す	
12日	部員会(準備合宿反省、台湾合宿について連絡)	
13日	青木コーチと話し合い(台湾での日程)	
15日	青木コーチとの打ち合わせ	
17日	内田コーチと資金の話し合い	
18日	青木コーチとコース・日程の話し合い	
20日	内田コーチと資金の話し合い	
21日	青木コーチとコース・日程の話し合い	
22日	予算、コース日程について監督、コーチとの話し合い	
27日	大島海運に予約	
28日	台湾対策委員会の方々との話し合い	
30日	記録会	

49年7月

- | | | |
|-----|------------------------------|-------|
| 12日 | 委(今後の予定を詳しく決める)トレ合宿、係の仕事 | |
| 20日 | 部員会(台湾合宿について、ワンダリング報告、今後の予定) | |
| 21日 | | } 富士山 |
| 22日 | 部員会にて部長・コーチ・田島OBとの話し合い | |
| 23日 | 里見先生と面会、部長、コーチと話し合い | |
| 24日 | 部員健康診断 | |
| 25日 | 台湾合宿保護者同意書作成、ビザ受理13名 | |
| | (| |
| 29日 | 台山協より南湖大山、中央尖山不可能との手紙 | |
| 30日 | 林氏へ手紙、監督・コーチと話し合い | |
| 31日 | 台湾対策委員会との日程・コースについて話し合い | |

丁
妙
高
実
技
↓

49年8月

- | | | |
|-----|------------|------|
| 1日 | | トレ合宿 |
| 2日 | 結団式 | |
| 3日 | | |
| 5日 | 上級生先発隊出発 | |
| 10日 | 女子・新人後発隊出発 | |

公
文
書

此の度、春日親善のため、本大学ワンダーフォーゲル部が貴國に遠征いたすことに相成りました。

神沢教授を団長とする学生・OB三十九名の隊員がワンダーフォーゲル活動を行い、校友諸兄並びに貴國学生と款を交えることの出来ますことは、誠に喜びに盡えませんが、隊員がいろいろお世話に相成るとと存じますが、何事よろしくお願い申し上げます。

右略儀をがらご挨拶申し上げます。

昭和四十九年五月

早稲田大学

部長 村井 資

長



殿

早稲田大学

說明：一、依據 貴部申請，經本會常務理事會議審查所提出合宿計畫書通過在案。

二、活動期間：自民國六十三年八月五日至八月卅一日。

三、有關安排及嚮導貴隊活動事宜，將由本會國際連絡組負責辦理。

理事長 閻百鍊

昭和49年度 台湾合宿関係資料

- ① 台湾合宿計画書・資料
- ② 台湾合宿コース資料
- ③ 台湾合宿収支計画書・個人負担金納入予定表
- ④ 台山協への問い合わせの手紙及びその返答
- ⑤ 台湾の山と山脈(台山協編)
- ⑥ 訪華登山の思い出(//)
- ⑦ ②以外のコース資料
雲海10号 法政大学ワンダーホーゲル部
山溪 1974-5、1969-4、1969-5、1969-6
その他日山会に多数有り
- ⑧ 台湾遠征報告書(S37年度) 早大ワンダーホーゲル部

昭和49年度 台湾合宿利用関係機関(主なもの)

- ① 台湾山岳協会
台北市 州街三十号三楼510122 TEL(572)4711
- ② 亜東関係協会東京弁事所
港区東麻布1-8-5 平和堂ビル TEL(583)2711~5
- ③ 財団法人交流協会
港区芝茸手町1番地ヤマコビル8階 TEL(473)1501~5
- ④ 台湾観光協会日本事務所
千代田区幸町1-1 帝国ホテル東舎官2165室 TEL(502)7911
- ⑤ 外務所アジア局中国課
- ⑥ 日本山岳協会
渋谷区神南1-1 岸記念体育館 TEL(460)2006
- ⑦ 日本山岳会
- ⑧ 国会図書館地図室

編集後記

この一年間、部の総力を台湾合宿に結集して来ました。今思えば、色々な事がありました。しかし、どうかこうにか合宿を無事に終えることが出来ました。そして今、この報告書を発行するにいたしました。決して、上乘の出来映とは思えません、私達にとって大切な思い出がいっぱい詰った本です。この本が将来の海外活動に役立つくれればという気持です。また合宿にご協力下さいました各関係機関の皆様方の御厚意にも答えたいと思います。最後に、小生の下宿が火災にあい、資料等の焼失によって発行が大変遅れましたことを深くおわび申し上げます。

編集委員

矢口 哲三・木代 哲朗

新谷 博・神林 みゆき

台湾合宿報告書

発行日 昭和五十一年二月

発行者 早稲田大学体育局

ワンダーフォーゲル部

発行所 東京都新宿区西早稲田一丁目

早稲田大学体育館内

印刷所 千加真印刷株式会社

中央区日本橋茅場町三十一番五

電話 六六八一七五〇八代